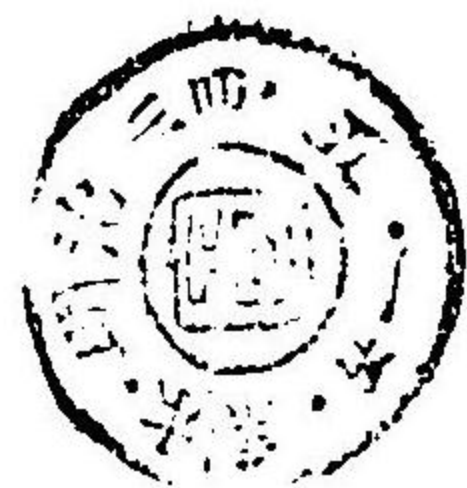


桂
湖
村
講
述



評
釋

完



東京專門學校藏版

漢詩評釋

目次

唐賢三昧集	自	一	七	頁
李白詩評釋	自	一	七	
杜詩評釋	自	一	三	
張詩評釋	自	一	三	
韋詩評釋	自	一	三	

漢詩評釋目次終

漢詩評釋

桂湖村講述

『唐賢三昧集』

此の集は清の王士正が編める所なり、王士正清初の詩風か宋派を學ひて語録史論を以て詩と爲すの餘餘を再燃せんことを憂ひ、神韻の説を唱へて以て時弊を匡救せんとして此の集を標舉したり、編集の意既に歴史的に詩を觀て其の變遷を詳にし因革を窮めんと欲するにあらす、從て此の集を讀みて直ちに唐詩此に盡きたりと爲すことを得ず、然れども詩は元來情感に訴ふるものにして智感に訴ふるものにあらす、興趣を主として理窟を脱す可きものたるを知らば、神韻の説は詩の詩たる詩を知るに於て學者に益有りと謂ふ可し、是れ吾か先づ此の集を説く所以なり。

唐賢とは李唐の詩人を尊稱したるなり、三昧は佛典に出づ、調直定といひ、正定といひ、正受といふ、三昧の謂なり、三昧とは思を専らにし想を寂むるをいふ、思專な

これは則ち志一にして分れず、思寂なれば則ち氣虛キチくして神明なり、氣虚ければ則ち智其の照を恬ツツカにし、神明なれば則ち幽として徹せざるなし、斯の二のものは乃ち是れ自然の立符、用に一にして用を致すなり、是の故に間字に靖恭して而して物を感じ、靈に通す、心を御すること、惟れ正し、動けは必ず微に入る、修を假りて以て神を凝し、功を積みて以て性を移す、是れ古人か三昧の義を説ける所なり、王士正採りて以て此の集に名づく、意の在る所以て知る可し。

序

序は緒なり、一篇の文一集の緒を開くなり、此の序は王士正の自選なり。

嚴滄浪論詩云、盛唐諸人、唯在興趣、羚羊挂角、無跡可求、透徹玲瓏、不可湊泊、如空中之音、相中之色、水中之月、鏡中之象、言有盡而意無窮。

羚羊は本朝に所謂かもしかにして羊の類なり、湊泊は湊は聚なり、泊は止なり、空中以下の四句は同一意の比喩なり。

嚴滄浪は趙宋の嚴羽といふ人なり、滄浪詩話一卷を著す、其の詩を論するや禪を以て喩となし、専ら妙悟を主とせり、蓋し當時經學を講するものの作る所の詩、膚

淺粗疎に流れ、殆ど觀る可きの佳篇なし、詩人に江湖の一派有り、雖も徒らに雕鏤細碎を事として、冗沓に陷るのみ、嚴羽此の弊を矯むるに意有り、故に一味の妙悟を拈出して、詩家をして反顧せしむるなり、嚴羽の時と王士正の時と稍、其の詩弊を同くす、王士正か此の序主として嚴羽の語を援くる所以なり。

嚴羽の盛唐と稱する時代は唐の睿宗の景雲年間より先天を経て玄宗の開元天寶に通していへり、學者詩を説くに多くは唐一代を分ちて初盛中晩と爲す、嚴羽は唐初躰、盛唐躰、大曆躰、元和躰、晚唐躰の五躰に分別せり、然れども此の區別は未だ至れりといふ可からず、既に唐初盛唐晚唐といふ、宜しく大曆元和と稱せずして中唐といふべし、此の弊を脱したるは明の高棟なり、高棟は唐詩品彙を編むに當りて、高祖の武德元年唐の建國より玄宗の開元の初に至る迄を初唐とし、開元元年より代宗か大曆の初に至る迄を盛唐とし、大曆元年より文宗の太和九年に至る迄を中唐とし、文宗の開成元年より昭宣の天祐三年即ち唐の滅亡に至る迄を晚唐と定めたり、此の區別は齊整せるものと稱す可きも、詩は爾く截然として年と共に風躰を異にす可きにあらず、故に間、後人の譏謗を招く、要するに高棟か

區別の客觀的に傾きたるは其の缺點なり、嚴羽は唐詩を五体に分ちたれども亦た左の如く曰へり

大曆以前は分明に是れ一副の言語にして晚唐は分明に別は是れ一幅の言語なり。

盛唐人の詩も亦た一二晚唐を濫觴する者有り、晚唐人の詩も亦た一二盛唐に入る可き者有り、要は常に其の大概を論ず可きのみ。

大曆の詩高きものは尙未だ盛唐を失はず、下きものは漸く晚唐に入る。

乃ち知る嚴羽か所謂盛唐は、大都景雲より下四十六七年間を概稱したるも、必此の年間に限らずして、専ら唐詩の極盛時期を意味し、主觀的に區別したるものなるを。

興趣 性情に對していふ、性情は裏にして興趣は表なり、嚴羽曰く詩は性情を吟咏するなりと、而して嚴羽は人の私慾に蔽はるる所の性情を認めて直ちに以て無邪の情性と爲さんことを慮り、爲めに又左の如く曰へり

詩に別才有り書に關するに非ざるなり、詩に別趣有り理に關するに非ざるな

り、然れども多く書を読み多く理を窮むるに非ざれば則ち其の至を極むる能はざるなり。

王士正は此の語を解するに古人か、不着一字、盡得風流の語と、讀千賦則能賦の語とを以てして、終りに學力深くして始めて能く性情を見る此の一語是れ造微破的の論といへり、一字を着けずして盡く風流を得るもの即ち興趣の説なり。

羚羊挂角二句空中之音四句王士正は此の義を解して、内典所云、不即不離、不黏不脫、曹洞宗所云、參活句是也、といへり。

透徹 正法眼を具し第一義を悟るの謂なり、嚴羽か所謂理路に涉らず言筌に落ちざるものは是れなり、之を名けて玄妙といふ。

言有盡而意無窮 王士正か神韻の説は即ち此の義なり、興趣と二にして不二なり。

司空表聖論詩亦云、妙在酸鹹之外。

司空表聖は唐の司空圖といふ人なり、王士正か此に引用せる語は司空圖か李生に與へて詩を論ずる書より出てたり、今左に之を摘録して以て解釋に充つ。

文之難而詩尤難。古今之喻多矣。恐以爲辨於味而後可以言詩也。江嶺之南。凡足資於適口者。若醃非不酸也。止於酸。而若醃非不鹹也。止於鹹而已。中華之人所以充飢而醇饒者。知其鹹酸之外。醇美者有所乏耳。彼江嶺之人。習之而不辨也。……近而不浮。遠而不鑿。然後可以言韵外之致耳。……儻得以全美爲上。即知味外之旨矣。酸鹹の外別に醇美の者有りとは、語言文字の外一種無窮の妙味有るをいふ、韵外の致といひ、味外の旨といふは共に同義に出づ、所謂神韵の謂なり。

康熙戊辰春杪。歸自京師。居宸宸翰堂。日取開元天寶諸公篇什讀之。于二家之言別有會心。錄其尤雋永超詣者。自王右丞而下四十二人。爲唐賢三昧集。釐爲三卷。

清の聖祖の康熙二十七年戊辰は王士正五十五歳なり、正月太皇太后崩す、詔有りて四品以上京朝官在藉の者をして皆京師に赴かしむ、王士正時に詹事府少詹事兼翰林院侍講學士たり、詔を聞きて京師に朝し、三月郷里に歸る、文に「康熙戊辰春杪京師より歸りて宸翰堂に居る」といふは此の事を記せるなり、三月は春のどまりなり、故に春杪といふ、宸翰堂は王士正か書堂の名なり、康熙十七年三月御筆の

『存誠』の大字幅を賜はりたることあるによりてかくは名けたるなり、郷居無事なるに因りて、日に唐の開元天寶時代の諸家の詩を取りて之を讀みたるに、前の嚴羽と司空圖二家の言に於て別に心に會得する所有りたるに由りて、やかに其の詩篇中にて右の方針を以て尤も雋スグル、永其の聲を永くすの永、超コユル、詣妙境に詣るの詣の作を撰録したるに、王右丞といふ人を始めとして四十二人を得たり、名くるに唐賢三昧集を以てし、釐オカ、整ト、理メめて三卷となしぬとなり。

漁洋年譜康熙戊辰の條下に門人彭直上來りて唐賢三昧集を撰ふの旨を問ひたるに、王士正洞山の語なる、語中語有り名けて死句となす、語中語無し名けて活句となすを擧げて答へたることを記せり、是れ嚴羽か言筌に落ちさるの意にして、亦た神韵流動の義を説きたるなり、附記す。

合文粹英靈間氣諸選詩。通爲唐詩十選云。

文粹は唐文粹をいふ、一百卷有り、宋の姚鉉か文苑英華を刪綴し之に文賦を附益し、詩は古體のみを存して五七言律詩を録せず、以て五季の文弊を救はんと欲したる書なり、王士正更に之を刪定して六卷となし、自序文を作れり、英靈は河岳英

靈集をいふ、三卷有り、唐の殷璠が編集する所、開元二年より天寶十二年に終る四十年間の詩家二十四人の詩を選録したり、間氣は中興間氣集をいふ、唐の高仲武が編集に係る唐の至徳元年より大曆末年に至る迄の詩家二十六人の詩を選出したる書なり、王士正是等の選本十種を一束して唐選十集となし、門人盛珍示、王我建に屬して較刊せしめぬ、是れ三昧集を選述する一年前の舉なり。

不録李杜二公者、仿王介甫百家例也。

李は李白、杜は杜甫、共に盛唐第一流の詩人なり、此の集宜く録すべくして録せざるものは王介甫が百家の例に仿ひたるなり、介甫は宋の王安石の字なり、安石唐百家詩選二十卷を著す、而して李杜二家の詩を探らず、此の集は即ち其の例を襲ひたる迄なり、劉大勤此の義を王士正に問ひたる時、士正答へて、篇目繁多にして集又單行する故を以てのみといへり、別に深意有るに非ず。

張曲江開盛唐之始、遼蘇州殿盛唐之終、皆不録者、既入予五言選詩、故不重出也。

張曲江は張九齡をいひ、韋蘇州は韋應物をいふ、曲江は盛唐詩風の始めを開き、蘇州は盛唐詩風の終りを殿シ、ンガリしたり、此の集亦た宜しく採入すべくして採

入せざる所以は、既に王士正か五言選詩に入りたれば重複を厭ひて省きたるなり、士正康熙二十二年に歴代の五言七言古詩を撰びて一部の書を爲せり、五言撰詩とは之を指せるなり。

康熙二十七年七夕後。王士正阮亭書。

王士正、一名は士禎、字は子眞、一字は貽上、阮亭は其の號なり。

附言

詩は唐を以て盛運となし、唐詩又盛唐を以て極致となす、故に詩を知らんと欲せば必ず盛唐に由らざる可からず、爰に盛唐を知らば上は以て隋、陳、梁、齊、宋、晉、魏、漢に溯り、下は以て宋、遼、金、元、明、清に降るを得可し、盛唐は實に詩の鎖鑰時代なり、此の集は専ら盛唐の詩を探る、是れ亦た余が講資に供する所以の一なり、然ども此の序を讀めば、則ち此の集の完備せるものに非ざるを知るべし、盛唐の第一流たる李杜及び初唐の關捩たる曲江、盛中の樞機たる蘇州の四家を缺けり、されば余の此の集を講ずるや先づ王(維)、孟(浩然)二家に就き、其の粹を抜き、然る後ち更に右四家を講じ、以て其の闕を補はんとす、此の集の全部を評釋せざる所以は、紙幅凡

そ限り有りて之を盡すは本講義録の及ぶ所に非ざればなり、故に今單に本集所載の人名のみを記するに止めて評釋するに及ばず、諸を諒せよ。

王維	王縉	裴迪	崔興宗	儲光義
邱爲	祖詠	盧象昇	殷遙	孟浩然
王昌齡	劉昫	常建	李頎	綦毋潛
王之渙	張子容	閻防	高適	岑參
崔顥	崔國輔	陶翰	王灣	薛據
崔曙	賈至	張謂	張旭	李嶷
萬楚	丁仙芝	沈千運	孟雲卿	元結
元融	蕭穎士	李華	梁銍	李收
薛奇章	楊諫	奚賈		

王維

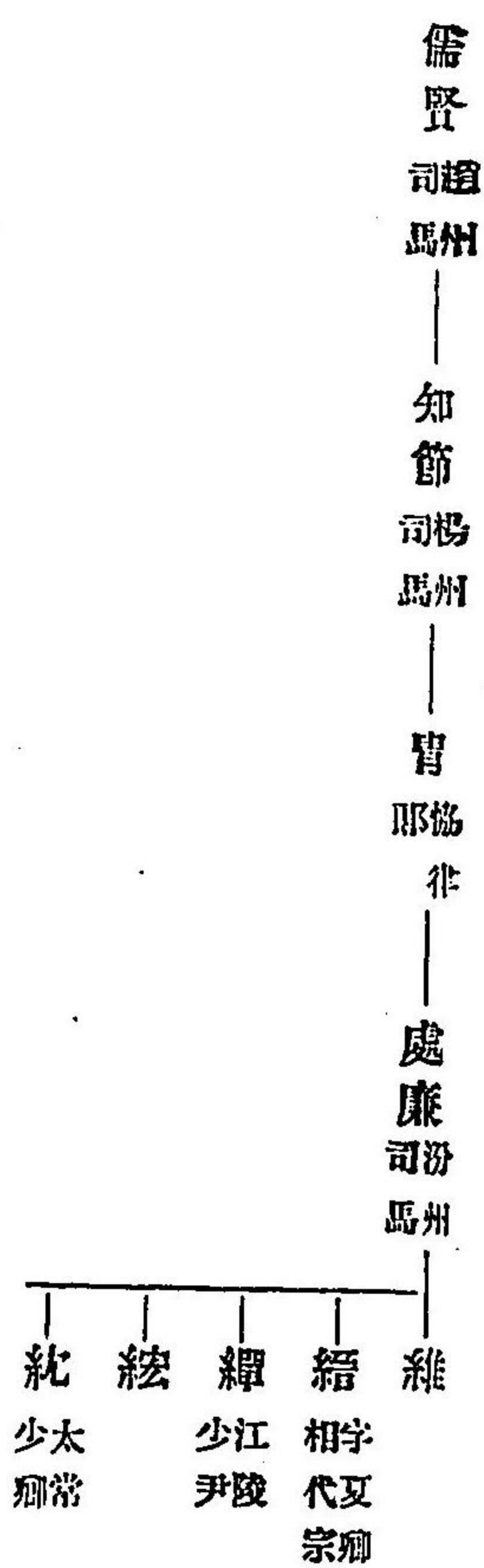
王維字は摩詰、太原祁の人なり、父を處廉といひ仕へて汾州司馬に至りて致仕し、家を蒲に徙して遂に河東の人となれり、維は開元九年の進士の第に擢でら

る、母崔氏に事へて孝を以て聞えき、弟縉と俱に俊才有り、博學にして多藝なることも亦九名を齊くせり、閨門友悌なるを以て多士之を推しぬ、右拾遺監察御史左補闕庫部郎中に歴仕し、母の喪に丁りて柴毀骨立殆ど喪服に勝へざるに至り、闕りて吏部郎中に拜せらる、天寶の末に給事中と爲れり、安祿山が兩都を陥れ、玄宗帝の出幸するに際して、維扈從の期會を失ひ、賊に獲らる、維乃ち藥を服して痢を取りて偽り瘖疾なりと稱す、祿山素より之を憐み、人をして迎へて洛陽に置き、普陀寺に拘せしめ、迫るに偽署を以てす、祿山の其の徒を凝碧宮に宴するや、其の工は皆梨園の弟子、教坊の工人なり、維之を聞きて悲惻し、潛かに詩を爲りて曰く、
万戸傷心生野烟、百官何日再朝天。
秋槐花落空宮裡、凝碧池頭奏管絃。
と賊平ぐに及びて賊に陥れるの罪を以て將に罰せられんとす、維凝碧の詩を以て行在に聞えしかば、肅宗之を嘉す、會維が弟縉己れか職たる刑部侍郎を削りて以て兄の罪を購はんことを請ふ、乃ち特に宥して太子中允を授けらる、乾元年中に太子中庶子中書舍人に遷り、復た給事中に拜せられ、尙書右丞に轉せり、維詩を以て其の名開元天寶の間に盛なり、弟縉と共に兩都に遊ひしと

き諸王駙馬豪右貴勢の門争ふて席を拂ひて之を迎へ、寧王薛王の如きは之を待すること師友の如くなりしといふ、維尤五言詩に長し、書畫特に其の妙に臻る、筆蹤措思共に造化に參して繪者の及ぶ所に非ざりき、又樂を能くせり、人の奏樂圖を得て其の名を知らざる者ありしに、維一見して曰く、是れ霓裳第三疊第一拍なりと、好事の者樂工を集めて之を按じたるに一も差ふ所なし、咸維の精思に服せざるはなかりき、維か兄弟俱に佛を奉じて居常蔬食葷皿を茹はず、晩年には長齋して文綵を衣にせず、宋之間(唐の開元の初めの人)か藍田の別墅を得て住めり、暨は輞口に在り、輞水舍下に周りて竹洲花塢に漲る、維道友裴迪と舟を浮べて往來し、琴を彈じ詩を賦し嘯咏して日を終ふ、嘗て自ら其の由園にて爲れる詩を聚めて輞川集と號けぬ、京師に在るの日は十數名の僧に飯して玄談するを以て樂と爲せり、齋中有る所無し、唯茶礮藥臼經案繩床有るのみ、朝より退くの後には香を焚きて獨坐し禪誦を以て事を爲しき、妻亡びてより再び聚らず三十年の間一室に孤居して塵累を屏絶し、乾元二年七月に至りぬ、臨終の際縉が風翔に在るを以て筆を案めて縉に別るる書を作り、又平生の親故

と別るる書數幅を作る、多く朋友が佛を奉じて心を修むるの旨を敦厲し筆を捨てて絶せり、代宗の時縉紹を受けて維か詩を編みて之を上り優詔褒賞を被りき。

今左に王氏の世系を示す



贈劉藍田

藍田は縣の名にして陝西省西安府に在り、唐書地理志に所謂京兆府に藍田縣有るもの即ち是なり、劉は姓其の名は詳ならず、藍田縣に生れたる人か然らざれば職に藍田縣に就ける人なる可し、詩の意を按ずるに後者の方當れ

漢詩評釋 唐賢三昧集

籬中犬迎吠。出屋候荆扉。歳晏輸井税。山村人夜歸。晚田始家食。餘布成我衣。詎肯無公事。煩君問是非。

籬中に犬の迎ひ吠ゆるあり、屋中の人乃ち出で、荆扉に候ふ以て歸人を待ちわぶの情見ゆ、歸人は方に是れ井税を官府に輸りて歸り來れる人なり、井税は周禮の六十四井出田税といへるに本づく、周の時代には井田の法有り、此に井税といふは即ち租税と見て可なり、歳晏は楚辭の及年歳之未晏兮又は歳既晏兮などいへるに據れり、晏は晚に同し、時是れ歳晚、即ち人事の匆忙を知る可し、此の匆忙の時に際して税を收むる豈有司の急徴に由る無からんや、地は是れ山村、即ち道路の險惡交通の不便見はる、而して夜歸といふ官府の遠隔知る可し、前四句は力を極めて輸税の辛苦を曲寫したるものにして、又一面には山間敦朴の風を描畫したり、晚田の收穫を以て自家の用に充て而して歳晚始めて之れを食す、即ち早田の收穫を以て租税に充てたるを知る、而して之れを官府に輸ることの既に歳晚に及べるを見れば地の瘠土にして年の凶稔なること明なり、餘布とは漢の揚雄

か羽獵賦に不奪百姓膏腴、整桑拓之地、女有餘布、男有餘粟、國家殷富、上下交足、といへる語中の字を借りて陽には山村民人の悠悠不迫の髓を表し、陰には徵租の過重なるを示したり、歳既に晏れ北風獵々寒氣堪ふ可からざる時に當り漸く税餘の臘布を以て僅に我か衣服を製す、是れ豈國家殷富上下交足といふ可けんや、然らば即ち一見して以て僊源窟裡の生涯と爲す可きか如しと雖も、而も實は自ら公事の存する有りて繁苦言ふに忍びざるもの有るなり、此の境に在るもの果して是なるや、將た果して非なるや、君を煩はして一問するのみ。前六句は眼前の常境を摸寫して字字下底に無量の意の勃然たるを見る、未二句は意の在る處を露したりと雖も亦た引きて發せず、蓋し是れ實境を取りて直ちに之を讀者の眼底に印し以て同情を興發せんとしたるなり。

附言

一本に籬中を籬間に作り荆扉を柴扉に作る、此の如きの差異は諸作往往にして之れ有り、趣味に於ても亦た頗同からざるものありと雖も一一之を對比して品評を加へんは煩雜の嫌なしとせず、故に一に三昧集録する所に據りて他

は列舉せず、以下皆然り。

贈祖三詠

祖詠は洛陽の人にして開元十二年の進士たり、王維と友とし善かりき、三と呼ぶは進士の試に於て第三席を占めたりしを以てなり

蟪蛄挂虚牖。蟋蟀鳴前除。歲晏涼風至。君子復何如。高館閑無人。離居不可道。間門寂已閉。落日照秋草。雖有近音信。千里阻河關。中復客汝穎。去年歸舊山。結交二十載。不得一日展。貧病子既滋。契濶余不淺。仲秋雖未歸。暮秋以爲期。良會距幾日。終日長相思。

此の詩は原註に濟州官舎の作と記せり、王邦年譜を按ずるに開元九年を以て進士の第に擢でられ大樂丞に調せられしが程無く累に坐して濟州司倉參軍に請せられたる由見ゆ、即ち見る祖詠か未だ進士に登第せざる以前に之れに贈りたる作なるを。

蟪蛄は詩經の蟪蛄在戶といへる語より出つ、爾雅屬注に蟪蛄は小蜘蛛の長脚なる者俗呼て喜子と爲すと有り、牖は木を以て交楹を爲りたる窓をいふ、但、穿明に

して木を交さるは牖なり、蟋蟀も亦た詩經の蟋蟀在堂といへる語より出つ、蟋蟀は蝗に似て小なり、正黒にして光澤有ること、漆の如き蟲なる由註に見ゆ、本朝に所謂こぼろぎなる可し、前除は階除の前といふに同じ君子とは祖詠を敬稱したるなり。

蟪蛄は虚牖に挂り蟋蟀は前除に鳴く其の居の幽寥蕭寂なること知る可し、此の居に在りて而して歲晏れなんとして涼風颯颯として至るの季節に逢ふ、有情の者誰れか懷友の念を動かさむ、况や身は是れ累に坐して請せられたる人なるをや、祖詠は多年の交友なれば懷友の念一動して先づ之れに向ふは人情に於て當に然るべし、君子復如何の語は此の情よりして發せり、時物の變に感じて懷人の情を動かすは其の源詩の國風より出づ、故に又語を詩の東山唐風の二篇に取れり、第二句蟋蟀の字唐風の蟋蟀在堂、歲聿云暮といへるに出でたるか故に第三句亦た歲晏の字を以て之れに接す、以て古人か一字苟もせざる所を看る可し、右四句を第一解とす。

第二解四句は君子復如何の語を受けて祖詠か情懷並に其の居第を想像したる

なり、高館とは即ち祖詠の居をいふ、祖詠當時志を得ずして故山に歸り居れり、祖詠か集を接するに歸汝墳山莊留別盧象の一詩有り、其の詩に曰く

淹留歲將晏。久廢南山期。舊業不見棄。還山從此辭。漚麻入南澗。刈麥向東菑。對酒難黍熟。閉門風雪時。非君一延首。誰慰遙相思。

之を讀めは其の心に得ざるもの有ること見る可し、想ふに是れ王誰か此の詩を賦したる前年祖詠舊山に歸らんとして作れる詩なりしならむ、其の閉門以下三句の如きは尤も此の四句の解に充つるに適切なるを覺ゆ、祖詠自ら門を閉つといふ、其の居闕寥として人無きこと明なり、虛象か一延首を待ちて僅かに思を慰めんとす、離居索莫道ふ可からざるの情有ること亦た知る可し、間門は寂として、已に閉ちたり、露ととなふ人なし、唯落日の秋草を照すあるのみ、第一解起手景を叙したるを以て第二解末句と亦た景語を用ひたり、則ち景を叙したりと雖も一は我れ一は彼れ反觀して小束を爲す、散漫歸無きを防く所以、詩に法と稱する者即ち是れ也、法は原來運意の順序を齊整ならしむる規律なれば詳に之を陳述して初學の津筏を爲すは要無きに非されども一一之を擧ぐるは繁に失するの虞

有り故に多くは略きて説かず學者宜しく熟讀玩味して自ら開發する所有るへし。

第一解は明に我れ彼れを思ふの情を叙し、第二解は暗に彼れ吾れを思ふの情を叙す、既に相思ふの情有り音信無くして止む可けんや、乃ち第三解に至りて近ごろ音信有りたることを點出したり、音信有りたりと雖も猶相思の情止む能はざる所以のものは千里河關を隔つればなり、况や彼れ祖詠は別來復ひ汝穎に飄零して客となり志を得ずして去歲遂に舊山に歸りたる人なるをや、正に是れ失意の人、他人之を聞くも亦た猶同情を喚ひ起さるを得ず、まして年來の交友たる王維に在りてをや、二句を挿入して全首皆振ふ、是れ所謂一首の關振なり、汝州は臨汝郡に在りて、潁州は汝陰郡に屬す共に河南道に隸したる由、唐書地理志に見ゆ、第四解結交以下不淺に至る四句は相見を得ざる所以をいふ、契濶は疎濶の意に用ゆるもの多しと雖も此の詩に在りては勤苦と解するの妄なるに若かず、言ふは彼此締交すること既に二十載の久しきに涉り交情深密兄の如く弟の如きも奈何せん相會すること尚とに少く能く一日の款晤して懷を展ふる有らず、

殊に子は貧と病との故を以て來る能はず我は契濶を以て負歎今日に至る、相思の情禁する能はざる豈に故なからむや。

第五解四句は約するに後晤の期を以てし以て結となす、第一解蠅蚋蟋蟀は皆な是れ初秋の光景なり、故に曰く仲秋を期して君の歸るを望むも是れ實に難し、故に期するに暮秋を以てせん、願くは一たび來りて相思の念を慰られむことを、然りと雖も果して其會を得るか、手を握りて舊を話するの日は洵に少く當に僅僅數日に過ぎざるへし、則ち相會するの樂は亦た將に長く相思ふて歎まさらむとす。

王翼雲曰く凡そ詩を看る須らく解數を明にすべし、則ち其の意を用ひ筆を下すの次序を知り分寸を失はずと。此の詩五解節序を以て起し節序を以て結ふ、章法秩然、一讀作者の用意を知るべく、且つ詩法と作すに足るものなり、若夫れ情意の深遠と風韻の綽逸とに至りては更に言ふの要なし。

送丘爲落第歸江東

丘爲は蘇州嘉興の人なり、繼母に事へて至孝なりしかは、常に鍾芝ありて堂

下に生したりといふ、太子右庶子に累官す、時に年八十有餘なりしか母尙ほ恙なかりき、性格謹にして縣署を経る毎に必ず馬を下りて趨れりといふ、年九十六にして卒りぬ。

憐君不得意。况復柳條春。爲客黃金盡。還家白髮新。五湖三畝宅。萬里一歸人。知爾不能薦。羞稱獻納臣。

失意郷に還る乃ち之を送るに十分の慰辭なかる可らず、首句先づ慰意を破り、輕筆を着く、而して深意は其の中に在りて寓せり、失意憐む可し、况や時は百花爛發柳枝島嶼たるの盛春に於てをや、此の光景に對しては傷心感慨層一層の深きを加ふるもの有らん、殊に黄金は客裏に消し盡して復た餘麻なく、家に歸れば雙髮數莖の白を添ゆる有らん、君か心中の苦惱は決して尋常失第の人の比に非ざる可しと。

五湖は太湖の別名なり、江蘇省蘇州府に在り、其の周廻五百里あるを以て故に之を五湖といふなり、即ち丘の郷里とす、夫れ五湖の居宅は僅僅數畝の廣きを占むるに過ぎず、家計の饒かならざるや知るへし、乃ち京師に上りて進士の榮を荷ひ、

垂白の老親を安慰せんと期せしに、心事は齟齬し易く、圖らずも空手万里歸來の人と爲んとは、吾れ何の辭を以て之を慰するを知らざるなり。

知禰とは後漢の禰衡魯國の孔融と交り善し、衡時に弱冠にして融は年四十なりしか、深く衡の才を愛し上書して之を天子に薦めたりといふに據りて之を用ゐたるなり言ふは君既に江湖失意の人と爲り、今日郷里に歸るの已むを得ざるに至る、失意察するに餘りあり、醜つて自己の職分を顧みれば、正に献納の責あり、今ま君の才の禰衡に過ぐるを知りて吾れ之を薦むるの孔融たる能はず、自己の職分に對して豈に赧然として愧つる無きを得んや。

末句、献納の臣云云とあり、按ずるに維は開元九年の進士にして右拾遺左補闕庫部郎中に歴仕し、天寶の末給事中と爲れるは既に其の小傳に於て言ふ所の如し、此の詩其の何年に成りしや未だ知るへからざるも其の献納の職に居りしや見るへきなり、姑く録して疑を存す。

送邢桂州

邢名は濟、桂州は廣西省桂林府に屬す、南方の海陬なり、此の詩高宗の上元二

年邢の桂州都督侍御史を兼ねて桂管の防禦都使に拜して將に任所に赴かんとするを送るなり。

鏡吹喧京口。風波下洞庭。赭圻將赤峴。翠汰復揚舲。日落江湖白。潮平天地青。明珠歸合浦。應逐使臣星。

鏡吹は鼓吹五部の一にして五部とは一鼓吹、二羽葆、三鏡吹、四大橫吹、五小橫吹をいふ、皆儀衛に用ふる者なり、鏡は鈴に似て舌なきもの、京口、馱は今の江蘇省鎮江にして揚子江の下流に在り、洞庭湖は方輿勝覽に在巴陵西。西吞赤沙。南連青草。橫亘七八百里。日月出沒其中。といへり、江の上游に屬す、赭圻城は安徽省太平府に屬し、赤峴山は湖南省楊州に在り、翠汰、揚舲は楚辭に見ゆ、舲は船に窓あるもの、汰は水波なり。

起句邢の發程より端を起すなり、其の將に任に赴かんとするや京口馱より舟に乘れば、儀衛の士鏡を鳴し、笛を吹き以て其行を護す、京口爲に騒然たり、舟既に長江を泝るや風波を凌ぎ先つ洞庭湖に入り更に水路を南に取りて任所に赴くへし、則ち其間景致の佳なるもの蓋し指を僂するに遑あらざるへし、中に就きて高

く雲際に聳ゆる赭圻城あり、翠を半天に横むる赤岬山あり、此等の佳景に逢ふ毎に、左顧右眎、或は汰を撃ち或は脰を揚げて眺覽せば、其の快たるや果して如何そや、若夫れ舟一たひ洞庭に入れば、百里一碧極目際なく、浩濤天を汨して身は洋心に在るの想あらん、眞に東南山水の大觀と謂ふへし是故に金烏全く没せば、四顧茫茫として江湖皆な白に變し、上湖一たひ來れば、水天一色滿目皆な青に化す、其の壯濶雄偉天下何物か能く之に匹せん、と首句より第六句に至るまでは、發程より説き起して途中の風景を述ふるなり。

明珠歸合浦は後漢孟嘗の故事なり、合浦は今の廣東省雷州にして即ち邢の管内に屬す、孟嘗合浦の太守たる前、其の宰守並に貪穢にして合浦より珠を採るに紀極を知らず、珠遂に漸く交趾に徙れり、孟嘗官に到りて首に前弊を革易し、孜孜として政を爲せしかば、未だ半歳ならずして去珠復た還れりと、使星も亦後漢李郃の故事なり、和帝使者を分遣し皆な微服單行して州縣政治の得失を觀せしむ、使者二人益州に至り、郃の舍に投せしに、時正に夏夕、郃仰き天象を觀て問ふて曰はく、二君京を發する時、寧ろ朝廷二使を遣すを知る耶と、二人大に驚き其故を問ふ、

即ち星を指し示して曰く、使星益州に向へり、故に之を知る耳と、言ふは君の任に赴くや、勵精治を爲し、政平かに訟理り、民其の田里に安んじて歎息愁恨の聲なき必せり、則ち去珠も亦た使臣の星光を逐ふて再び君の管内に遷るの瑞あるや、期すへきのみと、故事を引用して邢の賢を頌し而して其故事遂に邢の任地を離れず、古人用意の縝密なる概ね此の如し。

後聯洞庭の雄壯濶大を狀し、人をして波濤浩湯の想あらしむ、神に入るの妙あり、古來洞庭は、風騷の士之に過ぎて題詠し、競ふて一頭地を出さんと欲する者、蓋し幾千百數なるを知らず、而して遂に能く此の句に凌駕するあるを聞かず、其の相ひ匹敵して互に遜色なく、雄を千載に争ふに足るものは、獨り孟浩然及び杜甫あるのみ、今其の詩を後に繋ぐ孟の詩に曰く

八月湖水平。涵虛混太清。氣蒸雲夢澤。波撼岳陽城。欲濟無舟楫。端居耻聖明。坐觀垂釣者。徒有羨魚情。

杜の詩に曰く

昔聞洞庭水。今上岳陽樓。吳楚東南坼。乾坤日夜浮。新朋無一字。老病有

孤舟。戎馬關山北。憑軒涕泗流。

今其の詩中に就て句の直ちに洞庭に關するものを列記せば

王右丞 日落江湖白 潮平天地青

孟浩然 氣蒸雲夢澤 波撼岳陽樓

杜少陵 吳楚東南坼 乾坤日夜浮

此の句を熟讀して瞑目一思せば、洞庭の雄闊は目光離合の間に在るを覺ゆ、三家均しく出神入化の巨手と謂ふべきなり。

過香積寺

寺は陝西省長安縣終南山子午谷の西北に在り、終南山は連亘四縣に跨かり山勢僅に東海に至りて止まるといふ、即ち寺の在る所も亦た深遠なると想ふべし。

不知香積寺。數里入雲峰。古木無人徑。深山何處鐘。泉聲咽危石。日色冷青松。薄暮空潭曲。安禪制毒龍。

劈頭一喝先つ、不知の二字を下し然る後ち山の深遠幽僻を點出す、斯の如く逆入

し得て靈境の更に靈なるを覺ゆ、乃ち作者手腕の在る所なり、雲峯は山の高峻なるをいふ、雲峰に入ること數里、古木は森々として人跡到る罕なるの地、忽然として鐘聲の響くを聞き、是に於て始て寺あるを知ると、以上四句毫も鏗刻の痕を見ざるも、子細に之を窺へば鍛鍊彫磨の苦を見るに難からず、先つ不知の二字を點し、次に入字を以て之を承け、更に無人の字を下し、且つ何處の二字を挿む、竟に首句不知の意を離れず、而して一氣流注、珠の盤を走るか如し、冥目深思、咀嚼玩味せば其の妙を知るを得ん。

既に鐘を聞く、則ち山中に寺あること言を俟たざるなり、今更に之を説くの要なし、是に於て境中の景を把て幽靜僻遠を寫す、然れども泉聲の石に激し、青松の日に映するは均しく深山の恒境にして特に此の山の遠を示すに足らざる也、一の咽の字を下せば幽境の更に幽なるを見るべく、冷の字を下せば深僻の境殊に僻なるを認むべし、咽は北齊の孔德璋北山移文に風雲懷其帶憤。石泉咽而下愴。とあり、蓋し咽の義なり、夫れ清泉は傾危怪奇の石に激し、然も地は幽靜の境に在るを以て其聲殆と咽ふと疑ひ、日色は青松を照すも人跡到る罕なるの深山な

るが故に光輝稀薄にして寒冷なるを覺ふ。潭は深水なり、安禪は心身を安んじて然る後ち坐禪するをいふ。毒龍は涅槃經に但我住處有一毒龍其惟暴急恐相危害とあり、以て人慾及び煩惱の制し難きに喩へたるなり。言ふは吾れ此の深山に登れば、上に清淨の伽藍あり、而して地は幽に境は僻に、滿目皆な脱塵の想あらざるなし、且つ空潭の藍碧を涵すあり、其の深さ蓋し測るへからず、則ち此の中に異物の棲むあるや亦た期し難し、因て想ふ梵經に毒龍の故事あり、故に吾も此の處に於て打坐安禪し、以て胸中幾多の意馬心猿を驅除せんと欲するなり。

一説に第五句を以て心境の空靈に喩へ、第六句を心境の恬憺に喩ふと爲せるものあり、理あるか若きに似たれども、強めて此の如く解するの要を見ざるなり、直ちに眼前の景を把つて之を寫すと爲すの穩且つ切なるに若かす。

觀獵

風勁角弓鳴。將軍獵渭城。草枯鷹眼疾。雪盡馬蹄輕。忽過新豐市。還歸細柳營。迴看射鵰處。千里暮雲平。

州咸陽の東北二十里渭水の北に在り、獵に四あり、春獵を蒐といふ、夏獵を苗といひ、秋獵を獮といひ、冬獵を狩といふ、總稱して獵といふなり、此の詩は秋冬の間の獵をいふ、節既に暮秋にして冬に近からんとす、勁風は怒號し、角弓も亦た風の爲に聲あり、正に是れ郊外馬を驅りて禽獸を獵するの好時期となす、况や草木凋落禽獸伏匿するの處なきに於てをや、是に於て將軍は其の部下を率ゐ去りて遠く渭城城邊原野廣漠の地に獵すれば、無草既に枯れて千里一望復た眼に遮るものなし、是故に疾利の鷹眼更に疾を加へ、積雪全く盡きて縱横馴聘意の如くならざるなし、是に於て輕捷の馬蹄尙ほ輕を加ふと、健馬と俊鷹とを驅り天高く氣爽なるの秋原に獵す、光景觀る如し、疾字輕字虛しく下さす、此二字ありて前聯活動するを覺ゆるなり。

新豐市は雍州照應縣の東に在り、漢の高祖太上皇の東歸せんことを思ひ、此に於て縣を置き豊人を徙して之に居らしめき、故に號して新豐といふなり、細柳營は長安の西北に在り、漢の周亞夫の陣營せし處、雕は玉編に鴛なり、能く草を食ふとあり、本朝に所謂「くまたか」なる可し。

馬蹄は輕快にして、鷹眼は疾利なり、以て四顧空漠の地に獵す故に、往來倏忽馳騁、
 價疾殆ど端倪すべからず、今新豐市上を過ぎたるに早く既に細柳の營に還れり、
 出沒縱横觀る者をして眼爲に眩せしむ、既に營に還りて後射雕の處を回看すれ
 は、寂寥千里惟、暮雲の一望して平なるあるのみと、新豐細柳の二地名を用ゐたる
 所以は、承句先づ渭城を出たせしか故に特に此の二地を用ゐたるなり、通首遒勁
 にして豪華、一字の懈筆あるなく、絶調と稱す可し、清の沈德潛此の詩を評して曰
 く、起語千鈞の筆力、章法、句法、字法俱に絶頂に臻れり、盛唐の詩中多く其の比を見
 すと、適評と謂ふべし。

秋夜獨坐

獨坐悲雙鬢。空堂欲二更。雨中山果落。燈下草蟲鳴。白髮終難變。黃金不可成。
 欲知除老病。惟有學無生。

『獨坐』の二字を以て全詩の根と爲し、以て上四句を引き起す、下四句は解脱の語を
 以て之を消するなり、詩意是の如し。

四顧間寂形影相ひ吊するの時に當りては人誰れか百感の胸に萃らざるものぞ、

况んや雙鬢皎然而して獨り此の寂寥の夜に坐す、即ち吾か生の幾何なきを哀み
 景况更に蕭瑟たるを覺ふ、二更に非すと雖も心中既に二更ならんと欲す、殊に窓
 前の雨聲は更漏の轉するに従かつて寂更に寂を加へ、時に又た山果の地に落つ
 るを聞き、一種の孤燈は滅せんと欲して復た明にして且つ草蟲の坐に上りて鳴
 くあり、心中の愁緒亂れて絲の如く、身外且つ幾多の寂寥を添ふ、其の感や終に終
 極なしと、是を前半段とす。

『黃金不可成』とは漢の李少君の言に甯を祀れば則ち物を致し、物を致して而して
 丹砂化して黃金と爲すべしといふに依りて之を用ゐたるなり、無生は諸相を觀
 破して後ち無生寂滅の域に到るを言ふなり。

髮白し再ひ之を黒に變せんと欲するも能はず、仙家の法に丹砂を化して黃金と
 爲すへきの説あり、然とも金成すべからず、猶ほ髮の變すべからざると一般なり、
 則ち老を悲まさらん乎、雙鬢皎然餘生幾何ぞ、人情豈に生を惡み死を好むものあ
 らんや、然らば則ち如何して可なるや、曰く老病を除かんと欲せば諸相を觀破し
 て無生無死の域に到るあるのみ、苟も此の域に達せば上は太古に遡るべく下は

無窮に達すへし、尙何そ老を悲み死を憂ふるの愚あらんやと、孤燈遙夜、白髮空堂
感愴する所のもの深く、而して遂に解脱の語を以て之を消す、禪理に遠きものに
非ずんば能はず、彭適云ふ、右丞の詩は詞迫切ならずして而して味甚た長しと亦
た是等を謂ふならんか。

勅賜百官櫻桃

櫻桃は禮記に之を合桃と謂ひ、爾雅に之を荆桃と謂ふ、本草に其の實熟する
時深紅色なる者之を朱櫻と謂ひ、紫色にして皮裏に細黃點ある者之を紫櫻
と謂ふとあり、之に據れば其種類に二あるか如し、普通のものは其花白くし
て梅に似て其實は深紅色なり、本朝之を『ゆすらうめ』といふ。

芙蓉闕下會千官。紫禁朱櫻出上闕。纔是寢園春薦後。非關御苑鳥銜殘。歸鞍競
帶青絲籠。中使頻頒白玉盤。飽食不須愁內熱。大官還有蔗漿寒。

唐代四月一日内園の櫻桃を寢廟に薦むるの例あり、此の詩蓋し薦め訖りて然後
ち百官に頒ち賜ひしを賦せしなり、起承二句は題面を完ふし、中間四句櫻桃を賜
ふの事を寫し、末二句食後の餘意を寫す、芙蓉闕は曲江池の南に在り、紫禁は南宋

謝莊が宣貴妃の昧に掩、綵瑤光、收華紫禁とあり、註に王者之官以象紫微、故官中爲
紫微と紫微とは星の名なり、上闕は上林苑中に在り、首句先づ芙蓉園を提す所以
は櫻桃の字と相映發せしめんか爲なり、承句紫禁も亦た朱櫻と相應せしむ、凡そ
事宮禁に關する作は宜しく莊重典麗なるへし、此の如く起し得て乃ち其妙を見
るなり、寢園は寢廟園陵の謂にして寢とは神を安するの處なり、春薦は櫻桃を寢
廟に薦むるを言ひ、後とは薦訖りて百官に頒ち賜ふを言ふ、鳥銜殘は櫻桃一に合
桃と名く鶯鳥の含み食ふ所たるか故なり、見るへし寢廟に薦めて後之を百官に
頒ち賜ふものにして百鳥の啄み殘すに關するに非ざることを、乃ち君恩の優を
見すなり、歸鞍は他集皆歸鞍に作る、今之に従ふ、青絲籠は青絲を以て籠と爲した
る者、御賜の櫻桃皆之を青絲籠に貯へて歸る、紅綠相映して觀るへし、中使は内官
なり、白玉盤に盛りて之を頒つ、紅白相間り其色極めて麗なり、愁、内熱とは本草に
櫻桃食多無損、但發虛熱耳とあり、大官は主膳の官なり、蔗漿は楚辭に脯鼈炮羔有
柘漿些と註に柘蔗蔗也、取蔗蔗之汁爲漿飲也、と諸蔗は蓋し本邦さとうぐさ
か、君恩周匝故に飽食して熱を發するを愁へざるなり、何となれば解熱の蔗漿あ

り主膳の官又之を願つ、之を服せは熱や立所に解するを得へし、則ち多食すると何ぞ妨げん、夫れ櫻桃を賜ふ既に聖恩の重きに屬す、更に蔗漿を賜ふて熱を病む者を治せしむるに至りては、其の恩の優渥なる何の辭を以て之を贊するを知らざるなりと。

酌酒與裴翹

翹は關中の人なり、初め崔興宗等と王維の終南山下朝川莊に居り、三人相唱和吟詠して日を終へき、天寶の後出て、蜀州の刺史となれり。

此の詩は題して酌酒と爲すも、酒を借りて胸中の鬱勃を解せしむるに過ぎず、必ずしも強めて對酌と解せずして可なり。

酌酒與君君自寬。人情反覆似波瀾。白首相知猶按劍。朱門先達笑彈冠。草色全經細雨濕。花枝欲動春風寒。世事浮雲何足問。不如高臥且加餐。

首句先つ君字を疊み以て下面を開き、次句に至りて始て主意を見はす、前聯白首朱門乃ち上句の人情云々を承くる所以、後聯更に眼前の光景を把りて小人上に在り君子道休するを隱説し、轉句上來一切の條件を消納し、結句に至りて全篇を

繳足す。

酒を借りて以て懷を寬にすへし、何となれば人情反覆常なく殆ど波瀾に似たり、此際に處して一々之を慨し之れを悲まは蓋し終極あるなけむ、夫れ蒼蒼白首に至る其歲月や久しからすと爲さす、然も時ありて乎劍を按して疑かはるゝの事あり、朱門先つ顯榮を得るの士あれば同士の者皆彈冠相慶し己れも亦た將に其の推薦を得んと期せしに、先達の士は冷然一咲毫も之を顧みず、夫れ舊交すら猶ほ劍を按するの事あり、先達の士彈冠の人を笑ふ、人情の薄きや是に至りて極まれりと謂ふへし、彈冠は漢の王陽貢禹と友たり、世稱す王陽位に在れば貢禹彈冠すと、其の取舍同じきを謂ふなり。

草色は小人に比し、細雨は君澤に喩へ、花枝は君子に比するなり、小人位に在り君恩に沐浴し得々として太た驕れり、猶ほ草色の細雨を得て其色萌んとするかごとく、君子進まんと欲せば陰邪の妨くる所となり顯るゝを得ず、亦た猶ほ花枝の動搖せんと欲して春寒に妨げられ意を得ざるかごとし、夫れ世路の險なるは要するに是の如きのみ、大丈夫此の濁世に處しては何ぞ必ずしも強めて人に依り

且つ仕進を求めんや、一喜一憂適、身の累を爲すに過ぎず、畢竟天下万般の事浮雲の行動するか如し、常に之を不問に附し去り、高臥出てす餐飯を加ふるの優れるにはと、結句加餐起句の酌酒と相映帶して最も妙を見る。

按するに晋の曾摠字は顔遠感奮の詩あり蛇足に似たれども掲け示す。

富貴他人合。貧賤親戚離。廉簡門易軌。田實相奪移。晨風集茂林。棲鳥去枯枝。今我惟困蒙。群士所背馳。鄉人敦懿義。濟々蔭光儀。對賓頌有容。舉觴詠露斯。臨樂何所歎。素絲與路岐。

富貴他人合。貧賤親戚離。僅々十字のみ、人情の輕浮を道ひ破りて復た餘蘊なし、右丞白首朱門の二句と相對して益、其妙を見るべし、蓋し顔の詩は直致なりと雖も説き得て透り、此は紆徐淡與の致を極む、俱に千古に籍籍たる所以なり。

送秘書晁監還日本

安倍仲磨年十六にして選はれて遣唐留學生と爲り、姓名を更めて朝衡と曰ひ、遂に唐に仕へき、玄宗左補闕を授け秘書監に至る、勝寶中藤原清河唐に至る、玄宗仲磨に命じて接伴せしむ、清河の還るに及んで仲磨與に歸らんと欲

す、王維李白等贈るに詩を以てす、此の詩乃ち、其の送詩なり、適、海に航して颶風に遇ひ安南に漂泊す、後清河と復た唐に至り、左散騎常侍安南都護と爲り、北海郡開國公に累遷せしか、歸るを思ふて止まず、嘗て月を望んで歌を爲る『あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも』後世傳へて絶唱となす、遂に唐に卒りき。

積水不可極。安知滄海東。九州何處遠。萬里若乘空。向國唯看日。歸帆但信風。鰲身映天黑。魚眼射波紅。鄉樹扶桑外。主人孤島中。別離方異域。音信若爲通。五言排律を讀む者は必ず先づ其の躰裁を詳にせざる可らず、何となれば詩の諸躰其の至難なる排律に至りて極りぬ、豫め躰裁を暗んし然後ち徐に其意義を索むれば瞭として火を睹るか如けん、之を講するの前先づ作法の梗概を述る所以なり。

五言排律の躰對偶に拘し平仄に粘し、歩伍整齊毫も亂る可らず、對偶起結兩韻太た拘はらざるかとし、而して中聯は必ず忽かせにすへからず、平仄は四句ごとに一粘し、更に起の平仄を用ひ、百韻に至るも皆然らざるなし、蓋し排とは之を排

して開かしむ、一に行軍排陳の如く然り、起聯尾聯を除却して中間緊しく題に應して排入し、或は題面より排し、或は題意に就て排し、或は分排し、或は合排し、或は古を引て排す、總て情と景と事との三字に外ならず、古人此の躰を論して其要四ありと爲す、一は鋪叙躰を得て先後亂れざるを貴ひ、二は隊仗整齊情景分明なるを貴ひ、三は過度明白にして人をして沈思回顧せしめざるを貴ひ、四は氣象寛大にして從容迫らざるを貴ふと、排律の至難此の如し、是故に唐代士を取るに此の至難なる者を以て試式と爲し、其の優劣を判して人材を登庸するの具となせしも蓋し故ある哉。

排律の正格は起二句之を首聯と謂ひ、又之を破題と謂ふ、三四の句之を額聯と謂ひ、五六之を頸聯と謂ひ、七八之を腹聯と謂ひ、九十之を後聯と謂ひ、末二句之を尾聯と謂ふ、此れ全局一定の規矩なり。

夫れ海水の渺瀰淡漫たる殆ど窮極なきか如し、安そ知らん是より外更に國あることを聞説く九州の外更に九州ありと、則ち甚た遠きに似たれども畢竟此より去ること僅に一國に過ぎざるなり、何れの處にか其の遠きを見んや、獨り日本に

至りては萬里の外に在り、晁監の去るや濤洪を凌ぎ風雨を侵し縹緲として空に乘して行くか如けん、積水以下四句先づ歸路の遼遠を叙す。

鼉は列仙傳に巨鼉蓬萊山を負ふて滄海の中に抃すとあり、海中の大龜なり、魚は鯨鯢なり、以下去路中の事物を寫す、四顧茫茫浮天岸なく毫も眼に遮る者を見ず、朝に惟、日出を標として東に向つて行あるのみ、殊に萬里の歸程順風を得ずんば不可なり、是に於て風の向背を見て以て歸帆を挂く、時ありて巨鼉全身を露出し其色天に映して黒く、或は大魚の波間に出没するあり、眼光波を射て紅なり、險を冒して國に還る、送者も亦悽然たる者あり、四句國に還るを以て排入す。

扶桑は王充の論衡に日扶桑に出て、暮に細柳に入るとあり、日出の處なり、此句日本を申言す、主人は即ち晁監、孤島も亦日本を指す、言ふは晁監既に郷國に歸れば彼我方に域を異にせん、乃ち音信ありと雖も誰れか之れを通する者ぞ、音信尙通せず、况や、晤言をや、此の別の殊に惆悵措く能はざる所以なり、以上四句別離の情を寫して以て結ぶ。

曉行巴峽

峽は巴東永安縣に在り、高山あり相對す、相去ること二十丈ばかりなり、左右の崖甚だ高く、人之を峽と謂ふ、其峽に三あり、曰く西陵峽、曰く歸鄉峽、曰く巫峽と、故に或は之を稱して三峽と曰ふ。

盛弘之荆州記を案するに、曰く、三峽七百里、中兩岸の連山は斷する處なく、重巖疊嶂、天を隠くし、日を蔽ひ、亭午に非されば、日月を見すとあり、地の險絶なること想ふべきなり。

際曉投巴峽。餘春憶帝京。晴江一女浣。朝日衆禽鳴。水國舟中市。山橋樹杪行。登高萬井出。眺廻二流明。人作殊方語。鶯爲故國聲。賴諳山水趣。稍解別離情。是詩通計十二句、分ちて三截と爲し、四句一頓す、曉行を以て起一段と爲し、巴峽の民風景物を寫して中一段と爲し、光景の寂寞遂に離情を惹く所以を言ひて結一段とす。

首句は先づ時と地名とを點し、次句餘春の二字を提げ全題を點破す、平易に襯入して毫も力を用ゐざるもの、如きは即ち實に苦心經營の在る所なり、巴峽、曉天の光景人をして坐ろに悽涼たらしむる者あり、况んや暮春に於てをや、寂寥の極るあり、朝暾始て出て、滿峽但、衆鳥の争ひ鳴くを聞くのみ、千里の孤客今ま此の光景を觀ては、豈に首を回らして帝京を望まざるを得んや。

『水國舟中市』は異事を掲ぐるなり、水國に在りては人皆舟を以て家と爲す、故に其互市するや必ず舟中に於て之を行はざるなし、此れ既に異事に屬す、况や山橋を架して樹梢の上を往來するに於てをや、他、鄉絶無の事と爲す、山橋は所謂棧道なり、險絶の處に在りては、旁に山巖を鑿し、版梁を施し橋と爲すものにして、本朝に之を『かけはし』といふ、樹杪は木末なり、蜀道の峻巖は緩柔と雖も尙ほ攀縁に苦む殊に樹色蒼鬱、白日も亦た昏きを覺ふなり、試に一の高處を得て眺矚すれば、料らさりき人烟湊集して万井始て出て皆脚下に在り、且つ遠く二流の明亮を見る、眞に意外の喜なり、二流は晋の左思か蜀都の賦に帶二江之双流、抗峨眉之重阻とあり、註に江水岷山、分爲二江、經成都南東流。といへり、二流は即ち之れを謂ふなり。

「人作殊方語」乃ち地の京畿より遠きや知るへし、行客之を聞きては郷を懐はさるもの幾と希なり、『驚爲故國聲』乃ち春風に遐邇なきや見るへし、家を思ふ所以のもの益、深し、觸目皆傷懷の具たらさるなきなり、唯、到る處山水の奇絶なるあるに頼りて纔に別離の情を解するのみ、然りと雖も、飛花啼鳥我れ此の暮春を奈何ともする能はさるなり、頼、諧、梢、解、二虚字、相接して挑撥し、其の別離の情を解する所以は遂に之を解する能はさる所以を反説す。

胡應麟曰く、盛唐の排律、延清摩詰等の作を讀めば、眞に万花の春谷に入るか如し、光景爛熳として人をして應接するに暇まわらず、賞玩歸るを忘れしむと。此詩首に曉景を寫し、中間に風物を叙す、描寫の妙畫筆も及はず、一部の入蜀記遂に此の數十字に優る能はさるなり、詩此に至りて靈と謂ふへし。

孟城坳

坳は右丞鞏川莊中勝景の一にして、鞏川は陝西府藍田縣の南、曉山の口に在り、縣を去ること八里、川口兩山の峽を爲す、山に隨ひて石を鑿す、計五里はかり、路甚だ狹隘にして、此を過くれば豁開し、蔚然たる桑麻肥饒の地なり、四顧

すれば山巒掩映して路なきか若きに似たるも、環轉して南すれば凡そ十三區あり、其美愈、奇なり、右丞の別業あり、孟城坳、華子岡、文杏館、斤竹嶺、鹿柴等の二十景あり、右丞日に裴迺等と其間に吟詠して以て相樂むと云ふ、此れ及び下の鹿柴の詩俱に莊中の作なり。

新家孟城口。古木餘衰柳。來者復爲誰。空悲昔人有。

五言絶句の躰は婉曲回環、蕪を剛り簡に就き、句絶して意は絶せざるを要す、前對あり、後對あり、前後皆對あり、前後皆對せざるあり、要は真切にして質多く文に勝つを尙ふなり、世に絶句の義を以て律詩の首尾、或は中二聯を截つと謂ふ者あり、殊に知らず、五言絶句の躰は遠く漢魏の樂府より昉るを、出塞曲、桃葉等の篇皆其躰なり、但し古躰は四句中に二韻互叶するのみ、故に音調未だ舒ひず、唐の諸士に至りて一變して律呂鏘鏗、句格穩順、遂に百代不易の躰を爲すに至れり、是れ詩を讀まんと欲する者の當さに知るへき第一義とす、故に今ま其の大要を掲げ示すのみ。

家を孟城口に移せば、古木の餘僅に衰柳を存するのみ、夫れ前人の我れより前に

此に居る者豈に林園亭榭なからんや、而して今ま見る所此の若し、人事代謝の變
洵に傷感に堪へざるものあり、然りと雖も將來我れに後れて此に居るもの其の
何人たるを知らざるも、亦た將に我か身後に在りて昔人を悲むものあらんとす、
即ち吾れ何ぞ必しも昔人の有する所を悲まんや。

平直叙し起し、從容之を承く、二句毫も力を用ゐざるもの、若し、轉句に至りて忽
ち無數の波瀾を生し、末句悠然之を結ひ、而して全首皆振ふ、見るへし一詩上下の
關鍵全く第三句に在ることを、五絶の作法を知らんと欲せば、先づ此種の詩を熟
讀すへし、乃ち妙味も亦た自然に會得するを得ん。

鹿柴

柴は砦に同じ、柵なり。

空山不見人。但聞人語響。返景入深林。復照青苔上。

山既に空なり、何そ更に人なきを説くの要あらんや、然も語響の聞くを得るあり、
的かに是れ人語なり、乃ち形質の見るへきなきも其の人あるや明なり、起句説く
是れ人ありと、然も其の形質を認めざるなり、承句は説く是れ人なしと、而して語

響の聞くを得るあり、有に似て有にあらす、無に似て無にあらす、乃ち是れ山中の
實境なり。

深林は原と日光の透入せざる所、况んや林下の青苔に於てをや、日西に落ちて東
に返照す之を返景と謂ふ、唯、返景ありて能く深林内に透入し、更に青苔の林中に
在るものを照し、寂々たる空山をして一時光明ならしむと、筆を下して渾妙、能く
人の道ひ難き所を言ふ、此等の作、到底筆舌の妙味を發揮し得へきものにあらす、
要は沈思して神悟するあるのみ。

九月九日憶山東兄弟

重九の節は其起因何年に在るを知らざれども、九日登高の濫觴は漢の桓景
より昉るなり、景仙人費長房に隨ひ遊學すること年を累ぬ、長房景に謂て曰
く、九月九日汝か家當に災厄あるへし、急に家人をして各、絳囊を作らしめ、茱
萸を盛り臂に繫け、高山に登り菊花の酒を飲むへし、此の禍消すへしと、景言
の如くし、家を擧りて山に登り、夕に還り視れば鷄犬牛羊一時に暴死せり、長
房の曰く、之に代れるなりと、後世之より九日に登高して以て禍殃を消する

なり。

此の詩摩詰他郷に在り偶、九日に逢ふ、因りて兄弟の山に登るを憶ひて賦せしものなり、一本に山東は山中に作れり、可なるに似たり。

獨在異郷爲異客。每逢佳節倍思親。遙知兄弟登高處。偏插茱萸少一人。

七絶は亦た古樂府より起りたるものにして、彼の烏棲曲、狹瑟等の篇の如き皆其の體なり、作法は亦た第三句を以て主と爲す、猶ほ五絶の如し、虚接あり、實接あり、承接の間、開は合と相關し、反は正と相依り、順は逆と相應し、一呼一吸、宮商自ら諧ふを要す、故に起承二句の難きや論なきも、宛轉變化の工夫に至りては全く第三句に在るものとす、蓋し五言絶句は兩漢に昉り、七言絶句は六朝より起る、源流迥に別なり、故に體裁も亦た殊ならざるを得ず、是を以て五絶は真切にして質多く文に勝つを貴ひ、七絶は高華にして文多く質に勝つを貴ふ、然も微旨遠意、語淺く情深く、開合反正、一氣呵成するに至りては二者一律のみ、其間一毫の差異なきなり、七絶體裁の大要は大凡そ此の如きのみ。

劈頭先つ獨字を提す、見るへし父母兄弟に離却することを、况や異郷に在りて異

客となるをや、一起既に懷惋絶せんと欲す、夫れ平素親を思ふこと極めて切なるも佳節に逢ふことに更に一倍を添ゆるなり、倍字下し得て力あり、遙知の二字は起句異郷の字より由り來るなり、客中九日兄弟袂を聯ねて登高の處を憶ふに、今日の挿萸例に比して當に一人を少くなるへし、其の一人を少く所以は異郷に在りて異客と爲るを以ての故なりと、獨字一人と緊しく相應す、章法の妙殆ど老大家の若く然り、或は曰く、此の詩摩詰十七歳の時の作なりと、天才と謂つへき哉。

送元二使安西

元二の使して安西都護府に赴くを送るなり、安西は西方絶域の疆に在りて蠻夷と相接せり、今の甘肅省に屬す。

渭城朝雨浥輕塵。客舍青青柳色新。勸君更盡一杯酒。西出陽關無故人。

渭城は陝西省西安府咸陽縣の東北十七里に在り、古昔秦の孝公の居る所なり、陽關は甘肅省安西州敦煌縣の西南に在りて西域の要隘とす、浥は濕るなり、潤ふなり。

送行の地渭城に在るを以ての故に、起句先つ其地を寫し出すなり、朝雨晝晴れて

道上の塵沙皆な淨泥するか故に行路に便なるは言を俟たず、殊に客舎の柳枝は青青として、袅娜たり、行興佳なりと謂ふべし、則ち君宜しく急に去るべきか若きも、君に勸めて更に一杯の酒を傾けしめんと欲するものあり、何ぞや、夫れ陽關すら尙ほ疆を西域に接せり、即ち安西の遼遠なる想ふへし、君の此の行、一たひ關を出つれば故人なきや必せり、然れば我か此の一杯の酒、君安そ之を盡さるへけんや。

起句先つ地名を點し、末句も亦た地名を提す、而して安西の遼遠は言外に在り、情眞にして語切なり、之に加ふるに音節の高爽を以てす、千古の絶調たる所以なり、遂に後世行を送るに此の詩を三疊するを以て例と爲すに至る、蓋し豈に故なからんや、三疊とは全首中三句を再疊して、獨り起句を疊せざるなり、所謂陽關三疊とは此れなり。

摩詰の詩を總括して之を評すれば、精緻雅秀、韻高く氣清し、一唱三歎の妙あり、洵に唐代有數の巨手なりとす、蓋し詩の諸躰盛唐に至りて完備大成し、其間名公大家斐然として、輩出し、李太白の天才、縦逸人羣を軼躡するあり、杜少陵の學才、優贖

衆躰を兼備し、綱常を植て風化を繋くあり、孟浩然の清雅、儲光義の眞率、王昌齡の聲俊、高適の氣骨、岑參の奇逸、李頎の冲秀、常建の超凡あり、各其の所長を擅にし、雄を當代に競へり、謂つへし五采雜陳するものと、何そ其の盛なるや、而して摩詰は此間に在りて、高間曠遠、清楚玄妙の致を具し、冷然として獨り往けり、其の道を樂み命に安んずる一段の興致に至りては、以上の諸公も亦た皆一等を輸せざるを得ざるなり。

夫れ摩詰の佛法を崇奉せしは、中歲以來既に然りとす、故に居常蔬食して、瓊血を茹はす、晩年に至りては長齋して、文綵を衣にせずといふを以て見れば、詩の妙品に至りし所以は、全く之を禪理に悟入せしに外ならず、是を以て言ふ所皆塵氣を脱出し、猶ほ白沙寒流の清徹して底を見ざるかごとく、冷朗澄澹たり、陳后山は曰く、右丞蘇州(韋)は皆陶、王を學ひて其の自在を得たりと、殊に知らず、陶詩の超脱絶倫なる所以は、彫琢にあらず、鍛鍊にあらず、直ちに其の胸臆中在る所を吐露するに過ぎず、要は亦た天を樂み命を知るの極、能く然る者にして、其の興致は尋常字句に就て之を學ぶを得べき者にあらざるや、論なし、摩詰は陶の樂む所を禪理よ

り悟入し、中に積りて外に溢る、故に其の詩や渾厚閑雅、古今を覆蓋する者を爲すなり、若夫れ徒に其の皮相を學はんか、奈何そ優孟の衣冠たらざるを得んや。世或は少陵を推して尤どなし、摩詰等に至りては相距ること百仞と爲すものあり、酷なりと謂ふへし、夫れ人各、長短あり、少陵の良に人群に出づるは固にして、猶ほ麟靈園に遊び、鳳朝陽に鳴くの概あり、洵に古今獨歩と稱すへきも、試に摩詰の沖淡雅秀なる者を求むれば、少陵未だ其の間に遜色なくんはあらず、善ひ哉、屠長郷の言や、曰く少陵は沈雄博大にして包括する所多きも、獨り摩詰の沖然幽適、冷然獨り往くを少く、此れ少陵生平の短なる所なり、少陵は慷慨深沈にして煩熱を除かず、摩詰は參禪して佛に悟り、心地清涼なり、胸次原と自ら同しからずと。是故に彼を貶して此を褒するは不可なり、此を斥けて彼を崇するは亦た不可なり、要は各自の長所に就きて妙味の在る所を咀嚼玩味するを可なりとなすのみ。

孟浩然

孟浩字は浩然、字を以て行はる、襄州襄陽の人なり、少くして節氣を好み、喜んで人の患難を拯へり、襄陽の鹿門山に隱る、年四十にして乃ち京師に遊ぶ、嘗つて

大學に於て詩を賦す、一座驚歎して敢て抗するもの無し、張九齡王維等雅より之を稱道す、維私かに邀へて内署に入る、俄にして玄宗皇帝至る、浩然倉皇錯愕して牀下に逃匿す、維實を以て告げしかば、帝之を聞きて喜ひて曰く、朕其人を知りて未だ見ざるなり、浩然何を懼れて匿るゝやと、詔して出てしむ、帝其の詩を問ふ、浩然再拜して自ら爲る所の詩を誦して曰く

北闕休上書。南山歸弊廬。不才明主棄。多病故人疎。白髮催年老。

青陽逼歲除。永懷愁不寐。松月夜窓虛。

と、帝憐ひすして曰く、卿仕を求めず、而して朕未だ嘗つて卿を棄てず、奈何そ我を屈ふの甚しきやと、因て放ち還らしむ、探訪使韓朝宗浩然に約して偕に京師に至り、諸を朝に薦めんと欲す、故人の至るに會ひて浩然劇飲して歡甚し、或人曰く、君韓公と期あるに非すやと、浩然曰く、業に已に飲めり、他を恤ふるに違あらんやと、卒に赴かさりき、朝宗大に怒りて辭し行く、浩然悔ひざるなり、其後張九齡荊州の署を鎮す、浩然を其府に置き、從事と爲せしか、未だ幾ならずして府罷む、遂に布衣を以て終りき、開元の末、疽背に發して卒せり、後ち樊澤節度と爲

る、時に浩然の墓庫壞敗殊に甚し、符載書を以て澤を叩きて曰く故の處士孟浩然は殞落すること歳久しく、門裔陵遲して丘隴頽没す、此人を永懷して行路慨然たり、前公更に大墓を築かんと欲せしに、闔州の縉紳風を聞きて竦動せり、而今外は軍旅に迫り内は賓客に勞す、若し未だ追まあらざりて好事者をして來して之を有せしめは公の宿志に負くものあらんと、澤是に於て碑を鳳林山南に刻して其墓を封甞せり。

初め浩然の没するや、王維之を憶ふて措かず、其の郢州を過くるや、浩然の像を刺史亭に畫き因りて浩然亭と曰へり、咸通中刺史鄭誠更め暑して孟亭と曰ひき。

南亭懷辛子

夏夕涼を南軒に納れ、清景に對して故人を懷ふ、此作ある所以なり。

山光忽西落。池月漸東上。散髮來夕涼。開軒臥閒敞。荷風送香氣。竹露滴清響。欲取鳴琴彈。恨無知音賞。感此懷故人。中宵勞夢想。

山光西に落ち池月東に昇る、正に是れ晝暑漸く退き晚涼新に來るの時なり、閒敞

とは後漢の張衡が南都賦に體爽塏以閒敞、紛郁郁其難詳といへるに據れるものにして、敞は高顯の處を謂ふなり、散髮して禮法に拘はらず、此の涼夜に乗じて南軒を開き高敞の處に安臥せば、清風衣を吹きて荷香室に滿ち、竹影婆娑として露滴響きあり、清景斯の如し殆ど脱座の想ありと、山光以下竹露に至るの六句は、力を極めて今夜の閒適を描寫し、又一面には此の清景は即ち辛子を懷想するの所以を見はすなり、凡そ物に觸れ景に感じて懷人の情を動かすは君子の當に然るべき所なるも、荷風竹露の二句なくんば、其情や深しと雖も未だ人の同情を惹くことを得ず、一篇沒趣味の詩に止らんのみ、此の二句あるなり、清景観るが若く、全首皆振ふ、作者力を用ひしも亦た此處に在り。

月明かに風清く、荷香人を薫ず、此の如きの清景惜むらくは故人と之を共にせざることを、乃ち琴を取りて之を撫せんと欲するも、坐に知音の人なく、茲に因りて感を生じ、辛子を懷ふの情極めて切に、徒らに中宵の夢想を勞するのみと、知音とは列子に伯牙鼓琴、志在高山、鍾子期曰、峩峩然若泰山、志在流水、曰、洋洋然若江河、子期死、伯牙絕絃、以無知音者、とあるに據りて、自己と辛子との交情深密なるは、猶ほ

伯牙の子期に於けるがごとくなるに擬し、琴を彈せんと欲して知音なきを正説すと雖も、畢竟彈琴は餘事のみ、辛子を懷ふの極、琴を借りて自己の所懷を述べしに過ぎざるなり。

此詩句法平易にして解し易きを以て、或は咄嗟の作にして絶えて力を費やさざるものと爲すあらん、然ども細心首尾を咀嚼すれば、實に苦吟嘔心の作たるを知るに難からず、何となれば首句先づ夕陽新九に没するを以て起し、承くるに池月の漸く生ずるを以てす、是に於て軒を開きて涼を納るれば、清風荷香、竹露清響、一として皆爽涼の具ならざるはなく、晝間の炎熱を一掃し、適殊に甚しきを以て乃ち鳴琴を取りて之を彈せんと欲し、遂に辛子を懷ふに至り、其の極中夜の夢想を勞すと、句々次序あり、而して結ぶに中宵の字を以てす、方に起の山光西落の句と映對して作法の苟くもせざるを知るべきなり、大凡そ詩は苦吟にあらざれば工ならず、是故に王維は走りて醋甕に入り、裴祐は手を袖にして衣袖皆穿つに至り、孟浩然に至りては眉毛盡く落ちたりと云ふを以て見れば、其の嘖稱せらるゝ所以蓋し豈に偶然ならんや、今此の詩を以て之を考ふるに、流暢滑落、一句一字の凝

滞なく毫も苦心を費やせし痕跡を見ず、則ち知る其の苦心を費やさざるに似たる處は、反て苦心を費やせし處たることを。

臨洞庭贈張丞相

洞庭湖は湖南省岳州府城の西南一里許に在り、沅、漸、澧、辰、溆、酉、澧、瀟、湘の九水は、皆洞庭に灌注し、東流して揚子江に入る、湖の周廻は三百六十里あり、其の横互は、南青草湖に連り、西赤沙湖を呑み、實に七八百里あり、青草湖は巴陵縣南七十九里、長沙湘陰縣北百里に在り、周廻二百六十五里ありて、冬春の間は青草繁茂し、彌望際なきも、六七月の交、岷山峨山の積雪一時に消融するに及んで、水暴漲して洞庭と混じて一と爲るなり、赤沙湖は巴陵縣の西百里常徳府龍陽縣の東西三十里に在り、周廻百七十里あり、夏秋に當りては亦た氾濫して一と爲る、而して洞るゝ時は、惟、赤沙の彌望たるを見るのみ。

九水洞庭に灌注す、故に或は洞庭を稱して九江と曰ふ、尙書禹貢の九江即ち是なり、亦た之を稱して三湖と曰ふ、赤沙、青草合して一と爲れるが故なり、張丞相は張九齡をいふなり、九齡の畧傳は既に本講義録第二卷に掲げり、就

きて見るへし

八月湖水平。涵虛混太清。氣蒸雲夢澤。波撼岳陽城。欲濟無舟楫。端居耻聖明。坐觀垂釣者。徒有羨魚情。

此の詩は湖に臨みて仕を求むるの思を興し、復た其の才を量りて進むを欲せざるなり、涵は含むなり、涵虛といふは其の清曠なるを狀するなり、太清は天なり、混すといふ乃ち天に連るを知るへし、雲夢は二の大澤の名にして、德安府安陸縣に在り、讀史方輿記要に漢陽志を引きて曰く、雲は江の北に在り、夢は江の南に在りと、以て其の位置を知るべし、江とは揚子江をいふなり、岳陽城は巴陵縣に在り、羨魚は漢の董仲舒の言なり、曰く、古人言へるあり、淵に臨みて魚を羨まんよりは、退きて網を結ばんに如かずと。

『八月湖水平』見るべし秋高く水溢れ、九江合流し、青草赤沙皆合して一と爲り、浩浩湯湯、浮天岸なきことを、『涵混太清』乃ち知る洞庭の濤勢は、殆ど太虚を涵して天と混同するの想あることを、水勢の雄なる此の如し、故に其の氣は雲夢の二澤を鬱蒸し、其の波は岳陽の城を搖撼し、二澤一城殆ど浮動せんと欲すと、以上の四句力を

を極めて洞庭の雄濶を寫し、以て下の『欲濟』云云を興するなり、即ち前半は洞庭湖にして後半は懷を寄せしものとす、蓋し洞庭の雄偉壯大は天下に絶す、之れに臨みて平常轉軻不遇の感勃然として湧出し、是に於て斯の興感あるなり、夫れ雲梯途絶えて才を懷き售れず、猶ほ湖を濟らんと欲して舟楫なきがことし、是故に安然として家居し碌碌爲すことなし、豈に此の明時に愧るなからんや、我れ今垂釣者の魚を得るを觀れば、亦た羨魚の情あるを免かれず、然ども董仲舒の所謂淵に臨みて魚を羨まんよりは、退きて網を結ばんに如かずとの語に比せば、我が羨魚の情に禁する能はざるも、畢竟網を結びて未だ進めざるなり、尙ほ何ぞ魚を羨むことをせんやと、後半は懷を寫したる者と雖も、毫も前半臨湖の題位を離れず、舟楫垂釣羨魚等の字を用ゐて以て自己の衷情を述べ、彼我双關して妙味更に津津たるを覺ふ。

一説に坐觀以下の二句を解して、垂釣は出仕の人に比するなり、釣を垂るや魚を得る限りあり、故に魚を羨むの情あるなり、出て仕ふる者は未だ必ずしも大に濟す所あらず、故に徒然羨を興すのみ、襄陽の志は仕ふるを欲せず、故に其の言や此

の如し孟襄陽の羨あるにあらざるなりと曰ひ。羨魚の二字を以て之を垂釣者に歸し釣者魚を羨むものとして解せり、蓋し其の是の如き所以は襄陽夙に穩逸の志ありしが爲め、遂に之に曲解せしのみ抑、襄陽當初より穩逸の志ありしは固なるも、嘗て京師に上りて試に應ぜり、即ち其の意、未だ世に立ちて道を施すを冀はざるにあらざるや明けし、玄宗之を用ゐず、故に終南に穩居せしのみ、夫れ道を抱くの情物に觸れ景に感ず、豈に發する所なくして可ならんや、是を以て湖に臨み此の感あり、以て人の要路に上り、己れ獨り輾轉不遇なるに喩へ、其極や己れ之才を量りて進むを欲せざるなり、詩人温厚の旨全く此に在りて存す、若夫れ勃窣理窟以て詩を解せば、竟に詩の本旨を失ふに至らん、察せざるべからず。

宿桐廬江寄廣陵舊遊

桐廬江は浙江省嚴州府桐廬縣に在り、浙江の上源なり、衢婺歙三州の水合して東北に流ること十里にして始めて桐廬縣に入る、縣の西三十里許にして所謂富春山あり、一に嚴陵山と名つく、漢の嚴子陵釣を垂るゝ處なり、江其下を流れ、更に北して桐廬山下に入る、山は縣東二里に在り、江此に至りて桐

睦の二水合會す、山下に亭あり、合江と曰ふ、亭下山あり、巍然として直ちに其首を壓すること、渴鯨の水に入るの狀あり、之を桐君山と名つく、桐君富春の間は羣山蜿蜒として兩蛇の對走するか如く、江水其下に流れ、山石に抵り、澄擊沫を成す、水此れより東流して遂に海に入る。

廣陵は江蘇省揚州府江都縣の治に屬す。

山暝聽猿愁。滄江急夜流。風鳴兩岸葉。月照一孤舟。建德非吾土。維揚憶舊遊。還將兩行淚。遙寄海西頭。

一二先づ桐廬江を言ひ兼ねて時の正に夜なるを點明し、三四夜泊の光景を述べ、五六旅泊を承けて客懷に入り、七八友を憶ふの切なる遂に數行の涕淚を寄する所以を言ひて收結す、約言すれば上半は桐廬江の夜泊、下半は廣陵の舊遊を憶ふなり、結構此の如し。

山暝く猿愁ひ長江夜流る、客子此の風光に遭遇せば懷を傷せざるもの殆ど稀なり、况や兩岸の樹葉は皆秋聲を作し、明月高く中天に懸りて輝輝として孤舟を照すに於てをや、以上四句夜泊淒涼の景を拙寫して猿愁、夜流、風鳴、月照の字を用ひ

更に一の孤字を著け旅况の蕭條を見はし、愁を言はずして其愁言外に在るを覺へしむるに至りては、鍊字の極則畫も亦た抽寫する能はざるの處とす、此の一字ありて全首皆振ふ。

『建德非吾土。維揚憶舊遊』即ち本篇の精神なり、上半蕭條の光景を把りて力を極めて之を寫し、此に至りて舊遊を憶ふ所以を發揮す、上半の抽寫なくんば後聯何の妙趣あることなし、一叙一解老氣比なしと謂ふべし、建德は亦た嚴州府治の一縣、維揚は揚州の別名なり、言ふは建德は吾が故郷に非ず、是故に舟を此の江に泊せば滿目皆斷腸の具たらざるなく、百感胸に萃る、是に於てか廣陵の舊遊を憶起し、其極數行の涕淚を以て故人に寄するなりと、廣陵は海の西方に在り、故に之を海西と謂ふなり、一片の真情言表に溢る、顧ふに故人此の詩を得て亦た當に涕泣一番すへきなり。

留別王侍御維

襄陽夙に王摩詰と心交あり、將に去りて其郷に還らんとす、此の詩を賦して留別せしなり。

寂寂竟何待。朝朝空自歸。欲尋芳草去。惜與故人違。當路誰相假。知音世所稀。祗應守寂寞。還掩故園扉。

『寂寂竟何待』は留別已前の意なり、言ふは待ちて此の寂寥を破りし者今將に之を捨て、故山に歸らんとするなりと、二句既に無量纏綿の意を帶ぶ、向きの芳草に對して遠く去るに忍びざるものは、一たび故人と違へば容易に相見るの期なく、而して寂寥を解くの人なきを恐れてなり、今日遂に去らざるを得ざるに至る、奈何ぞ黯然たらざるを得んやと、依依去るに忍びざるの情紙上に躍然たり。

夫れ我れの摩詰に於けるは交誼極めて深く、所謂心交なるものにして、蓋し世の有る罕なる所とす、之に反して世上幾多の交情を見るに、反覆常なく、殆ど波瀾の如く、當路顯貴の人と雖も毫も假借せず、所謂知音なる者を求めんと欲するも洵に難し、人情此の如し、是に於て彼我交情の益、有る罕なるを知るなりと、當路は史記張儀傳に蘇秦既當途とあり、要路に在るを謂ふ。

結二句は全篇を總束するなり、心交ある彼我二人の如きも遂に手を分ちて分離せざるを得ざるに至る、則ち我れの君に依りて寂寥を解きしものも、一たび故山

に還れば復た提携唱和するの伴なく、此の後ち唯、寂寞を守りて柴扉を掩ふあるのみ、此の別の殊に情に關する所以なりと、情深く語絶、所謂涙あらずして啼き聲なくして泣く者とは蓋し此等を謂ふならん。

與諸子登峴山作

峴山は湖北省襄陽府南七里に在り、亦た南峴と曰ふ、唐の六典に峴山は山南道の名山なりとあり、晋の羊祜襄陽を鎮するや、毎に此に登る、嘗て從事鄒湛等を顧みて曰く、宇宙ありしより便ち此の山あり、此に登る者多し、然るに曾湮滅して聞ゆるなし、人をして悲傷せしむ、百歳の後知るあらば、魂魄應に此に登るべきなりと、湛の曰く、公の徳は四海に冠し、道は前哲を嗣ぐ、必ず此の山と俱に傳らんと、祜卒す、百姓爲に碑を峴山に建つ、其碑を讀む者涕泣せざるなし、杜預因りて名けて墮淚碑と爲す、此の詩は此に登りて、感慨する所ありて作りたるなり。

人事有代謝。往來成古今。江山留勝蹟。我輩復登臨。水落魚梁淺。天寒夢澤深。羊公碑尚在。讀罷淚沾巾。

一二先づ人事の代謝往來古今とを以て總提し、三四之を承けて登臨する所以を明示し、五六登覽の光景を述べ、七八其の羊祜の舊迹たるを提醒し、首二句に回應せしめて收結す。

『人事有代謝。往來成古今』起既に無量の感慨あり、代謝とは後事之に代れば前事謝し去るを謂ふ、往來は此れ往きて彼れ來るの謂にして、古今は往來の積るものなり、人事代謝し、此れ往き彼れ來り、節序匆匆轉盼の間早く古今を成す、人世の變遷蓋し感愴に堪へざるものありと、『江山留勝蹟。我輩復登臨』夫れ人世は變遷代謝極りなしと雖も、獨り江山に至りては古今改めず、長く勝蹟を留むが故に、今日二三子と此の山に登臨する所以なり。

羊腸を攀り險崖を陟り絶頂に達して一望すれば、時正に窮冬にして木葉凋落し四顧蕭條たり、况や衆水皆涸れて魚梁顯露し其淺を見るべく、天寒くして夢澤悉く竭き其深を見るに於てをや、誰れか情を傷せざるものぞと、淺は水を以て言ひ、深は地を以て言ふなり、殊に山中羊公墮淚の碑あり、今日尙ほ存せり、我れ今之を讀みて人事の代謝し易く轉盼古今を成すを悲み我輩の登臨するや、後世の人我

を知る羊公の如き者あるかを願みれば、流涕せざるを欲するも得べからざるなり。
 一説に碑を讀み涙涕襟を沾すを以て羊公を悲む者となせり、謬れりと謂ふべし。
 果して羊公を悲む者となせば、單に凭吊の詩に止り趣味殊に淺しと爲す、正に人事代謝あるが爲に、此碑を讀みて羊公の悲みし所以を悲みて流涕せしとするの
 妄なるに若かず、尙在の二字深く味ふべし。

晚泊潯陽望廬山

潯陽江は江西省九江府德化縣に在り、即ち大江なり、潯陽と謂ふ所以は地に
 隨がつて名を易ゆるのみ、府の東南は所謂鄱陽湖(一名彭蠡)にして周廻四百
 五十里、四郡の境を浸して北海陽に接し、合して東北に流るゝこと數百里、遂
 に海に入る、蓋し揚子江は地球上六大川の一にして、細、比、利亞に亞くは人の
 知る所なり、地上に露るゝ源頭より算して尙ほ三千二百九十哩あり、之を西
 藏より葱嶺に至る二千有餘哩の伏流に合算せば、恐らくは世界第一と稱す
 るに足らん、是の如き大江なるか故に潯陽の兩岸尙ほ二十里の廣さありと

いふ、以て其雄なるを知るへし。

府南二十里に廬山あり、高さ二千三百六十丈、周廻二百五十里、重疊巍峩鬱と
 して南方の巨鎮とす、山は本と南嶂と名づく、殷周の時匡俗字は君平なる者
 あり、兄弟七人と廬を此に結びて隱居せり、故に廬山と曰ふ、峯巖、洞壑の南康
 府(大江の南に在り湖に接せり)の界に在る者は悉く數ふべからざるも、最著
 なる者を五老峯と曰ひ、石山骨峙ち突兀として雲霄を凌ぎ五老人の肩を駢
 べて立つの狀あり、石鏡峯と曰ひ、紫霄峯と曰ひ、凌霄峯と曰ひ、鐵船峯と曰ひ、
 漢陽峯と曰ふ、漢陽峯は廬山の絶頂に在り、一望數百里目を江漢に極むが故
 に此の名あり、漢陽峯の水西流しては康王谷の谷籬瀑と爲り、東流しては開
 先寺の雙瀑と爲る、李白の掛流三百丈。噴壑數十里と云へるは即ち是なり、
 廬山の南瀑布十を以て數ふ、而して開先寺の双瀑を最勝と爲す、五老峯下に
 棲賢谷あり、西に方りて三峽洞あり、洞は大小支流九十九派を受け、水石間に
 行き聲雷霆の如し、相ひ近きを白鹿洞と曰ひ、又た白雲洞あり、栗里原あり、棲
 賢谷は唐貞元中李渤此に隱れ因りて名あり、白鹿洞は、亦た李渤兄と棲隱の

處、石晉昇元中學館を其下に建つ、宋に至りて改めて白鹿書院と爲せり、栗里原は晋の陶潛隱居の處となす、此れ南康の勝概なり、若し夫れ九江府の界に在る者を擧ぐれば、双劍峯の形勢天を挿み宛として、双劍の如きあり、香爐峯の圓聳なるあり、石耳峯の二峯並び聳ゆるあり、其他蓮花、大林の二峯あり、又た上霄峯あり、絶頂に石室あり、相ひ傳ふ大禹の石刻あり、其中に藏すと、又た石門あり、廬山の西南に在り、双闕對峙し、瀑布其中より出づ、七嶺の美奇を此に蘊む、大凡そ廬山は三面水に阻し、西は大陸に臨み、羣山の舞臺する所と爲り、山に主峯なく、蜿蜒蟬連し、各自ら勝を爲す者とす、是れ廬山勝地の大略なり、境中の奇巖怪石の如きに至りては、蓋し僂指するに遑あらざるなり。

挂席幾千里。名山都未逢。始見香爐峯。嘗讀遠公傳。遠懷虛外躡。東林精舍近。日暮坐間鐘。

帆を掛けて數千里を渉る、其の間未だ一の名山に逢ばすと、以て下の香爐峯を見るを得たるの喜びを伏し、且つ舟行既に數句、羈旅倦厭の情あるを隱説す、黃香石此の二句を評して曰く、一起超脱と、確評と謂ふべし、挂席は帆を挂かぐなり、謝靈

運の詩に基く、廬山は三面水に阻せられ、潯陽より之を望めば南面を見るを得べし、舟行千里、潯陽に泊するに迫んで始て香爐を望む、猶ほ幽谷を出て、萬花叢中に入るごとく、羈愁一掃、心胸豁然の狀、歴歴として観るごとし、乃ち首二句の提起ありて能く然るものとす、詩の落筆を争ふ所以なり。

惠遠は晋の義熙間の人なり、廬山に一の精舍を建て、名けて東林寺と曰へり、言ふは予れ嘗て遠公の傳を讀みて、其の塵外に居を下し、然かも天下の勝區に在るを懐ひ、未だ嘗て此の山に神馳せずんばあらず、今日何の幸ぞ舟を潯陽に泊して、素願を充すことを得、且つ東林寺は近く眼前に在りて、指顧の間、暮鐘數杵、殷殷として客船に落つありと、前聯に始見香爐峯の句あり、故に後聯に於て自己平素神馳の所なるを以て之に接し、七八遠公と廬山とを綴束せんか、爲に東林を點出せしなり、句法の妙言、説すべからざる所に在り、若し夫れ「遠」の字、「近」の字と相映對し、「坐」の字を以て自己の位置は舟中に在るを見はせしか、若きに至りては、豈に粗心の人と語るべけんや。

按ずるに、集中彭蠡湖中望廬山の作あり、恐らくは同時の作ならんか、紙幅過長の

嫌なきに非ざるも亦た参考に資するに足るものあらん、故に贅疣を顧みず掲げ示す。

太虚生月暈。舟子知天風。挂席候明發。眇漫平湖中。中流見匡阜。勢壓九江雄。黯黯容霽色。崢嶸當曉空。香爐初上日。瀑布噴成虹。久欲追尙子。况茲懷遠公。我來限干役。未暇息微躬。淮海途將半。星霜歲欲窮。寄言巖栖者。畢趣當來同。

遊精思觀迴王白雲在後

此の詩王迴白雲と精思觀に遊び、日暮家に歸るに及びて、途白雲と失す、此の作ある所以なり、題目は宜しく讀みて遊精思觀迴王白雲在後句となすべし。

出谷未亭午。至家日既曛。迴瞻下山路。但見牛羊群。樵子暗相失。草蟲寒不聞。衡門猶未掩。佇立望夫君。

亭午は日の午に在るを謂ふなり、梁元帝の纂要に見ゆ、曛は日の入るなり、衡門は詩經に衡門之下可以栖遲とあり、本邦の所謂かぶきもんなり、夫君は彼我相稱の

辭にして、楚辭に望夫君兮不見とあるに據りて用ゐたるなり。

精思觀は山谷深遠の中に在りて家を去ること極めて遠しとす、超承の二句を味へば自ら諒解するを得べし、而して歸路の遠き途に日暮に至るは、正に王白雲と相失する所以の意も亦た見るを得べきなり、三四は日暮を承けて説くなり、廻る時に於て山を下るの路を瞻れば、暮靄蒼然として樵路を封じ、但、幾多牛羊の處處に彷徨するあるのみと、薄暮山野の光景を寫すに語必ずしも深からずして其妙を見る、老手に非ずんば能はざるなり、此の二句は蓋し詩經の日之夕矣。牛羊下來といふに基けるならん。

五六は樵子草蟲の二句を著けて王白雲の後に在るを言外に見はせしなり、樵子は山路に馴るる者なるも此の暗夜に當りては相失せざるものなし、且つ草蟲の能く吟ずるものも、此の夜寒に怯れて皆其の聲を絶ち、四邊洵に寂寥たりと正叙して裏面には樵子すら相失するの今夜我れの王白雲と失せしは理なきに非ず、或は其の後れて來るを思ひ、幾度か途中低回して願望するも、寂寥の極處聲すら聞くを得ず、則ち相失するや太だ遠しとの意を含有せしめしなり、「暗相失」寒不

聞此の六字を著けて尤も精彩あるを覺ふ、末二句は前六句を繳束するなり、王白雲後に在り之を望みて見え、故に後に歸るも未だ衡門を掩はずして佇立夫君の早く來らんを待つなりと。

此の詩の作法を概説すれば前四句は精思觀に遊ひて廻るを説き、後四句は王白雲の後に在るを見はすなり、更に之を細説すれば、首二句は觀に遊びて廻るなり、三四蹄路の所思、五六相失す、七八湊合す、章法此の如し。

題大禹寺義公禪房

寺は浙江省紹興府會稽縣會稽山中に在り、此の山は古來史上に散見する種めて多く、禹の東巡して此の山に禪せしは管子に見え、戰國の時越王句踐吳王と戦ひ大敗して餘兵を以て此れに棲みたるも亦た人の知る所なり、其他秦の始皇南巡して此の山に登り大禹を祭り南海に望祭し石を建て刻して秦徳を頌せしこと史記に載せたり、唐六典に江南道の名山を會稽と曰ふとあり、以て此の神秀なるを知るべし。

山は府の東南十二里に在りて、阜を連ね岫を接し、一峯高く天を刺す、平地より山頂に趨く七里、懸磴孤危、峭路險絶、蘿を攀り葛を捫して然る後ち升るといふ、山後には望泰山あり、一に天柱峯と名く、又た卓筆峯と曰ふ、始皇此れに登りて以て秦中を望みし所なり、會稽の西を法華山と曰ひ、會稽の南を雲門山と曰ふ、俱に稱して秀異と爲す、是れを會稽の大略とす。

按するに寺を稱して大禹と曰ふは蓋し禹の嘗て此に登りしを以て此の名ある歟、姑く録して疑を存す。

義公習禪寂。結搆依空林。戶外一峯秀。階前衆壑深。夕陽連雨足。空翠落庭陰。看取蓮化淨。應知不染心。

此の時前半は義公の禪房を讚し、後半は義公の禪心を讚するなり、安禪して寂を守る必ず先づ禪房の清幽なるを擇ばざるべからず、義公能く之を知れり、故に屋を設くるに空林に依り清と幽とを并せて其居と爲せりと、首句先づ義公を言ひ次句禪房を言ふなり、三四は結搆空林を承けて言ふ、戶外只一峯あり、故に其の秀を覺え階前衆壑に臨み幽邃測られず、故に其の深きを覺ふと、先づ禪房所在の地を言ひ、兼ねて一峯の秀を以て義公の道德高くして世表に超出したるに喩へ、衆

登深を以て禪理の深遠測るべからざるに喩ふ文意双關妙言ふべからず。
雨足は雨脚なり、夕陽雨を帯び庭陰翠を加ふ、一望澄淨真に穢塵なし、清絶と謂ふべし、若し夫れ庭前の蓮花の如きは汚泥を出で、汚泥に染まざるものなり、義公不染の心は此の花に比して遜色なげんと、蓮花は佛氏常に之を法に喩ふ、楞嚴經に光中湧出千葉寶蓮花、化如來坐寶華中とあり、義公の禪僧なるを以て直ちに取りて之を讚せるものとす。

歲暮歸南山

南山は終南山なり、襄陽舉に應して第せず、遂に終南山に隨居するの已むを得ざに至る此の作あるは深く傷むべきなり。

北闕休上書。南山歸敝廬。不才明主棄。多病故人疎。白髮催年老。青陽逼歲除。永懷愁不寐。松月夜窓虛。

北闕は宮門を謂ふ、青陽は爾雅に春爲青陽とあり、書を北闕に上つるを休めて是より將に終南の敝廬に歸らんとす、其の故何ぞや、蓋し吾れの不才は明主の棄つる所と爲り、吾れの多病は朝中の故人と疎なるを以ての故のみ既に明主の用ゆる所と爲らず、且つ故人の推薦を得る能はず、輾轉不遇の極、歸心油然として生ぜしなりと、不才と多病とを以て明主と故人とに納れられざるに歸す、詞意温厚、素養知るべきなり、以上四句終南に歸るの故を言ふ。

白髮人を催して吾れの年漸く老ひ、今歲將に除せんとして來歲の春將に來らんとす、他郷に客と爲りては、愁を添へざらんと欲するも得べからず、之を憶ひ之を念へば夜深くして寐を成す能はず、但、見る松間の皎月は窓を照して窓前空洞更に長物なきを、仕進既に難くして志は山に歸るに切なり、然ども流年人をして空しく老しめ生て世に用なし、誰れか黯然魂を消せざらんやと、後四句は情を寫すなり。

古來襄陽を評するの語數あるも、其の最も肯綮に中るものを擧ぐれば、晚唐の皮日休は景に遇ふて韻に入り、奇を拘し異を抉し、醒睡として入口に束ねしむる者にあらずと曰へり、能く襄陽を知る者と謂ふべし、以上評釋せし數詩の如きも、多くは之を平叙して更に奇異なく、而して熟讀玩味すれば趣味淵淵として盡きず、韻の高きに因らざらんばあらず、大凡そ人に在りて氣象同じからず、其の同じから

ざるは適性情の正を見る所以なり、太白の空靈漂渺、少陵の雄渾雅正、亦た胸中在る所を吐露するに過ぎず、一毫の修飾あるなきなり、若し夫れ強めて忠臣愛國の字を臚列し、以て一時を欺瞞せんと欲するも、既に肺腑より出でず、詩や佳なりと雖も、奈何そ人を動すを得んや、見るべし作詩の要は修飾にあらずして性情の正なるに在り、綺縠にあらずして辭氣の眞なるに在ることを、是れ學者知らざるべからざるの要件とす、聊か之を記して本集の評釋を終ふ。

「唐賢三昧集」 完

「李白詩評釋」

緒言

李太白の詩集は選本には明人張愈光の李詩選あり、選評せし明人應泗源の李詩緯あり、其の註ある者は宋人楊子見を始とし、宋人蕭粹齋の分類補註李太白集あり、楊子見の註を附して之を刊し、其の他明李の胡孝轅著李詩通、清人王琦著李太白全集輯註等あり、余の今講資と爲す所は一に王琦の輯註に依れり。王琦は杜詩を註する者百有餘家に上り而して李を註する者僅に楊蕭胡等の數家に止まるを憾みて此の著あり、然とも以上三家の外に向つて全く新意を出たせしに非ず、三家の註を合して繁蕪を芟柞し、闕畧を補増し、疑を析し、謬を匡し、以て更定せし者にして、殊に地形鳥獸草木の名稱等に至りては尤も其の力を盡したりといふ、乃ち知る王琦の輯註は從來世に行はるゝ註釋書中の善本たることを、余の講資に供する所以は蓋し此を以ての故のみ。

輯註は凡て三十六卷あり、首一卷は古賦を載せ、三卷より以下二十五卷に至る

まては樂府及び古近體を載せ、二十六卷より二十九卷に至るまては表、書、序、文、記、頌、墓碑、祭文を載せ、三十卷以下末卷まては詩文の拾遺及び附録とす、合して十二冊とす。

記載の躰裁は既に前にいふ如く二卷樂府以下古近躰詩を合載して復た類を分たす、故に之を講するに方りても、唐賢三昧集の如く古詩を先として近躰に及ぶ能はず、一に書中記載の順序に従へり、若し夫れ全部を評釋する能はざる所以は既に前に言ふ如し、讀者之を諒して可なり。

李白小傳

李白字は太白、青蓮と號す、涼の武昭王李暠九世の孫なり、其の先は隋末に罪を以て西域に徙されしか、唐の神龍中宗の年號の初遁れ還りて巴西に客たり、白の生るゝや母長庚星を夢む因て以て之を命せり、白幼にして聰慧、十歳既に詩書に長す、既に長して蜀の岷山に隱る、州有道に擧げしか應せず、蘇頲の益州の長史と爲るや、白を見て之を異として曰く、是の子天才英特なり、若し之を廣むるに學を以てせば以て相如と肩を比すへしと、然とも縦横の術を喜み、擧劍任

俠を爲し、財を輕んして施を重んず、後ち任城今の山東省濟寧府治に客と爲り孔巢父、韓準、裴政、張叔明、陶沔等と魯の徂徠山に居り、日に沈飲し、時に竹溪の安逸と號せり、天寶玄宗の年號元年會稽に客遊し、道士吳筠と交り、共に剡中に居れり、會筠召されて闕に赴きしかは、因て白を薦む、玄宗即ち詔を下して之を徵す、白遂に長安に至り、太子賓客賀知章に遇ふ、知章其の文を見て歎して曰く、子は謫仙人なりと、玄宗之を金鑾殿に召見し、問ふに國政を以てす、白頌一篇を奏す、帝之を喜みし爲に食を賜ひ御手羹を調し、以て之に飲せしめ、謂て曰く、卿は是れ布衣なれども名朕に知らる、素より道義を蓄ふるに非ずんは何を以て此を得んやと、命して翰林に供奉せしめ、専ら密命を掌らしむ、然とも性酒を嗜み常に飲徒と市に醉ふ、一日帝沈香亭に坐す、意感する所あり、白をして樂章を爲らしめんと欲し、召し入る、而して白既に大醉す、左右水を以て面に沃きしかは、稍解けたり、即ち筆を乗らしむ、頃らくして成る、辭詞婉麗、精功なり、帝甚た之を才とし、數宴に侍せしむ、因て沈醉して足を引き、高力士をして靴を脱せしむ、力士之を耻ち、其の詩句を摘み、以て楊貴妃を激す、帝三たび白を官にせんと欲し

たりしも妃輒ち之を沮む是に於て白親近の容るゝ所と爲らざるを知り、懇ろに山に還るを求む、帝遂に金を賜ふて放ち還らしむ、是より四方に浮遊し、北燕、趙、魏、晋に抵り、西邠岐を涉り商於を歴て洛陽に至り、南淮泗に遊ひ、再ひ會稽に入り而して魯中に家す、天寶十四年安祿山の叛するや、玄宗蜀に幸せんとして塗に在り、時に永王璣、玄宗第十六子、江陵府の都督たり、其の才名を重んじ、辟して幕中に致せり、永王の兵を起すに及んで、脅して以て偕に行かしむ、永王敗るに及んで、白亡けて滄澤に走りしか、遂に執へられ潯陽の獄に繋かる、初め白の并州に遊ふや、郭子儀を見て之を奇とす、子儀嘗て法を犯す、白爲に之を救解す、是に至り子儀官を解き以て贖んことを請ふ、詔ありて夜郎に長流せらる、是に於て遂に洞庭に泛ひ三峽に上り巫山に至る、後ち赦を以て潯陽に還り、李陽冰に當途に依る、會代宗位に即き左拾遺の官を以て召せしか、時白既に卒せり、實に寶應元年十一月なり、年六十二、——白卒するに臨みて臨終の歌を賦す曰く、

大鵬飛兮振八裔。中天摧兮力不濟。餘風激兮萬世。遊扶桑兮桂石袂。後人得之傳

此。仲尼亡兮誰爲出涕。

一説に白宮錦袍を着け米石の江中に遊ひ傲然自得旁ら人なきか若し、因て酔ふて月影を見て之を捉らんとし遂に溺死すと、是の説非なり、既に自作臨終の歌あるを以て見るも、其の陋妄たるや明けし。

初め白牛渚磯を渡り、姑熟に至り、謝家青山を悦ひ終焉の志あり、卒するに臨み龍山の東麓に殯す、元和(憲宗の朝)の末、宣歙觀察使杜傳正之を青山に改葬し其の志を遂けしめぬ、文宗の時詔して白の歌詩、裴旻の劍、張旭の草書を以て三絶と爲さしめたり。

蜀道難

八〇

此の詩は太白安祿山の華を亂し天子蜀に幸するを聞き慨然として作れる者なり、初め祿山齒州の節度使張守珪に屬し奚契丹を撃ちしか、敗軍の罪によりて斬に當す、守珪其の才勇を惜みて京師に送り朝廷の處分を仰く、玄宗祿山を見て其の罪を赦し、後遂に爵を東平郡王と賜ひ、寵遇一時に冠たり、祿山竊に禍心を包藏せしか、李林甫の權數を恐れ敢て發せさりき、林甫死して楊國忠代りて相と爲るに及び遂に反す、時に四海清平、民兵革を識らず、祿山十五万の兵を帥ひ洛陽に向ふ、州郡皆風を望んで瓦解す、唐の哥舒翰兵馬副元帥を以て潼關を守る、亦た敗る所と爲る、賊兵進んで長安に向ふ、是に於て楊國忠首に蜀に幸するの策を倡ふ、玄宗因て太子及び貴妃楊氏を從へて出奔し、馬嵬に次る、將士飢疲して皆憤懣し、國忠等を殺し、帝に逼りて貴妃を殺して發す、父老道を邁り留らんことを請ふ、可かす、太子を留めて發す、成都に至る比ひ、從官及び六軍從ふ者僅に千三百人なりき、太白深く玄宗の蜀に幸するの大計に非ざるを知り、君を思ふの熱情は抑へんと欲して抑ゆる能はず、故に此の詩を作りて意を達せしなり。

噫吁嚱危乎高哉。蜀道之難難於上青天。巖巖及魚鳧。開國何茫然。爾來四萬八千歲。乃與秦塞通人烟。西當太白有鳥道。可以橫絕峨眉巔。地崩山摧壯士死。然後天梯石棧相鉤連。上有六龍回日之高標。下有衝波逆折之回川。黃鶴之飛尙不得過。猿猱欲度愁攀援。青泥何盤盤。百步九折縈巖巒。捫參歷井仰脅息。以手撫膺坐長歎。問君西遊何時還。畏途巖巖不可攀。但見悲鳥號古木。雄飛雌從繞林間。又聞子規啼夜月。愁空山。蜀道之難難於上青天。使人聽此凋朱顏。連峯去天不盈尺。枯松倒挂倚絕壁。飛湍瀑流爭喧騰。砢崖轉石萬壑雷。其險也若此。嗟爾遠道之人。胡爲乎來哉。劍閣崢嶸而崔嵬。一夫當關萬夫莫開。所守或匪親。化爲豺與狼。朝避猛虎。夕避長蛇。磨牙吮血。殺人如麻。錦城雖云樂。不如早還家。蜀道之難難於上青天。側身西望長咨嗟。

劈頭先つ蜀道の險絶天下に冠たるを説き一篇の綱領と爲す、巨刃天を摩するの勢あり、『噫吁嚱危乎高哉』蜀道之難難於上青天、『噫吁嚱』は宋景文公筆記に蜀人物を見て驚異すれば輒ち噫嚱と曰ふと謂へり、蜀地の險を狀せんと欲するか故に此の語を借りて之を用ひしなり、蜀道の危険高峻なる之に攀つるは賊に難く殆

と青天に上るか若きの思ありと、以て當時忠臣義士の君に難に從かはんと欲する者も蜀に至るの難きを以て其の意を遂ぐる能はざるを言ふなり『蠶叢及魚鳧開國何茫然。爾來四萬八千歲。乃與秦塞通人煙。』蠶叢魚鳧は俱に蜀の先王なり、開く蜀の先世に蠶叢及ひ魚鳧あるとを、然とも其の開國や洵に舊るく、爾來四萬八千歳の年所を経て始て秦と人煙を通するに至れりと、蓋し秦は蜀と相距ること遠からざるも、蜀の地たるや古來一隅に僻在し聲教の暨はざる所とす、則ち中國帝王の都と爲すへからざるや明けし、『西當太白有鳥道。可以橫絕峨眉巔。地崩山摧壯士死。然後天梯石棧相鉤連。』太白山は陝西省鳳翔府郿縣の東南に在り、其の山巔高寒にして草木を生せず、盛夏と雖も積雪消せずといふ、鳥道は飛鳥の通路、地崩云云は、相傳ふ秦の惠王蜀王の色を好むを知り、五女を蜀に許嫁す、蜀五人の壯夫を遣はして之を迎ふ、還りて梓潼に到りて一の大蛇の穴中に入るを見て、其の一人尾を攪りて之を掣く、禁む能はず、是に於て五人相助けて大呼し之を拽く、山岳一時に崩墜し、五女及び五人皆壓殺せらる、是の時山分れて五嶺と爲るといふ、言ふは長安の正西に當りて大白山あり、峻峯天を刺し飛鳥は僅に低缺の所を過きり

以て徑路と爲し峨眉の巔を横絶するを得、夫れ蜀の險なる此の如し、人跡の能く往來する所に非ざるや知るべきなり、五丁壓死の後、蜀道僅に開け、梯棧相連り、始て秦と相通するを得て、以て今日に至ると、梯と棧とを俟ち僅に蜀に至るを得、若し蜀に安處して賊棧道を燒毀せば、則ち永く中原と道斷へん、天子の居る所に非ざるや見るべきなり、『上有六龍回日之高標。下有衝波逆折之回川。黃鶴之飛尙不得過。猿猱欲度愁攀援。』六龍とは日車に乗り駕するに六龍を以てし、羲和之を御すと初學記に見ゆ、高標は山の高くして一方の標識となる者をいふ、逆折は水の旋回するなり、猿も亦た猿の屬、山岳巍峩として上み天を挿むが故に、太陽も其の高標に碍せられ、溪水盪激して下も旋回の急流あるを以て、水波石に激し砢砢として聲あり、是の故に黃鶴の高く翔る者も尙ほ過きるを得ず、猿猱の能く攀援する者も亦た度ること能はずと、鳥獸すら猶ほ其の險を憚る、况や人に於てをやと、反覆して蜀道の險天下に冠たるをいふ。

『青泥何盤盤。百步九折繁巖巒。』青泥嶺は興州長舉縣の西北に在り、懸崖万仞、山に雲雨多く、行く者屢泥淖に逢ふ故に此の名あり、嶺上は即ち蜀に入るの路とす、盤は

古蟠と通す、道路の屈折するをいふ、巒は山形の長くして狭き者、夫れ青泥嶺は屈曲極りなく、百歩の間九折して巖巒を縈ふ、即ち之を攀りて蜀に入るや洵に難しと謂ふへきなり、『捫參歷井仰脅息、以手撫膺坐長歎』參井は皆星の名、蓋し蜀の分野に屬す、脅息は氣を屏けて鼻敢て息せざるなり、今青泥の嶺に攀らんとすれば、參井は人を距ること遠からず、手を以て捫すへきか若し、高峻此の如し、是の故に人をして惟、膺を撫し長歎せしむるのみ、問君西遊何時還、畏途巖巖不可攀、但見悲鳥號古木、雄飛雌從繞林間、又聞子規啼夜月、愁空山。君は即ち玄宗を指すなり、君既に蜀に幸す、知らず何れの時にか再び中原に還りて百萬生靈の主たるへきや、而して忠臣義士に君に難に從かはんと欲する者も、道途の險絶にして攀附すべからざるを以て已むを得ず、相隔絶するに至れり、登攀の難此の如し、人跡の稀少知るへし、故に朝夕の間、見聞する所は惟、禽鳥の悲鳴して滿目寂寥たるあるのみ、『蜀道之難難於上青天、使人聽此凋朱顏』一言して足らず、故に之を再言して曰く、蜀道の險絶なる之を攀る誠に難く、殆ど青天に上るの思あり、今君遠く幸して茲に在り、之を聽ては感傷の極、豈に顔色に形れざるを得んや、乃ち朱顏を凋する所以なり、

『連峯去天不盈尺、枯松倒挂倚絕壁、飛湍瀑流爭喧豨、砢崖轉石萬壑雷、』巍峩たる連峯は天を去ること尺に盈たず、枯松は倒に挂りて絶壁に倚れり、况や疾瀨懸水は各、聲を爲し、崖を砢し石を轉して其の聲万壑の雷の如し、其險也若此、嗟爾遠道之人、胡爲乎來哉、危險の區たる此の如し、爾輩何の故にか之を冒して此に至るや、深く入蜀の計に非ざるを反覆するなり。

『劍閣崢嶸而崖鬼、一夫當關萬夫莫開、所守或匪親、化爲狼與豺、』劍閣は蜀の梓潼郡に在り、崢嶸は高峻をいひ、崖鬼は高大なるを言ふ、蜀地の險は天下に甲たり、就中劍閣の險は蜀に冠たり、蓋し群峯劍の如く高く天を挿み、其中兩山の門の如きを以て此の名あり、夫れ重險なる此の如し、所謂一夫關に當れば萬夫敵なき者又た、幽言に非ざるなり、其の玄宗に勸めて蜀に幸せしも、要するに此の險あるを以ての故のみ、然も之を守るに其の人を得ざるか、豺狼反噬の憂あるも亦た期すへからず、万乘の尊を以てして豈に此に居るへきの處ならんや、朝避猛虎、夕避長蛇、磨牙吮血、殺人如麻、蜀の地一方に僻在し、羌夷と雜處し、人虎狼の如し、朝となく夕となく常に之を避けずんば、牙を磨き血を吮ひ、人を殺すこと草の如く、其の害や測

るへからさる者あらん、亦た憂ふべきの事となす。錦城雖云樂、不若早還家。蜀道之難難於上青天。側身西望長咨嗟。錦城は蜀の成都縣の南十里に在り言ふは蜀都樂しむべきか若きも、憂ふべきの事畢竟一にして足らず。宜しく早く中原に還るべきなりと、是に於て三たひ之を申ねて曰く、忠臣義士君に難に從かはんと欲するも、蜀道險絶天に上るよりも難し、惟、夫れ是の如し、故に西の方吾君を望み長歎咨嗟以て倦戀の意を致すあるのみ。

作法を概言せば起首先つ蜀地の險惡を絶叫し、次に蜀道の開始を叙し、次に其の高峻を狀し、次に蜀道の難を叙し、承くるに危險の區人の到り易からざるを以てし、又其の險の極を明かし、結末蜀地の久しく居るべき處に非ざるを言ひ、通篇の主意を點出す、氣象雄逸にして詞旨深淵、人をして百回之を讀みて倦まさらしむ、蓋し太白の此の如き所以は、天縱の才に由ると雖も亦た祖述する所なくんはあらず、陳繹曾曰く、李白の詩、風騷を祖とし、漢魏を宗とし、下も鮑照徐庾に至るも亦た時に之を用ゐて、善く掉弄し、奇怪を造出し、心目を驚動し、忽然として撒出し、妙無聲に入る、其れ詩家の仙なる者乎と、善哉言や。

烏棲曲

烏棲の曲は樂府烏獸二十一曲の一、此の篇太白吳王の西施に感溺せしを借り以て玄宗の楊妃に於けるを諷せるものとす。

姑蘇臺上烏棲時、吳王宮裏醉西施。吳歌楚舞歡未畢、青山欲銜半邊日。銀箭金盞漏水多、起看秋月墜江波。東方漸高奈樂何。

姑蘇臺は吳王夫差の築く所、今江蘇省蘇州府吳縣の西南三十五里に在り、述異記に吳王夫差姑蘇の臺を築く、三年にして成る、周旋諸曲、横亘五里、土木を崇飾し人力を殫耗す云云とあり、西施は勾踐の献する所。

臺上鴉棲みて西施既に酔ひ、歌舞未だ終らず而して日既に西に墜つ、想ひ見る吳王新に勾踐に克ち、志滿ち意得、盛に妓樂を張り、昏飲底止するを知らざるを、首句先つ暮鴉棲に還るを出たすは、則ち後來許多の曲折を生せしめんか爲めなり。晝宴未だ畢らず、歡樂未だ竭きす、是に於て繼くに燭を以てす、銀箭金盞の更漏を定むる所以の具、漏水丁丁として秋夜殊に長きも、然かも尙ほ未だ宴を徹するを知らず、秋月は既に江波に墜ちて東方漸く明亮なり、噫、此の歡樂を奈何せんや、青

山日を衝みて歎未だ畢らす、秋月江波に墜ちて樂極りなし、此の日月を擧げて歌舞の場に浸淫し而して臥薪嘗膽の人あるを知らず、遂に以て國を亡ぼすに至る、戒めざるへけんや、烏棲を以て起し東方漸く高きを以て結び日字月字を以て深意を寓す、妙は託諷の深きに在り。

大白初め蜀より京常に入り賀知章を見て示すに此の篇を以てす知章激節嘆賞して曰く、此の詩以て鬼神を泣かしむへしと、蓋し其の君を思ふの熱情溢れて詩と成りしに由らすんはあらず、然るに人の太白を評する者ありて、王室多難海内横潰するの日に當りて、歌詩を作爲するに、豪俠氣を使ひ花月の間に狂醉するに過ぎず、社稷蒼生毫も其の心管に繫けず云云と曰へり、嗚呼何ぞ其の酷なるや、若し太白をして一點君を思ふの深情なからしめば、烏棲蜀道難等の諸篇何に由りて作るを得んや、况や以て鬼神を泣かしむるに於てをや、但、太白は群小の思む所と爲り山に放還せらる、是に於て縱酒浪遊し、興に觸れ詩と爲る者、多くは花鳥風月の語なり、此を以て直ちに論するに社稷蒼生を憂へざるを以てす察せざるの甚しき者と謂ふへし、太白豈に君を忘るゝの士ならんや。

將進酒

將進酒は樂府鼓吹饒歌十八曲中の一、此の篇人に勸むるに時に及びて樂を爲し興を盡すへきを以てしたるなり。

君不見黃河之水天上來、奔流到海不復回、君不見高堂明鏡悲白髮、朝如青絲暮成雪、人生得意須盡歡、莫使金樽空對月、天生我材必有用、千金散盡還復來、烹羊宰牛且爲樂、會須一飲三百杯、岑夫子丹丘生、進酒君莫停、與君歌一曲、請君爲我傾耳聽、鐘鼓饌王不足貴、但願長醉不用醒、古來聖賢皆寂寞、惟有飲者留其名、陳王昔時宴平樂、斗酒十千恣歡讌、主人何爲言少錢、徑須沽取對君酌、五花馬、千金裘、呼兒將出換美酒、與爾同銷萬古愁、
首先つ河水を以て興起す、世事の一たひ去りては復た返らざるに比するなり、黃河の源は崑崙山より發す之を望めは高峻なること殆ど天上より來るか若し、天上來の三字ある所以なり、金樽は酒器、言ふは河水天上より來り奔流して海に歸して止む復た天上に歸る能はず猶ほ之れ人生の死ありて一たひ死せば復た生くる能はざるかごとし、碌碌として日を度り一旦高堂鏡に對して觀は兩鬢皎然として青絲白雪朝暮觀を改むるを悲む者あらんとす、見るへし光陰逝き易く歎

樂多きことなきを、是の故に能く之を知らば得意の日須らく歡樂を盡すへきのみ、豈に金樽をして空しく明月に對せしむへけんやと深く時に迫んで歡樂を盡すへきを言ふ人生得意の二句は即ち一篇の主篇なり。

「天生我材」云は上を承けて歡を盡すへきを言ふ、夫れ人の敢て飲まざる所以は才を懷きて偶せずと錢財を愛惜するに因りて然るのみ、豈に知らんや天下に無用の材なく千金は散し去るも復た來るの理あることを二者決して慮る所あるへからず宜しく羊を烹牛を宰して以て觴を侑むるの具と爲し、須らく三百杯を連飲して而して後ち已むへきのみ、曰く散盡、曰く三百杯、當さに豪飲すへきを極言するなり。

岑夫子は岑澹、丹丘生は元丹丘、俱に李杜同時の人、言ふは酒を君に進む切に暫くも杯を停むること莫れ我れ今且さに飲酒の妙を將ちて君の爲に浩歌一番せん、とす、我か爲に耳を側けて之を諦聽せよ、夫れ唱酬歡を盡すは何そ必ずしも鐘鼓樂を作し饌玉鼎食して始めて快とせんや、願ふ所は只、飲酒長醉して暫くも醒むるを欲せざるなり、試に古來聖賢の飲を事とせざる者を觀るに、其人の死後は實

欠

MISSING

去らんと欲して、去るに忍びず。是に於て相俱に徘徊して興を盡す。夫れ吾の綢繆
去るに忍びざる所以の者は何そや。請ふ君試に門前の長江に問へ、漾漾乎として
直ちに海に達す。其長さや比なきか。若きも今日吾の別意に比しては孰れか短に
して孰れか長なるや。吾が別意の長くして盡きざる豈に此の東流の水の比な
らんや。是れ決然去る能はざる所以のみと。

王翼雲曰く、此の篇短調急節情景各勝ると。沈歸愚曰く、語必ずしも深からずして
情を寫す既に足れりと。其の音節の嘹唳たる餘韻梁を繞ると謂ふべき者にして、
此の種の詩太白に非すんば做し得ず。他人に在りては其万一を模す能はざるも
のとす。咀嚼して神韻を玩味すべきなり。

黃鶴樓送孟浩然之廣陵

樓は湖南省武昌府江夏縣に在り、山あり黃鶴と曰ふ。其下に所謂黃鶴樓あり、
相傳ふ荀環字は叔璋なる者嘗て樓上に賦ふ。南西に物あるを望む。飄然とし
て雲漢より降る。乃ち鶴に駕するの實なり。是に於て賓主相款す。辭し去るに
追んで鶴に跨り、空に騰り、眇然として烟滅す。樓の名ある所以なり。

廣陵は地理志に揚州廣陵郡淮南道に屬すとあり、今の江蘇省揚州とす。

故人西辭黃鶴樓。煙花三月下揚州。孤帆遠影碧空盡。唯見長江天際流。

起句は先づ分別の地を叙するなり、故人は浩然を指す、西辭と謂ふ所以は揚州(即ち廣陵)は黃鶴樓の西方に在るを以てなり、故人今去りて黃鶴樓を辭す、果して何の地に往かんとするや、蓋し三花烟月、輕舟飄然揚州に赴くが爲の故のみ、承句烟花三月の四字を加へ、叙別の景と分袂の時とを點出す、孤帆は浩然の舟を指すなり、既に浩然を送りて樓頭之を目送すれば、孤帆は流を趁ふて其の遠影碧空に至りて盡く、夫れ東望既に帆影を見るへからず、唯、長江の浩浩然として天際より流れ來る有るを見るのみと見るへし、帆影既に遠ければ、則ち目力既に極り、江水長ければ、離思涯りなきことを、帳望の情言外に溢る。

送友人

青山連北郭。白水遶東城。此地一爲別。孤蓬萬里征。浮雲遊子意。落日故人情。揮手自茲去。蕭蕭班馬鳴。

『青山連北郭。白水遶東城。』此の二句先づ分離の地に即きて端を發するなり、對を以

て起す、故に前聯は力めて其勢を流走せしめ、以て平板に陥めるを避く、句法なり、一爲別と萬里征とは元來對と爲すべきものにあらす、然るに今之を用ふ、名つけて借對と曰ふ、後聯は別情を叙し、末二句更に臨別を以て結ぶ。

蓬は草の根なくして風に隨かつて飄轉する者、征は進なり、萬里征は其行の遠きを念ふなり、古樂府に翩翩飛蓬征、滄滄游子懷とあり、此句の由りて來る所なり、班馬は左傳に有班馬之聲と見ゆ、註に班は別也とあり、蓋し主客の馬將に道を分たんとして馬鳴するなり。

青山翠を擁して北郭の前に横はり、白水流れ滯ふして更に東城を遶る、此地に於て一たひ手を別たん乎、猶ほ孤蓬の風に隨かつて飛散するかごとく、万里の遠に征旅し容易に復た見るを得へからず、蓋し游子の意は浮雲の一たひ往きて定跡なきかごとく、故人の情は落日の山を脚んで遠に去らざるに似たり、行く者は定りなく、居る者は忘れかたし、而して君決然手を揮つて道に就き、復た留まらず、是に於て將に手を分たんとすれば、主客の馬も亦た群を離るるの感あるか若く、蕭蕭として長鳴す、夫れ音猶ほ是の如し、則ち人の如きは此の別の殊に堪ゆへから

さるを覺ふと、黯然消魂の思意外に見る。

謝眺樓餞別校書叔雲

樓は安徽省寧國府宣州に在り、齊の謝眺か建つる所、謝眺字は玄暉、少ふして學を好みて美名あり、文章清麗尤も五言詩を善くす、梁の沈約常に云ふ、二百年來此の詩なしと、嘗て出て宣城の太守と爲る、故に世之を稱して謝宣城と曰ふ、青蓮の詩を論するや目に往古なし、唯、獨玄暉に於ては三四稱服、嘆美して措かずといふ、樓は眺の太守たりし時建つる所、一に之を北樓と名づく、唐の咸通中、獨孤霖此の州に刺史たり、其の荒廢に歸せるを以て改め建てて今名に易へたりき。

棄我去者昨日之日不可留。亂我心者今日之日多煩憂。長風萬里送秋鴈。對此可
以倚高樓。蓬萊文章建安骨。中間小謝又清發。俱懷逸興壯思飛。欲上青天覽日
月。抽刀斷水水更流。舉杯銷愁愁復愁。人生在世不稱意。明朝散髮弄扁舟。
首四句は先づ彼を慰むるなり、日月流るるか如く光陰駛するか如し、既に去るの
昨日は復た留るへからず、寢寢乎として我を棄てて去れり、去る者は此の如く、而

して方に來るの今日は又た憂思多く我心を煩亂せしむ、夫れ往日は返らず、來日
は憂多し、况や人生の離合聚散定りなし、又復た人をして悲傷せしむ、但、秋色の人
に可なるありて長風鴈を送る、君や此の祖鑑に對して宜しく酣歌沈醉の興を盡
ささるへからずと、一起豪邁、疾風急雨の窓を衝きて至るの勢あり、乃ち太白の長
所なり。

蓬萊は宮名、即ち大明宮なり、唐の高宗今の名に改む、建安は曹魏の年號、孔融、字文
舉、王粲、字仲宣、陳琳、字孔璋、阮瑀、字元瑜、劉楨、字公幹、應瑒、字德璉、徐幹、字偉長、及び曹
氏父子、曹操、曹丕、曹植、作る所の詩あり、世之を建安體と謂ふ、而て孔融以下、玩瑣に
至るまでを建安の七子又は鄴下の七子と稱す、皆風骨遒上、最古氣饒し、小謝は謝
惠連を謂ふ、壯思、飛とは劉楨の詩に君侯多壯思、文雅縱橫飛、とあるより來る。

中四句は叔雲の才を懷きて遇はざるを傷むなり、君の才學を以て書を蓬萊宮裏
に校せば、文章は建安の風骨を具するか故に、其の辭古樸簡勁、之に加ふるに小謝
の清發を以てし、二者相兼ねて最其の奇を見る、此れ皆君の逸興不群、壯思飛越す
るに由らすんはあらず、然らば身宜しく青天に上りて、日月の光に依り、君王に近

くへきに志は命と伴なはず、轆軻不遇、遠く去らざるを得ざるに至る、君の胸中を想へば洵に深く悲むべき者あり。

扁舟は特舟なり、吳越春秋を按するに、范蠡既に越を佐けて吳を滅し、遂に王に辭して扁舟に乗して三江五湖に出入す、人其の適く所を知る莫しとあり、此の詩扁舟の二字を用ふ、亦た范蠡泛湖に比せし者なるへし。

結四句不遇にして愁を生ずるに因りて力を抽きて水を斷つを以て興を起すなり、言ふは刀を以て水を斷ては水更に流る、則ち酒を以て愁を澆して愁更に甚しからずや、愁は遂に斷ゆるの期なく、竟に稱ふの事極めて少し、之に處すること如何、明朝當に散髮して扁舟を弄すること、猶ほ彼の范蠡の三江五湖に放浪するかことくなるへきのみ、何ん必ずしも官途を以て眷眷を爲んや。

此の篇三轉して韻を用ふる二首は先づ尤韻を以て起し、中は月韻を用る、結は復た尤韻を用ふ、句法に至りても起と結とは別には是れ一法、沈歸愚曰く、此の種の格調疑ふらくは鮑參詩中より化出するならんと、確評と謂ふへし。

下終南山過謝斯山人置酒

暮從碧山下。山月隨人歸。却顧所來徑。蒼蒼橫翠微。相携及田家。童稚開荆扉。綠竹入窗徑。青蘿拂行衣。歡言得所憩。美酒聊共揮。長歌吟松風。曲盡河星稀。我醉君復樂。陶然共忘機。

碧山は山光暮に及びては其色碧なる者なり、故に碧山と云ふ、翠微とは通例山氣遠く望めは翠なり、而して之に近づけは翠漸く微なるを謂ふなれども、山の漸く遠きも亦た翠微といふて妨げざるなり。

此の詩分ちて三と爲して見るを要す、首四句は先づ山を下るの景を述ふるなり、言ふは薄暮碧山より下れば山月人に伴ふ、山を下りて後、行來の路徑を回顧すれば是の時夜色蒼蒼として山は翠微の中に横れりと、第一句は日未だ昏れず、所謂薄暮なり、第四句は日全く暮れて夜色の蒼然たるを謂ふ、四句黄昏より夜景に至るまでを狀して尤も其の妙を見る、彼の孟浩然の廻瞻下山路、但見牛羊群とあるに比して、彼は巧に黄昏の景を言ひ、此れは妙に夜色を寫す、二者俱に遜色を見ず、若夫れ妙味の那邊に在るを知らんと欲せば、百讀千誦するに在るのみ。

童稚は幼子、荆扉は荆を以て門扉と爲すもの、此の四句は山人田家の幽を寫すな

山人と相携へて共に其の居に至れば稚子の門に候して其の歸來を俟つあり、乃ち竹徑より入れは蘿薛は青青として我が行人の衣を拂ふ、居の幽なる殆ど別天地の想ありと。

懋は息なり、揮は竭すなり、河は天河、陶然は和樂の貌、此の六句は山人の家に宿して酒を置くを寫すなり、既に山人の家に至れば歡言して留宿せしむ、是に於て懋息する所を得、又能く美酒を置きて以て共に飲ましむ、適殊に甚し、我乃ち長歌して松風の曲を吟す、曲盡くるに至りて月愈明に、河星稀明、良夜方に深し、而して我既に醉へり、君も亦た以て樂と爲し、覺へず機慮俱に清く、復た山人と形骸の隔てあらず、夫れ殆ど化境に入れり、豈に復た人我の相あらんやと。

此の詩平平叙し起し、些の苦心の處なきか若し、安そ知らん其の平板なるか如きは、則ち所謂綸爛の極平淡に歸するなるを、是の故に百讀して倦まず、愈讀みて愈妙、趣味淵淵として盡きず、老手に非ずんは誰れか之を能くせんや。

登金陵鳳凰臺

臺は江寧府城内の西南隅に在り、宋の元嘉十六年、三鳥あり山間に翱翔す、文

彩五色にして狀孔雀の如し、音聲諧和衆鳥羣附す、時人之を鳳凰を謂ひ、臺を山に建て、鳳凰臺と稱し、山を鳳凰山と曰ひ、里を鳳凰里と曰ふ、臺に登れば江山を四顧し、下も井邑を窺ふ、古今登臨する者題詠極めて多きも、惟、謫仙の作を以て絶唱と爲す。

鳳凰臺上鳳凰遊。鳳去臺空江自流。吳宮花草埋幽徑。晉代衣冠成古邱。三山半落青天外。二水中分白鷺洲。總爲浮雲能蔽目。長安不見使人愁。

吳宮は孫權都を建つる時作くる所の宮室、三山は府城の西南五十七里に在り、周廻四里、高さ二十九丈、大江に濱す、三峯排列し南北相連る、故に三山と號す、二水源を句容及び溧水の兩縣より發し合流して建康に至り、是に於て又分流し、一は城中を貫き一は城外を遶る、其の分流の處白鷺洲ありて之を横載す。

此の詩起兩句鳳凰臺を以て入り、三四古人の見るへからざるを懷ひ、五、六、七、八、今日の景を咏して帝都の見るへからざるを慨するなり。

往古南宋の盛時鳳凰の此地に來るあり、土人依りて臺を建て以て瑞氣を表せり、物換り星移り以て今日に至る、我今此の臺に登れば、往時稱して瑞を爲せし鳳凰

は今其の隻影を留めず、唯、臺の空しく存すると大江の濛濛として東流するあるのみ、古今變遷の速なる蓋し消嘆すへき者あり、豈に獨り鳳凰の去りて影を留めざるのみならんや、孫權の英武新に此地に建都するや、吳宮を造りて具に富麗を極む、而して今何くに在るや、存する所の者は奇花異草の今尙ほ廢路荒徑に横はるあるのみ、人をして坐ろに興亡の感おらしむ、且つ兩晋の亦た此の地に都するや、衣冠文物の盛實に其隆を極めしも今日より之を觀れば其の人皆既に黃土に歸し、餘す所は古邱の累累たるあるのみ、眼前の景總て傷懷の具たらざるなし、是に於て試に遠眺すれば三山は遠く青天の外に落ち、淡影無からんと欲し、二水は白鷺洲に横載せられて分流す、地既に高峻復た一物の眼界に碍するなし、井邑江山皆雙眸の中に入る、乃ち更らに遠く長安天子の在る所を見んと欲すれば、浮雲は端なく天日を蔽ひて帝都を見るを得ず、既に興亡の感ありて胸懷を傷し、更に浮雲の天日を蔽ふありて帝都を見ることを得ず、感慨百出樓に登りて而して生ず、嗚呼之を如何せんやと、結二句は目前所見の感慨より遂に君王に及び、浮雲の日を蔽ふを以て群小の君を蒙するに喩へたるなり、曰く長安、白く浮雲、曰く蔽日

と字字皆深意を其の中に寓せり、作者苦心の在る所を知るべきなり。

相傳ふ青蓮武昌の黃鶴樓に登り一詩を賦せんと欲す、是より先き崔顥此の樓に登り其の壁に題して曰く

昔人既乘黃鶴去。此地空餘黃鶴樓。黃鶴一去不復返。白雲千載空悠悠。晴

川歷歷漢陽樹。芳草萋々鸚鵡州。日暮鄉關何處是。煙波江上使人愁。

青蓮之を觀て卒に一頭地を出す能はざるを知り、別に鸚鵡州に題して云ふ

鸚鵡來過吳江水。江上洲傳鸚鵡名。鸚鵡西飛隴山去。芳洲之樹何青青。烟

開蘭葉香風暖。岸夾桃花錦浪生。僊客此時徒極目。長洲孤月向誰明。

而して自ら調の崔詩に及はざるを知るも、其の心に於ては遂に崔に降らざるなり、是に於て更に鳳凰臺の詩を作り、始て彼と拮抗するを得たり、古人黃鶴鳳凰二詩の優劣を論して顯の調は高きも前四句既に盡き、後半首は別に是れ一律、前半は即ち古絶なりとて重きを李詩に置き、歐陽公も亦た毎に三山半落の一聯を哦して曰く杜子美も道はざるなりと、見るへし此の詩の唐代の絶調たることを。

秋登宣城謝朓北樓

樓は謝朓の建つる所、其の詳は既に前に之を言へり、江南通志に陵陽山は寧國府城南に在り、岡巒盤屈、山峯秀拔、一郡の鎮たり、上に樓あり、即ち謝朓の北樓なりと云へり、地勢爽塏、一望數州を盡すへし、此の詩ある所以なり。

江城如畫裏。山曉望晴空。兩水夾明鏡。雙橋落彩虹。人烟寒橘柚。秋色老梧桐。誰念北樓上。臨風懷謝公。

此の詩大別して二と爲す、前半截は秋北樓に登るものにして、後半截は秋に感して謝公を懷ふなり。

宣城山川の奇秀なる宛も畫圖の如し、况や秋曉氣清きに當りて樓頭よりして一望すれば、遠き者近き者歴歴として目前に在るか如しと、首句先づ總提して目前の景の畫圖の如きを言ひ、二句更に曉色を言ひ出して下の兩聯を逼出するなり、兩水は宣城の下に在り、一を宛溪と曰ひ、一を勾溪と曰ふ、雙橋も亦た府城の外に在り、一を鳳凰橋と名つけ、一を濟川橋と名つく、二水は合流して其の明なる鏡の若く、雙橋水に架して之を望む彩虹の落つるか若し、畫中の觀に非ずして何そや、橘と柚とは南國に産する者、今天曉にして氣寒し、故に人烟之れと俱に寒なり、梧

桐は一葉落ちて天下秋を知る、今乃ち秋色既に老ゆ、安そ秋氣に感して古を懷ふの情深からざるを得んや、我れ此の時に于て樓に登り風に臨みて彼の謝公を懷ふ、亦た誰れか復た人の我か謝公を懷ふの情を念ふ者あらんやと、後聯秋意を寫し一轉して懷古を以て結ぶ。

此の時承句先づ曉字を點出す、故に前聯鏡と虹とを以て秋曉に的切ならしめ、節序は秋なるを以て、乃ち寒と老との二字を以て之を寫し出す、用字の密なる尤も玩味に値すへし。

早發白帝城

朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住。輕舟既過萬重山。

白帝城は四川省夔州府奉節縣に在り、後漢公孫述の據る所、初めの名は魚復、述此の地に至る、白龍あり井中より出てしかは以て祥瑞と爲し、今の名に更む、地甚た高爽なり、恰も彩雲の間に在るか如し、白帝より江陵(湖北省)に至る其間一千二百里あるも、峽水の急なるを以て朝に舟を發せは暮に到るを得へし、即ち一日程と爲す、三峽の間は猿猴多く棲む、水經註に曰く、三峽七百里中、兩岸の連山路、闕處な

く、重巖疊嶂天を隠し日を蔽ひ、亭午夜分に非されは曦月を見ず、中略晴初霜旦、林寒
く、洞蕭なるに至る毎に、常に高猿あり長嘯し、夙引凄異、空谷響を傳ふ、故に漁者歌
て曰く、巴東三峽巫峽長、猿鳴三聲淚沾裳、と見るへし兩岸無數の猿猴哀鳴し
て未だ歇まず、而して輕舟は其間早く萬重の山を過く、峽水の至つて急なる是の
如きものあり、是の故に千里の遠きも尙ほ能く一日にして達するを得るなり、舟
行の迅速瞬息千里なるを狀して紙上猶ほ谷走り崖馳せ目爲に眩するかことき
の想あり、神助ありと謂ふも、陋言に非ざるなり。

蘇臺覽古

蘇臺は即ち姑蘇臺なり、吳越外記に曰く、吳王夫差蘇州に都す、桂苑姑蘇臺あり、
天池を作り日に西施と水戯を爲す、越王勾踐之を滅すと、舊苑尙ほ存す、此
を過ぎて此の作あり

舊苑荒臺楊柳新、菱歌清唱不勝春、只今唯有西江月、曾照吳王宮裏人。

舊苑は即ち吳の桂苑、荒臺は姑蘇臺なり、菱歌は采菱の歌をいふ、言ふは古へ綺麗
を稱する吳に如くは莫し、今も苑中の春色佳ならざるに非らざるも、苑は既に舊

るく臺も亦た荒る、惟、柳色の春に遇ふて新なるあるのみと、新と舊との二字を下
して便ち感慨を寓するなり、臺既に荒れて四顧寥々たり、遙に聞く人の清く菱を
采るの歌を唱ふ、殊に懷古の思に堪へざるなり、夫れ見る所の者は新柳、聞く所の
者は菱歌、要するに昔當年の故物に非らざるなり、只、今有る所の者は其れ唯西江
の月か、此の月や、割判以來臺も虧損せざる者、昔日曾つて吳王宮裏の人を照して
親ら當時の盛に涉れる者なり、此を外にしては悉く餘なし、嗚呼夫れ紛華美麗眞
に一瞬の間に過ぎさるのみ、只今唯有の四字を用ゐて限りなきの感慨を寓す、正
に是れ今を傷みて古を思ふ者、力を得る全く此の四字に在り、讀む者知らざるへ
からず。

越中覽古

越王勾踐破吳歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、只今唯有鷓鴣飛。

初め吳王夫差父の爲に讐を復せんと志し、朝夕薪中に臥す、遂に越を夫椒に敗る
越王勾踐餘兵を以て會稽山に棲み、臣妾たることを請ふ、吳の太宰伯嚭越の路を
受け遂に之を許す、是に於て勾踐國に歸り、膽を坐臥に懸け、即ち膽を仰きて之を

嘗め以て自ら警め、生聚十年、教訓十年、遂に大舉して吳を代つ、吳三たび戰ふて三たび北く、越吳を滅す、起句は是を謂ふなり、其の凱旋するや、豪華比なく、隨從の士に至るも尙ほ且つ錦衣せり、况や越王に於てをや、後宮の美女其の數幾千なるを知らず、悉く當代の選なり、乃ち容顏は花の如く、春殿に充滿せり、盛と謂ふへし、然も榮華は幾時ぞ、彼の巍峩たる春殿は今廢して荒丘と爲り、花の如きの美人今盡く黄土に化せり、當日の盛を求めんと欲するも得へからず、滿目寥寥、唯、鷓鴣の飛ひ啼くあるのみと、前三句力を極めて越王の豪華を極言す、曰く錦衣、曰く如花、曰く春殿、皆之を襯出する所以にあらざる無し、而して結鷓鴣を出し以て兎吊の意を寓す、殊に一段の感慨あるを覺ふ。

按するに前詩は今を傷みて古を思ふもの、此の詩は之に反し古を曰ふて今を傷むなり、力を得る俱に只今唯有の四字に外ならず、而して前詩は之を用ゐて轉句に在り、此の詩は之を結句に用ふ、之を轉句に用ゐすんは今を傷みて古を思ふの意を發揮する能はず、之を結句に用ゐすんは亦た古を曰ふて今を傷むの感を吐露すること難し、之を結局に用ゐて餘情掬すべく、之を轉句に用ゐて更に生面を開く、各、其の妙を盡くす者と謂ふべし。

經下邳圯橋懷張子房

下邳は淮安府城の西北四百五十里に在り、縣に沂水あり、號して長利池と爲す、池上に橋あり、即ち黃石公張良に素書を授くるの所なる由、元和郡縣志に見ゆ。

子房未虎嘯。破産不爲家。滄海得壯士。椎秦博浪沙。報韓雖不成。天地皆震動。潛匿遊下邳。豈曰非智勇。我來圯橋上。懷古欽英風。唯見碧水流。曾無黃石公。嘆息此人去。蕭條徐泗空。

韓の張良字は子房、五世韓に相たり、秦の韓を滅すに及んで、良悉く家財を以て客の秦王を刺すを求む、東して滄海君に見へ、力士を得、鐵椎を爲り、秦皇を博浪沙中に擧ち、悞りて副車に中つ、首の四句は是を謂ふなり、虎嘯は未だ漢に相たらざるの時を指す、博浪沙は地名、産は家産をいふ。
鐵椎秦皇を擧つ中らず、是れ韓に報して成らざるなり、然も布衣を以てして皇帝を擧つ、豈に驚天動地の事にあらすや、秦皇之を索む十日にして得ず、子房は乃ち

下邳に潜匿す、夫れ鐵椎秦皇を撃つは勇ある者に非されは能はず、秦の威を以てして之を索めて得る能はず、智ある者に非されは誰れか之を能くせん、即ち智勇兼備の士と謂ふも詛言に非ざるなり。

圯は橋なり、子房下邳に遊ふ、圯上一老父あり、其の所に至り直に其の履を圯下に墮し、其を顧みて曰く、孺子下りて履を取れと、其愕然之を瞰たんと欲す、其の老たるか爲に、乃ち強忍して下り履を取り跪きて之を進む、老父因りて後五日を期して此に會せしむ、平明其往く、老父既に先づ在り、復た五日を期して來り會せしむ、其鶏鳴に往く、老父又た先づ在り、更に五日を期す、其夜半に往く、頃くありて老父も亦た來る、是に於て一編の書を授けて曰く、是を讀まば則ち王者の師とならん、後ち十三年、當に濟北穀城山下に黄石あるを見るへし、即ち我れなりと、遂に去りて復た見えず、且日其の書を視る、則ち太公の兵書なり、其風は即ち秦を撃つ事、此人は張良を指す。

我れ今ま此の圯上に來りて子房を懐ひ、其の秦を推するの英風を歎す、昔人相傳ふ此の地子房履を老人に進むるの處たりと、今日見る所は橋下に碧流の水あるのみ、橋上曾つて黄石公なきなり、惟、是れ子房一たひ去りて漢王に用ゐられ、遂に頂を滅するの大業を翼け、之れか爲に徐泗の間英雄一空せり、嗚呼子房の如き人眞に稱して英傑と爲さるるを得んや、正面子房に繼ぐ者の寡きを歎し、裏面子房を誦る者の尤も寡きをいふ、即ち才の難きを歎するに非ずして才を誦るの實に難きを歎するなり、自負の意言外に隱然なり。

春月醉起言志

處世若大夢。胡爲勞其生。所以終日醉。頽然臥前楹。覺來盼庭前。一鳥花間鳴。借問此何日。春風語流鶯。感之欲歎息。對之還自傾。浩歌待明月。曲盡已忘情。『處生若大夢』の一句は莊子齊物論に夢に酒を飲む者は且にして哭泣し、夢に哭泣する者は且にして田獵す、其の夢なるに方りてや、其の夢なるを知らず、夢の中又其の夢を占ふ、而して後ち其の夢なるを知るなり、且つ大覺ありて而して後ち此の大夢を知るなり、而して愚者自ら以て覺たりと爲し、窃々然として之を知れりとし、君とし牧とす、固なる哉丘(孔子)や、汝と皆夢なり、予れ汝を夢と謂ふも亦た夢なり。とあるに基く、此の詩題して醉起志を言ふと曰ふ、先づ其の醉はさる一か

らさるの故を言ふなり、蓋し人生は大夢の若く然り、一切の事總て皆生を勞するの具たらさるなし、既に生の夢の若きを覺る、則ち胡爲そ復た生を勞するの事を爲さんや、是の故に我れ必ず終日酒を飲み、飲めは則ち酔ひ、酔へは則ち頽然倒臥す、夫れ前楹は豈に臥すへきの所ならんや、然とも亦た之を擇はさるなり、期する所は醉郷の裏麴蘖の果斯の夢の若きの浮世を醉過せんと欲するのみ。
 覺は醒、吟は視なり、流鶯は黃鸝、言ふは醉中醒覺して偶、庭前を視れば時に一鳥の花間に弄囀するあり、因りて旁人に問ふに今は何時節なるを以てす、旁人の答によりて始めて此の時の盛春にして此の鳥の黃鸝なるを知れり、夫れ時は盛春にして百花爛發し、之に加ふるに黃鸝の花間に囀するあり、春光畫の如し、嗚呼何等の好景そや。

夫れ春光の明麗此の如し、我れ今一臥して此の好景に違へり、芳時逝き易し、歎息せざるを欲すも得へからず、是に於て又杯を傾け高歌して以て明月の昇るを待つ、曲既に終るに及んで、其の歌ふ所を追願すれば既に情を忘れたり、又其の何の曲なるやを知らず、要するに詩酒自適以て我か天を全くするのみ、彼の浮世の事の如きは豈に問ふに違まあらんや。

註に麓堂詩話を引きて曰く、太白天才絶出、真に所謂秋水出芙蓉、天然去彫飾もの、今傳ふる所の石刻處世若大夢の一詩の序に大醉中賀生の爲に作ると稱す、我れ之を讀む、此等の詩皆手に信せ筆を縦にして就る、他知るへきのみと、其の咄嗟にして此の傑作を成すは、太白の天才固より怪むに足らず、宋景文公館に在り、嘗て唐人の詩を評して云ふ、太白は仙才、長吉は思才と、楊升菴は曰く、陳子昂は海内の文宗たり、李太白は古今の詩聖たりと、夫れ以上の諸公の然かく推獎して措かさる所以の者は要するに太白の天分、人の學ふこと能はさる所あるを以ての故なり、嗚呼神なる哉。

春夜洛城聞鐘

誰家玉笛暗飛聲、散入春風滿洛城。此夜曲中聞折柳、何人不起故園情。

題して春夜といふ、是に於て起句誰家、暗飛の四字を出して四顧暗黒、笛聲を聞き、て吹くこと誰か家よりするを知らざるを狀す、承句は笛聲の遠きに達するを言ふなり、入春風三字妙比なし、以上の二句、暗中聲を飛はすを形容す、然とも未た其

の夜なるを明言せざるなり、乃ち轉句に於て始て夜字間字を出す、益、作者の苦心を知るなり、折柳は曲の名、李延年の横吹、卅八解中に折楊柳あり、以て證と爲すへし、蓋し別を送るの人手を分つの時、に於て路傍の楊柳を折り之を贈るの例あり、今曲中折柳を聞く、故に情故園に切なるなり、我れ情を起す、他人之を聞く、豈に情を起さざる者あらんやと、字を下し句を下す、鍾鍊の妙人に絶す。

晚唐皮曰、休其の劉棗強碑文中に言へるあり、曰く、歌詩之風、蕩來久矣、大抵興於南朝、壞於陳叔寶、然今之業、是者、苟不能求古於建安、即江左矣、苟不能求麗於江左、即南朝矣、或過爲飽傷麗病者、即南朝之罪人也、吾唐來有業、是者、言出天地外、思出鬼神表、讀之則神馳八極、測之則心懷四溟、磊磊落落、真非世間語者、有李太白、と旨ある哉、言や、予れ既に太白集中に就きて其の所謂言天地の外に出て思鬼神の表に出つる者を標舉して聊か之を評釋せり、然も太白の時爛として錦を披くか若く、處として善からざる無し、予の之を摘載せるを以て、李詩の超詣高妙なる者直ちに之に盡くと爲すへからず、蓋し屢言ふか如く、悉く之を掲載して評釋するは紙幅限りあるを以て、已むを得ず、人口に膾炙せる者數首を掲げしに過ぎず、且つ每集の終

に於て總評を掲げ示すの例ありしも、今之を略し、古人の評語を蒐め類を分ちて之を下に掲げたり、之を讀まは李詩の長所を知るに於て蓋し思半に過ぐる者あらん。

五 古

太白五言、沿河漉糖音、後死

五言選體、及七言歌行、太白以氣爲主、以自然爲宗、以俊逸高暢爲貴、全上

七 古

初唐以才藻勝、盛唐以風神勝、李杜以氣概勝、而才藻風神稱之、加以變化靈異、遂爲太宗詩統

惟杜甫橫絕古今、同時大匠、無敢抗行、李白岑參二家、別出機杼、語差雷全、亦稱奇特、錄

五 排

沈二氏、漢勝精工、太白右丞、明秀高爽、詩統

太白輕爽雄麗、如明星黼黻、冠蓋輝煌、武庫甲兵、旌旗飛動、全上

五 絶

惟太白擅場詩唐

李太白氣體高妙李王玩

開元後李白王維尤勝諸人唐詩

七 絶

三唐七絶並堪不朽太白龍標絶倫絕群唐詩

太白高於諸人王少伯次之唐詩

太白江寧各有至處大概李寫景入神王言情造極詩

『李白詩評釋』完

『杜詩評釋』

緒言

古來杜詩を評註せるの書は殆ど百家に下らず中に就きて最入口に膾炙せるものを擧ぐれば杜工部集杜工部草堂詩箋杜律趙虞註讀杜心解杜詩偶評杜詩詳註五家評杜工部集杜詩鏡銓等あり予の今講資とする所は一に杜詩詳註を用ふ。

是の書は清の史臣仇兆鰲の著す所にして康熙三十二年之を聖祖に進めたる者なり蓋し仇の意は杜詩を解する者皆杜の本意を據からず意の淺くして事の近きも之を鑿し之を推し遠く古典を引徴し流に汙り源を忘る者の多きを概して此の著あり引據精確洵に善本と爲すに足る之を講資に供する所以なり。

是の書合して二十五卷あり首卷より二十三卷に至るまでは詩を載せ二十四卷は賦及び贊二十五卷は文集詩序を以てせり講述の順序は一に是の書の編

述する所に従ひて、分つに詩體を以てせず。

杜 甫 小 傳

杜甫字は子美、少陵と號す、本と襄陽の人なり、後ち河南の鞏縣に徙る、實に預の十二世の孫たり、祖審言文章を以て重名あり、膳部員外郎に終る、父は閑奉天の令に終ふ、子美唐の先天元年(睿宗)を以て生る、少ふして貧自ら振はす、年二十吳越に客遊す、開元の末進士に應ず、第せず、翌年に至り齊趙に遊ひ、適、李白と交を締し、贈答應酬悠然として相娛む、天寶の末三大禮賦を獻す、玄宗之を奇とし召して文章を試み、京兆府兵曹參軍を授く、是の時に當りて玄宗貴妃楊氏を寵し、頗る政事に怠る、且つや安祿山已に叛形を具し、岌岌乎として累卵の急きに似たり、帝毫も之を顧念せず、酒色に是れ耽り、遂に祿山の叛を致す、京師の陷るるに及んで帝蜀に走り太子を留めて位に即かしむ、子美も亦た三川に避け去る、肅宗(玄宗太子)立つに迫りて三川より羸服して行在に奔らんと欲し、賊の得る所と爲り、憂國の情に堪えず、春望、月夜、哀江頭の諸篇を作り、千百の愁緒を擧げて一に之を徹旨幽遠の間に托せり。

至徳二載亡けて鳳翔に走り上謁す、帝拜して左拾遺と爲せり、宰相房琯は子美と舊あり、瑄賊勢の日に殷なるを見て自ら師を帥めて之を討せんことを請ふ、帝之を許す、瑄乃ち兵を帥めて往き征す、反て其の敗る所と爲れり、明年遂に相を罷められき、子美上疏して言ふ、瑄才あり宜しく罷免すへからすと、帝大に怒り三司に詔して推問せしむ、宰相張鎰曰く甫若し罪に抵さは是後諫者の路を斷たんと、切に之を諫めしかは帝の怒り解ぬ、然とも帝是より甚た省録せず、時に賊軍其の勢を逞くし、所在に寇奪し、頗る横暴を極む、子美の家は郾州に在り、艱蹇極めて甚しく其の孺子幼弱餓死するに至れり、帝因りて子美に命し自ら往きて省視せしむ、再ひ京師に還るに及んで拜せられて華州の司功參軍と爲れり、其の任に赴くや、適、關輔饑ゆ、子美即ち官を棄てて華州を去り秦州に赴き、更に進んで蜀に入り成都に至り、地を城西の浣花溪に卜し草堂を營み之に居りしか、會、嚴武劔南東西川の節度と爲れり、子美舊あり、乃ち往きて依る、武奏して子美を以て節度參謀、檢校工部員外郎と爲す、武の卒するや、崔旰等亂を作せしかは、避けて梓、夔の間に往來す、大曆中(代宗)置塘を出て、江陵を下り、沅、湘を

魯の間其の青未に畢らすと、岳勢連綿、蒼峰斷へず、境を越へ界を侵し、東方の巨鎮と爲るの狀、歴歴として睹るか如し、青未了の三字、人の能く模擬する所にあらざるなり。

造化は天地の氣化、鍾は聚むるなり、嶽の高大なる容易に測識すへからず、故に神の字を以て之を贊し、深遠なる能く萬有を包含す、故に秀の字を以て之を贊するなり、陰は日光の到らざる處にして、陽は日光の及ぶ所とす、日光到らず故に山後は昏なり易く、日光先づ臨む故に山前は曉け易し、言ふは岱嶽の高大なる地を抜きて起り天に盡して峙つ、神秀の特に鍾まる所とす、殊に山の高く天を刺すか爲に山前は日光照臨して曉け易く、山後は日先到らすして昏れ易し、昏と曉とは實に此に於て判割すと、此の二句力を極めて嶽の高大なるを狀す、奇峭人を驚かすに堪えたり。

邊胸の句は襟懷の浩蕩なるを狀し、決皆の句は眼界の空濶なるを狀するなり、遠く之を望めは雲氣瀰漫颯蕩す、心胸爲めに搖き、飛鳥の高く山に入るあるを見れば皆を決するも更に眼界に遮る者なしと、二句雄潤、心目爲に一曠するを覺ふ、

幾と以て其の妙を測る無し、蓋し邊胸の句は上の二字下に因る、之を倒句とす、決皆の句は下三字上に因る、之を順句とす、一順一逆奇を其の間に擅す、老手に非ずんば能はざるなり。

結二句は之を望むの功なる遂に山に登るに想到るなり、何の日か果して絶頂を凌ぎ一たひ其の勝を窮むるを得るや、此の日即ち能はず、會、當に他日を以て之に登り衆山を俯視すへきなりと、結句は楊子法言に登東嶽者、然後知衆山之崩崖也とあるに基く。

沈歸愚少陵の詩を評して前人論少陵者多矣、至嚴滄浪則云、憲章漢魏、而取材于六朝、至其自得之妙、先輩所云集大成者也、孫器之比之周公禮樂、後世莫能擬議、斯爲篤論といへり、要するに少陵の詩は渾涵汪洋古今を兵ねて之を有するもの、而して出すに忠厚の意を以てす、前に古人なく後に來者なき所以なり、請ふ是より後少陵の如何んか高く他に超出するかを看よ。

登兗州城樓

兗州は今の山東省に屬す、往時魯の都とせし所なり、此の詩は公の父閑兗州

の司馬たり、公之を省せし時の作とす、杜工部年譜を按するに開元二十五年齊趙に遊ぶとあり、其の前年は吳越より歸りて京兆に赴き進士に擧して第せざるの年とす、即ち公の年二十六歳の作なるを知るへし。

東郡趨庭日。南樓縱目初。浮雲連海岱。平野入青徐。孤嶂秦碑在。荒城魯殿餘。從來多古意。臨眺獨躊躇。

此を律詩四實の法と爲す、中間四句皆景物にして實なるを謂ふなり、曰く浮雲、曰く海岱、曰く平野、曰く青徐、曰く孤嶂、曰く秦碑、曰く荒城、曰く魯城、皆實景なり、而して巧に在字餘字を用ゐ、情上に歸到す、實と雖も猶ほ虚なるかことし、正體に非すと雖も絶て靡冗の病なし、老杜の大手筆と爲す所以なり。

通首皆樓に登りて見る所なり、上下四句分截して看るを要す、上四句は遠景、下四句は近景、遠景を寫さんと欲す、故に縦目の二字を以て之を起し、近景を狀せんと欲す、故に臨眺を以て之を結ぶ。

趨庭は隋の孫萬壽の詩に趨庭尊教義とあり、省侍の餘なるか故にしかいへり、海岱は東海と泰山をいふ、竟の境に連れり、青と徐とは亦た竟と相接す、秦碑とは秦

始皇東巡して鄒澤山に上り石を刻して功德を頌するもの、魯殿は景帝の子魯の共王の建つる所なり、言ふは吾れ往昔漢の東郡たりし此の兗州に來りて父を省せしの餘、樓に登りて目力を縦にし遠眺すれば、其の高き者は則ち浮雲往來して海岱に連れり、其の低き者は平野遼濶青徐に入れり、遠景是の如し、若夫れ其の近き者を擧ぐれば、秦皇の李斯に命して大篆を以て碑壁に勒銘せし者は今日尙依然たり、且つや魯の共王の建つる靈光殿は荒城の中巋然として獨り存せり、上下古今豈に感慨なくして已むへけんや、况や平素より古意多し、今臨眺して秦魯の跡を覽興亡の故に感す、躊躇する所以なりと、曰く在、曰く餘、存する者の幾許ならざるを見るへく、曰く多、曰く獨、己れの志の凡に超ゆるを見るへし、字法句法俱に精鍊の妙を極む。

題張氏隱居

張氏とは何人を指すを知らず、或は曰く張叔明ならんかと、蓋し叔明は李白等と徂徠山に隠れたる人にして時人號して竹溪の六逸と曰ひし者なり、然とも未だ其の説の當れるや否やを知らず。

青山無伴獨相求。伐木丁丁山更幽。澗道餘寒歷冰雪。石門斜日到林丘。不貪夜
識金銀氣。遠害朝看麋鹿遊。乘輿杳然迷出處。對君疑是泛虛舟。

此の詩の作法は首句は張氏を點し、次句は隱居を點し、三四は路の僻遠を言ひ、五
六は張氏の廉靜を言ひ、末二句主客相忘るゝを言ふなり、全詩之を兩分すれば上
四は景を言ひ、下四は情を言ふ者と知るべし。

春山伴なく獨り張氏棲隱の居を訪へは唯、伐木の丁丁たるを聞くのみ、深山の中
之を聞く殊に山の幽なるを覺ふ、且つ此の時は平地既に春なりと雖も、山中尙ほ
寒く、山谿の路歴る所皆冰雲ならざるなく、石門路遙なり、故に日斜にして林丘に
到るを得たりと、石門とは石を積みて門の如くせしものなり。

史記天官書に曰く、敗軍の塙、破國の墟、下に積錢あり、金寶の上皆氣あり、察せざる
へからすと、言ふは張氏の清廉なる夜夜金銀の氣の上騰するあるも之を識りて
貪らざるも之を顧みざるなり、機を忘れて擾せず名を逃れて害に遠かる、故に朝
朝麋鹿の遊ぶを見て倦むことを知らず、高隱此の如し、吾れ今日輿に乗して茲に
來る、此の清境を見て杳然として其の出處を忘る、君に對するに及んては臭味相

投し殆ど虚舟の泛泛として一の接觸なきか若く、復た一念の化せざるあるなし
と、杳然とは深奥の貌、虚舟は空虚にして繫る所なきを謂ふ、此の二字莊子より出
づ。

徐蓋山曰く此の首は乃ち老杜七律中の極めて平正の格なり、起恰も是れ發端の
語、結恰も是れ完足の語、中の二聯は恰も是れ前後の部位、首より尾に至る、層を遂
ふて聯絡して斷へず、恰も是れ整鍊全局云々と、七律を作る者は宜しく此の詩を
熟讀して筆を下すべし、則ち整然法あることを得ん。

房兵曹胡馬

胡馬大宛名。鋒稜瘦骨成。竹批雙耳峻。風入四蹄輕。所向無空濶。真堪託死生。

驍騰有如此。萬里可橫行。

古來詠物の詩多く皮に粘し骨に着き、一の生氣ある者を求めんと欲するも得へ
からず、何とぞなれば人の此等の詩を作るや、摸寫に局促し、形容に拘泥し、毫も範圍
の外に超出する能はず、遂に觀るへき者なきに至る、要するに賦性未だ高からざ
るの致す所、亦た之を奈何ともする能はざるなり、此の詩上半馬の狀を寫し、下半

馬の才を賛し、結房兵曹に歸す、形容痛快、眞に所謂飛行萬里の勢ある者、才學兼該するに非ずんば安そ此の矯健豪縱なる者を得んや、宜しく之を他の區區牝貼して以て得たりとする者に比して其の優劣を判すへきなり、亦た研詩の一法ならん歟。

大宛は西域の國名、漢書に武帝大初四年春、貳師將軍廣利(姓は李)大宛王の首を斬り汗血馬を護て來り西域天馬の歌を作る云云とあり、馬の神駿は多く西域に産す、是れ首句先づ馬の産地を掲ぐる所以なり、鋒稜は馬骨に鋒稜あるを謂ふ、馬の神氣滯勁なる者は多肉に非ず、鋒稜瘦骨の四字を掲げて其の骨相の非凡を示すなり、竹批は相馬經に耳は銳にして小なること削筒の如きを欲すとあり、削筒は竹筒を斬るを謂ふなり、雙耳の峻なる竹筒を斬るか如く、四蹄の經きは風の入りて吹送るか如しと、神駿比なきを極言す。

上既に馬の形を寫し此れ更に馬の才を狀す、『所向無空濶』見るへし都を過ぎ境を歴るに當りては瞬息にして千里、向前空濶の地なきことを、『眞堪託死生』乃ち知る危急に臨むも幸に此の馬に依りて險を脱すへし、眞に死生を託すへきものなる

を、夫れ驍勇飛騰是の如きあり、固より人の有り易からざる者、君獨り此れあり、此より萬里の外に横行して以て功名を取るへきなりと。

張綬曰く此の四十字中、其の種其の相、其の才、其の德、備はらざる無し、而して形容痛快、凡筆一字を望むも得へからずと、的評と謂ふへし、黃鶴の註に據れば此の作當に開元二十八九年間に在るへしと、乃ち知る公の年少、開元二十九年は公年三十歳なり、氣銳、勃勃たる雄心は抑へんと欲して抑ゆる能はず、馬を借りて房兵曹を寫し、房兵曹を寫して暗に自家の寫照と爲せし者なるを、是の故に字字遒健、全く彼の模倣家の萎靡力なき者と其の趣を異にす、深く味ふへきなり。

送孔巢父謝病歸游江東兼呈李白

孔巢父は字を弱翁と曰ふ、冀州の人なり、少くして韓準、李白、裴政、張叔明、陶汚等と徂徠山に隱居す、所謂竹溪の六逸是なり、此の詩は其の餞宴の席上に賦せし者なり。

巢父掉頭不肯住。東將入海隨烟霧。詩卷長留天地間。釣竿欲拂珊瑚樹。深山大澤龍蛇遠。春寒野陰風景暮。蓬萊織女回雲車。指點虛無是征路。自是君身有仙

骨。世人那得知其故。惜君只欲苦死留。富貴何如草頭露。蔡侯靜者意有餘。清
夜置酒臨前徐。罷琴惆悵月照席。幾歲寄我空中書。南尋禹穴見李白。道甫問訊
今何如。

突如として来る捷快比なし、人をして巢父の高風絶塵を想はしむ、江東は海に瀕
す、故に入海の字を用ふ、既に海に入ると曰ふ、是に於て更に烟霧に隨ふの字を着
く、其の遜世引年の志の深きを示すなり、巢父著す所徂徠集あり、後世に傳ふに足
る、自隱ると雖も彼の没没として世に聞ゆるなきの徒に非ず、則ち其の隱るゝや
益、以て高きを見るへし、高風此の如し、海に入りて將に何を爲さんとするや、身を
島嶼に栖ましめて漁釣し珊瑚の樹を以て垂竿の所を爲さんと欲するのみと、珊
瑚は海底に生ず、之を拂ふと謂ふ、其の深きを極言するなり。

第二段は東遊の景事を寫す、龍蛇は舊説に之を以て永王(名は璘、玄宗の第十六子)
に比し春寒を以て世の衰ふるに喩へ、而して之れか説を爲して曰く、巢父永王の
辟す所と爲るも王の必ず敗れんことを察して辭して江東に歸る、少陵の此の詩
蓋し當時の作なりと、牽説の説と謂ふへし、若かす龍蛇を以て單に禍の物と爲す
の妥なるには、蓬萊は海中の仙島、相傳へて東海に在りと爲す、故に文中之を用ふ、
雲車は妄人の乗る所の者、虚無は莊子に所謂無何有郷是なり、言ふは彼の龍蛇は
山澤に在りて鬪争するも君能く其の害に遠かり、以て身を全くす、世に處するの
敏なる者に非らずや、且つ時は陰寒にして久しく留り難き者あり、君の去る亦た
宜ならずや、君既に歸らば他に同志契合の人あるや必ずへく、蓬萊の織女は雲車
を廻らして相迎へ指示すに無何有の郷を以てし君をして正露に就かしめんと、
前段入海の句あり、此れ便ち承け足すなり。

此の一段は巢父の隱志既に決するを稱するなり、自是とは自然に此の如し人の
及ぶ能はざるの意、君は即ち巢父を指す、夫れ君の颯然として遠く去る所以の者
は何そや、蓋し天賦の仙骨は遂に君をして塵寰を去るの已むを得さらしむ、然る
に彼の世人は毫も其の故を知らず、只、是れ君の去るを惜みて苦苦相留め長く君
をして富貴を享けしめんとするものゝ如きも、君より之を視れば其の所謂富貴
なる者は猶ほ草頭の朝露の日を見れば即ち啼く者と何そ異ならんや、留まらざる
所以なり。

結六句は巢父を送り兼ねて李に呈するの意を出す、蔡侯は其の名字を詳にせず、或は曰く名は静なる者と、蓋し文中の静字を認めて其の名と爲せしなり、殊に知らず下に者の字を着くは決して侯に對するの詞にあらざることとを認れるの甚しき者と謂ふへし、静とは恬静の人なるを謂ふ、空中書は仙書なり、上に仙をいふ、故に復た此の字を用ふ、禹穴に兩處あり、一を蜀の石泉とす、禹の生地たり、一を紹興の會稽とす、其の空所たり、天寶の初白會稽に居れり、故に云ふ。

蔡侯の人と爲り恬静にして意氣餘りあり、早く既に君の去る故を知り得て、清夜酒を置き庭除に臨みて以て其の行を饒す、何等の齒適そや、唯、是れ酒闌にして琴罷み明月席を照し身を起して別を告ぐ、是の時蓋し惆悵に勝えさるものあり、何そや、君既に仙し去る、是より後知らず幾歳を以て我れに空中の書を寄するや、此の別の殊に懷を傷する所以なり、因て思ふ禹穴は會稽に在り、李白彼の處に寓居す、君若し禹穴を尋ねて李白を見は、幸に我か爲に問訊して云へ、今日の遊況之を昔日に比して如何そやと。

此の詩分ちて四段と爲す、前三段は各四句を以てし、末段は六句を以て收を作す、首段は起し得て飄忽に、次段は縹緲恍惚、三段は巢父の隱志を稱し、末段は賓主を一齊に收拾し一毫の餘蘊なし、段落還題其の分明を極む、洵に古詩を學ぶ者の法則と爲すに足る。

兵車行

此の詩は玄宗兵を吐蕃に窮め民行役に苦しみしかは征夫自ら懇ふの詞に託して之を諷刺せしなり。

車麟麟。馬蕭蕭。行人弓箭各在腰。耶娘妻子走相送。塵埃不見咸陽橋。牽衣頓足攔道哭。哭聲直上干雲霄。道旁過者問行人。行人但云點行頻。或從十五北防河。便至四十西營田。去時里正與裹頭。歸來頭白還戍邊。邊庭流血成海水。武皇開邊意未已。君不聞漢家山東二百州。千邨萬落生荆杞。縱有健婦把鋤犁。禾生隴畝無東西。况復秦兵耐苦戰。被驅不異犬與雞。長者雖有問。役夫敢申恨。且如今年冬。未休關西卒。縣官急索租。租稅從何出。信知生男惡。反是生女好。生女猶得嫁比隣。生男埋沒隨百草。君不見青海頭。古來白骨無人收。新鬼煩冤舊鬼哭。天陰雨濕聲啾啾。

初め玄宗の位に即くや銳意治を圖り、人を擇ひ官を授け、刑賞私なく、國內能く治り、人皆善主と稱せしか、惜哉晩年兵を北疆に窮め壯丁を使役し之に繼ぐに老幼を以てせしかは遂に下民の怨嗟を致すに至れり、且つ位に在るの久しきや漸く奢侈の念を生し國用給らす、是に於て新たに監察御史宇文融の議を納れ、融を拜して勸農使と爲し、別に勸農判官十人を置きて天下を分行せしめ、盛んに聚斂を事とし誅求已まさりしを以て州縣大に勞擾せり、此の篇當時蒼生困苦の狀を極寫し深く人主の反省一番せんことを期せしものなるも、敢て之を直言せず、遠く事を濃武に借り、言を征夫自ら想ふるに託し、情を述へ事を陳す、千載の下之を讀むも猶ほ惕惻たる者あるを覺ふ、要するに忠君愛國の意未だ嘗て其の懷を離れざるの致す所と謂はざるを得ず、彼の翩翩たる輕浮者流の徒らに筆翰を弄して好んで時世を譏刺し以て得得焉たる者と一樣の觀を做す勿らんを要す。

此の詩分截して三段と爲す、首段は送別悲楚の狀を叙し、次段過くる者と行人とを提し問答を設け爲して流離困頓の極を狀し、末段再び長者と役夫との問答を提し前段の足らざるを補ひ收結す、章法是の如し。

麟麟は衆車の聲、耶は父、嬢は母なり、咸陽橋は咸陽縣の西南十里に在り、昔者之を便橋といひしか、唐の時今の名に改む、頓足とは足地を叩くなり、悲歎の狀と爲す、欄は遮の義。

出師の備既に成り、是より將に戰場に向はんとして部伍整整各序を以て進み來る、衆車地に軋り其の響き麟麟、征馬長く嘶き其の聲蕭蕭たり、人をして氣振ひ肉動かしむ、殊に幾多の士卒に至りては皆弓箭を腰にし勇氣凜然たり、何そ其の壯なるや、而して其間悲惨視るに忍ひざるものあり、何そや、各家の父母妻子は万里征役する者を送らんか爲に先きを争ふて蟬集すれば、出師の盛なる路上の塵埃を颺起し咸陽橋も亦た其の蔽却する所となるに至れり、師の多きや斯の如し、但見る各家の送る者は再會の期なきを以て或は士卒の衣を牽きて別を惜み、或は頓足して道途を遮攔し聲を放ちて痛哭す、悲痛骨に徹し、其の聲將に蒼穹に達せんとす、是を第一段と爲す。

點行とは壯丁を徵集差役するの謂、防河は開元十五年冬吐蕃の邊害を爲すを以て諸國軍團の兵を發して河右を防かしむるの由、舊唐書に見ゆ、營田は唐の食貨

志に軍府を開きて以て要衝を擇き、隙地に因りて以て營田を置くとあり、即ち成卒の邊に備ふる者なり、里正は唐の制に凡そ百戸を一里と爲し、里ごとに正一夫を置く、百戸の長なり、裏頭は皂羅を以て頭を襄むを謂ふ、邊庭流血の事實は唐鑑に據るに天寶六載帝王忠嗣をして吐蕃の石堡城を攻めしめんと欲せしか、忠嗣上言すらく石堡は險固にして數萬人を殺すにあらざれば克つ能はずと、帝快るよからず、董延光自ら石堡を取らんことを請ふ、帝忠嗣に命じて兵を分ちて之を助けしめしに克たず、八載帝哥舒翰をして攻めて之を抜かしむ、士卒死する者數萬とあり、少陵蓋し是の事を用ふ、武皇と云ふ所以は玄宗を付け言はさるなり、漢の武帝廣く三邊を開く故に借りて用ふ。

道旁過くるものあり、此の悲酸の狀を目撃して其の何か故なるやを行役の人に問へば、行人は但答へて曰く、點出の頻頻なるを以てなり、何となれば或は十五歳より點出せられて北の方河右を防ぎ、便ち四十歳なる者に至るも亦た點出せられて西に營田す、此れ少より壯に及ぶ迄人として役使せられさるなきなり、其の間年の少小なる者は年少にして自ら裝束する能はさるか故に里正は之れか爲

に手を下して之れか頭を襄み之をして甲を振せしむ、征役多年、僅に生命を保ちて歸り來るに及んては兩鬢皎然として既に白し、然るに尙ほ安息するを得ず、又た點出せられて邊を守る、噫、少より老に至る途に休息するを得るなきが、官家の兵を窮む其れ斯の如し、故に戰場は流血既に海水を成すも武皇邊を開くの意未だ暫くも已まざるなり、君聞かすや當日漢の地華山より以東、州ある二百、其の間幾多の村落は滿地總て荆杞を生せり、何となれば男去り盡くせしを以ての故のみ、僅に健婦の鋤犁を把りて耕耘し、嘉禾生すと雖も疆域修まらず、殆ど東西なし、况や秦地に在るの兵は敵の堅勁なるに因りて驅使せらるゝこと尤も甚しく、命を鋒鏑に墜す者勝て數ふへからず、之を喩ふに犬と雞とに異ならざるなり、流離困頓蓋し其の極に達する者と謂ふべきかなど、是を第二段と爲す、曰く防河、曰く營田、曰く成邊と以て點出の頻なるを知るべく、本と秦兵を言ふ、而して兼ねて山東の兵に及ぶ地として行役せざるなきを見るべし。

青海は雪山の北に在り、舊唐書に吐谷渾に青海あり、周匝八九百里、高宗の龍朔三年吐蕃の併す所と爲り、儀鳳中李敬玄吐蕃と戦ひて青海に敗績し、開元中王君義

張景順、張忠亮、崔希逸、皇甫維明、王忠嗣先後吐蕃を破る。皆青海の西に在りといへり、以て其の屢、交戦せし之地たるを知るべきなり。啾啾とは猶ほ啾啾嗚咽の聲と言ふかことし。

今長者我れに問ふあるも我れ役夫敢て恨を申ふと云はんや、然とも今年の冬の如き關西の卒は未だ歸休するを得ず、之に加ふるに租を索むるの急なるを以てす、既に耕耘の人なし、租税果して何くより出んや、今にして乃ち知る信に男を生むの非にして女を生むの美たることを、女を生むか比隣に嫁して久しく存するを得へきも、男を生むに至りては然らず、百草に隨ひて倏忽埋没せんのみ、君見すや吐蕃を征して青海に戦ひしより以來、沙場屍を暴す者古來幾千萬なるを知らず、而かも其の白骨は人の收むるなく各處に遺棄せり、是の故に新死の鬼は煩冤して跽へんと欲し、舊日の鬼又た哭聲多し、天陰りて雨濕ふの時に際すれば常に其聲の啾啾として絶えざるを聞く、嗚呼洵に傷むべきかなど、中段及ひ此の段俱に君不聞、君不見の數語を以て結と作す、尤も警拔なるを覺ふ。

一説に此の篇は天寶十載鮮于仲通師を瀘南に喪ひしを以て制して大に兵を募り南詔を撃つ、人肯て應ずるものなし、楊國忠御史を遣し道を分ち人を捕へ連枷して軍前に送詣す、故に率衣頓足等の語ありと、之を駁する者曰く明皇の季年兵を吐蕃に窮め成を徴して驛騷き内郡幾と徧し、當時黠行愁怨する者獨り征南の一役のみならず、故に公征夫自ら愬ふの詞を託爲し以て之を譏切す、若し楊國忠の貴盛を懼れて其の詞を關西に詭はるとせば則ち尤も然らず云々と、駁者の言通論と謂ふへし、大凡そ古人の傑作人口に藉々たる者に至りては、後人疏釋を加ふるに際し強めて牽強の説を弄し、詩中の事實をして反つて其の眞を失はしむる者徃徃にしてあり、則ち作者に忠なる所以にあらざるなり、詩を讀む者宜しく活眼を開きて人の錯る所と爲る勿れ。

卷村

玄宗の時安祿山寵を恃みて專横なりしか、帝毫も之を省せず、爵秩を増賜し恩遇衆に超ゆ、是に於て遂に反謀を蓄へ徐に其の地を爲し、天寶十四年の冬所部の兵及ひ奚契丹の兵を發して南下せり、時に國內の民久しく戰を知らざりしを以て州縣風を望みて瓦解せしかば、祿山更に進みて洛陽を陥れ大

燕皇帝と僭號し將に長安に向はんとするものゝ如し、玄宗因りて出奔して成都に赴き別に太子を留め位に靈武に即かしむ、是を肅宗皇帝と謂ふ、是より先き少陵は奉先に在りしか、至徳元年(肅宗即位の年)奉先より白水に赴き舅氏雀少府に依り、六月又た白水より酈州に往きしか、肅宗の即位を聞き酈より麻服して行在に奔る、途賊の得る所と爲り、翌年(二年)亡けて鳳翔に走り上謁す、玄宗拜して左拾遺と爲す、少陵の家は酈州洛交縣の羌村に寓せり、彌年艱窶、其の孺弱は餓死するに至りしを以て、帝因りて少陵に許して省視せしむ、此の詩當時家に歸りて見る所を記せしものなり。

崢嶸赤雲西。日脚下平地。柴門鳥雀噪。歸客千里至。妻孥怪我在。驚定還拭淚。世亂遭飄蕩。生還偶然遂。鄰人滿牆頭。感歎亦歎歎。夜闌更秉燭。相對如夢寐。此の詩分截して二と爲す、首段四句は旅客の千里より至るを叙し、次段八句は家に至りて悲歎交、集るの状を記す、言ふは崢嶸たる赤雲は日を蔽ふと雖も、日脚は雲隙より漏れて平地に直射せりと、崢嶸とは山の高峻なるを言ふ、即ち山に似たるの雲を狀するなり、雲にして赤し、日の返照する所と爲るを知るへし、二句を掲

けて先づ時の日暮なるを點出し以て下句を喚起するなり、柴門は設くと雖も主人在らざるを以て常に之を鎖して開かず、主人今千里より歸り至れば門内の鳥雀亂噪せりと、多く字を着けすして能く寂寥の光景を言ひ出せり、千里とは風翔より酈に至るの道程の大略を指すなり。

我れ既に千里風翔より家に到れば妻孥は我か歸るを見て怪訝に堪えざるもの如し、蓋し一たび賊中に陥りしを以て必ず忠義の爲に命を墜せしものと思惟すればなり、故に驟に之を見て反つて一驚を喚せしか、驚き定まるに及んで還た共に涙を拭へりと、猝然怪驚し鬼と疑ひ人と疑ふの状を描き出して紙上に躍躍たり、尤も其の巧を見るに足る、『世亂』の二句は自ら言ふなり、曰く我れ生れて世の大亂に遭ひ、自ら生還するの日なきを分とせり、圖らざりき今日生還を得實に偶然に屬す亦た幸と謂ふべきかなど、此の時隣人我れの兵戈中より來るを聞き争ひ來りて牆を隔てて我れを窺ひ、嘖嘖として大呼し、感歎して歎歎せざるなし、蓋し亦た我れの歸るを以て万死に一生を得るを幸となせばなり、既にして夜深し宜しく睡るべきなり、而して妻孥は我か傍を去らず、燭の盡くるあれば更に燭

を乗り偏へに久客の歸るを喜ぶものゝ如し、嗚呼我れ平素未だ家に歸らざるや、
偶、夢に家に歸るを見れば夢中尙ほ以て眞と爲し、竊に以て喜悅せしも、今日眞に
家に歸るに迫んては、醒つて是れ夢なるを疑ひ、未だ以て眞と爲すを得ざるなり
と。

按するに妻孥怪我在、驚定還拭淚の二句は克く實情實景を寫して妙言詮に絶す、
司空曙の乍見驟疑夢、相悲各問年の如き、陳后山の了知不是夢、忽忽心未穩の如き
皆杜句に胚胎せしものにあらざるなし、而して其の間各妙所を存せり、讀者試に
三者を比較して其の孰れか優にして孰れか劣れるを判せよ、亦た研詩の一法な
り。

其二

晚歲迫偷生。還家少歡趣。嬌兒不離膝。畏我復却去。憶昔好追涼。放櫓池邊樹。
蕭蕭北風勁。撫事煎百慮。賴知禾黍收。已覺糟粕注。如今足斟酌。且用慰遲暮。

此の詩分ちて前後二段とす、前段は上八句、後段は下四句とす、而して前段は還家
後の事を叙し、後段は酒に對して自ら慰め方に家人の完聚を幸として懷を慰す

るなり。

晚歲は歲晚、迫は事の已むを得ざるものあるの意、偷生は還家を指す、煎は煎敖の
意、言ふは歸る時歲既に晚なり、今命を奉して省視すと雖も却つて國の爲に家を
忘るゝの本念に非ず、心中蓋し、疚しきものあり、是の故に家に還るも更に歡趣少
なきなり、嬌兒は父の遠方より歸り來るを見て欣欣然として暫くも膝下を離れ
ざるも、我れの心中鬱鬱として樂まず、愛國の心覺えず、顔面に溢るゝを視て、嚮き
の喜ひしも今復た却き去りて外に出づ、因て憶ふ往昔池上に涼を納れ樹を繞り
て行坐す、家に在りて洵に安舒なりと謂ふへし、之に反して今日歲既に暮れて寒
風蕭々として人を射る、此の間に處して豈に百慮の胸に萃る者なくして可なら
んや、家に在りては妻孥の凍餒を愛ひ、官に在りては國事の日に非なるを憂ふ、家
事國事併せて我か心中を紊る、殆ど煎敖せらるゝか如し、歎すへきかなど、此の四
句は詩經の昔我往矣、楊柳依依、今我來思、雨雪霏霏の句より脱化し來るなり、是を
前段と爲す。

夫れ我の愁憂は千緒万端にして殆ど之を消し去るの法を知らず、何如にして可

なるや、蓋し僅に杜康あるのみ、今知る黍既に收む、酒を造る所以の具既に完し、故に酒未だ做らずと雖も、酒氣芬芳糟床より流出するを覺ふ、是より後ち聊か自ら酔み自ら酌みて酒と流連し、且つ用ゐて遲暮の感を慰すへきのみと、如今は遙に度かるの辭、遲暮は離騷に惟艸木之零、恐美兮人之遲暮とあるに據れり。

按するに李白の酒を嗜むは固なるも、少陵に至りては酒を嗜むの人にあらざるなり、然るに曰く酒を藉りて憂を消せん、と何そや、蓋し少陵は酒を嗜むにあらず已むを得ざるなり、其の意深憂を消する僅に酒あるのみといふかことし、且用の二字深く味ふへし、夫れ酒を以て憂を消す、既に其の心中の苦悶を知るに足る、况や是に依りて僅に憂を散するの具と爲すに於てをや、以て憂愁の層一層深きを知るに足るへきなり。

其三

群鷄正亂叫。客至鷄鬪爭。驅鷄上樹木。始聞叩柴荆。父老四五人。問我久遠行。手中各有携。傾榼濁復清。苦辭酒味薄。黍地無入耕。兵革既未息。兒童盡東征。請爲父老歌。艱難愧深情。歌罷仰天嘆。四座淚縱橫。

此の詩上下を分ちて各八句とす、上段は隣里の情を記し、下段は飲中の問答を叙す、章法是の如し。

首四句は先づ村景を寫すなり、言ふは田家鷄多く、今方に鬪爭し其の聲騷然たり、故に客門に到ると雖も鷄の争ふか爲に聞えざるなり、家僮の鷄を驅りて樹に上らしめしによりて始めて門を叩くの聲を聞くを得て客の來るを知れり、而して其の所謂客とは何人そや、里中の高年老者四五人、我れの久しく遠行して今歸り來るを聞きて手中各、酒榼を携えて來り訪ふなり、何そ其の情の深厚なるや、但、酒に清と濁との別ありて五人餉る所同しからず、然る所以は何そや、蓋し其の携ふる所を異にすればなり、然れども我れは其の清なると濁なるとに遠なく陶然として酔ひ坐談久しきに涉れりと、田舎荒寥の景と村酒とを道ひ得て妙比なきを覺ふ、謂ふこと莫れ洪鐘に細響なしと。

是の時父老皆若ろに酒の薄きを以て辭を爲して曰く、酒は黍を以て造るなり、黍多ければ則ち味自ら厚し、而して今皆黍地ありと雖も耕耘の人なく黍を收むるの多きことを得ざるなり、其の故何そや、蓋し連年の兵戦は累を蒼生に及ぼすと

多く、兒童の耕耨すへき者皆徴せられて兵役に赴けり、黍の多きを欲すも得へからず、而して酒遂に薄しと、父老の苦情是の如し、是に於て其の酒を携ふるの情を謝して曰く、公等艱難の中より酒を以て相餉る、其の深情感するに餘りありと謂ふへし、而して吾れの之れに當る蓋し愧るあるなりと、『難艱』の一句は即ち歌ふ所の辭なり、吾れ既に此の歌を歌ひ畢りて坐視するに忍ひざるものあり、何そや、兵革未だ休まず、庶民流離困頓實に其の極に達するを以てなり、遂に覺えず長歎を發すれば、父者も亦た天を仰きて歎し、四五の人座に在る者皆俱に涕淚交、下り、慘として歎を成さず、遂に宴を罷むるに至れりと。

王翼雲此の詩を評して曰く、三首哀痛の語、悽惻人を動かす、之を總ふるに身は家に到ると雖も而して心は實に國家を憂ふるなり、實境實語、一語も人の數語に抵るに足れりと。善ひかな言や、蓋し少陵は其の忠義天性に根せり、故に發して詩と爲るに迫んては、君父朋友妻子の際に於けるも凡て倫理を敦篤する者にあらざるなし、既に忠義を以て根本と爲す、詩豈に人を感せざるを欲するも得へけんや、古來少陵を稱して詩に聖なる者と爲す、蓋し其の本源は性情の正なるに在る

なり、性情にして正ならざるか、辭巧なりと雖も一顧に値せざるなり、故に詩を學はんと欲する者は先づ本源より創む。

奉和賈至舍人早朝大明宮

此の詩は賈至の早朝大明宮呈兩省僚友と題せしものに和したるなり、當時少陵は官左拾遺たり、即ち長安の賊中より逃れ歸りて上謁せし翌年にして乾元元年の春諫院に在りて作りしものとす。

賈至は字を幼鄰と曰ひ、洛湯の人なり、明經の第に擢てられ、單父の尉に拜す、玄宗の蜀に幸するや、至も亦た之に従ふて起居舍人に拜せり、帝の位を太子亭に傳ふるや、至に命して冊文を撰はしむ、至其の藁を進む、帝嗟賞して曰く、昔し先天の誥命は乃父の爲る所、今茲の冊命又爾之を爲る、美を繼ぐ者と謂ふへしと、信都縣の伯に累進し、散騎常侍を以て卒りぬ、諡して文と曰ひき。

五夜漏聲催曉箭。九重春色醉仙桃。旌旂日暖龍蛇動。宮殿風微燕雀高。朝罷香烟携滿袖。詩成珠玉在揮毫。欲知世掌絲綸美。池上于今有鳳毛。

唐代の制都城に三大内あり、曰く太極宮、曰く大明宮、曰く興慶宮と、太極は西に在

り故に西内と名つけ、太明は東に在り故に東内と名つけ、興慶は南に在り故に南内と名つけ、三太内皆朝を受くる所たり、而して太明宮最も敷なり、太宗の貞觀九年始めて之を置き名つけて永安宮と曰ひ、後ち太明宮と改む、少陵既に拾遺に官し、岑參を推薦し門下中書の兩省諸豪と盛に應酬唱和し遂に此の篇の如き傑作を出すに至れり。

五夜は夜中を分ちて五とし、甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、戊夜と爲す、蓋し漢代の制なり、本篇の五夜は正さに戊夜を謂ふのみ、『漏聲催曉箭』見るへし漏刻滴ること急にして曉色漸く開くことを、箭は司晨の具を製するに金人を鑄造して左手箭を抱かしめ右手刻を指すの裝置とす、春色、仙桃は皆宮中の實景、言ふは朝旭既に昇り春色の櫻なる桃紅醉へるか如しと、桃を稱して仙と爲す、宮中に在るを以ての故のみ、西王母の故事に非ざるなり、旌旗の一聯は俱に太明宮を寫す、羽を折きて旗竿の上_上に在る者を旌と爲し、交龍を畫く者を旂と爲す、朝日には殿上、黼屨、躡席、熏爐、香案を設く、是れ唐代の儀式なり、朝日光り暖にして旗中の龍蛇緩く動き、春風輕く吹きて宮殿の燕雀愈、高しと、偉麗の極、人をして躬其の境に在るの想あらしむ、以

上四句は皆早朝の景を詠するなり。

『朝罷香烟携滿袖』見るべし、薰爐香案殿庭に陳列し、退朝するに迨んで滿袖皆香しきことを、『詩成珠玉在揮毫』乃ち知る舍人胸懷の珠玉は詩と爲つて盡く揮毫の下に在ることをと、此の聯は深く舍人の才を贊するなり、絲綸とは王言如絲、其出如綸と禮記に見ゆ、至の先世及び至皆之れを掌る故に世掌と曰ふなり、池上は鳳池の謂なり、鳳池は中書省をいふ、鳳毛は佳公子の稱にして宋書に謝鳳子超宗、有文思、作殷淑妃誅、帝大嗟賞、謂謝莊曰、超宋殊有鳳毛、と以て證とすへし、言ふは買家父子二世其の美を繼けるを知らんと欲せは宜しく中書省中此の子あるを見て諒知すへきなりと、謝氏_謝の故事を引用して賈の事に切にし、以て五六氣勢の弱を振救す、便ち覺ふ全體活動することを。

按するに和章の體は朱飲山之を説くこと詳なり、其の言に曰く和章とは其の人の原韵是れ如何なるの意思なるやを看て然る後ち筆を下すへし、原唱是れ悲感の意ならば當に歡欣の詞を作りて以て之を慰むへく、原唱是れ慶幸の意ならば當に規戒の詞を作りて以て之を警むへく、原唱是れ憤諷の意ならば當に勸勉の

詞を作りて以て之を解すへく、原唱是れ譏諷の意ならば當に忠厚の詞を作り以て之を愧ちしむへく、原唱是れ悔恨の意ならば當に慰藉の詞を作り以て之を安んずへし、此れ應酬偶成の作に係る是の如し、倘し原唱來題是れ古人の舊句を摘まは、和する者必定緊しく題を靠て寫照し、二句を至煞し、或は自謙の語を作り、或は贊揚の語を語り、或は古成の語を借り以て之を和するを要す、亦た起句即ち和意を寫し、以後再ひ題を靠て實詮する者あり、亦た一格に拘りかたし、但、總て題に照して太た泛なるへからざるを要す、故に古人の詩を和する者僅に其の意を和す、其の韻を和するにあらす、若し徒に和韻を以て工と爲さは亦た後人拘腐の見なりと、飲山の説是の如し、然とも後世和韻の躰あり、飲山の如き、古を論せは則ち可なるも、今日に在りては和韻の躰をも知らざるへからず、和韻の躰は徐秋濤之を説きて曰く、和韻の詩に三躰あり、一に曰く依韻、同じく一韻の中に在りて而して必ずしも原韻を用ゐざるを謂ふ、二に曰く次韻、其の原韻を和して而して先後次第皆之れに因るを謂ふ、三に曰く用韻、其の韻ありて而して先後必ずしも次せざるを謂ふと、朱徐二家の説を記憶し然る後ち筆を下して之れに和すへし、必ず

や燦然として覩るへき者わらん。

本篇唱和の詩は古來人の最も稱道して措かざる所の者なり、故に紙幅の冗長に渉るを顧みず左に之を掲げ示す。

早朝大明宮呈兩省僚友

賈至

銀燭朝天紫陌長。禁城春色曉蒼蒼。千條弱柳垂青瑣。百轉流鶯遶建章。劍佩聲隨玉墀步。衣冠身惹御爐香。共沐恩波鳳池裏。朝朝染翰侍君王。

和前

王維

絳繡鸞人報曉籌。尙衣方進翠雲裘。九天閭闔開宮殿。万国衣冠拜冕旒。日色纔臨仙掌動。香煙欲傍袞龍浮。朝罷須裁五色詔。佩聲歸向鳳池頭。

和前

岑參

鷄鳴紫陌曙光寒。鸞嘯皇州春色闌。金闕曉鐘開万户。玉階仙仗擁千官。花迎劍佩星初落。柳拂旌旂露未乾。獨有鳳凰池上客。陽春一曲和皆難。

古人此の四作を評せしものあり曰く、四作を合觀せば賈の首偈は殊に平平にして、三和は俱に席を奪ふの意あり、三詩に就きて之を論せんに、杜は老氣前在

く王岑は秀色攬るへし、一は則ち三春の穠李、一は則ち千尺の喬松、結語事を用ひ、天然濤泊す、杜詩を指す故に當に推して檀場とすへしと、確論と謂ふへし、故に附記す。

春宿左省

唐の制舎元殿の後に宣政殿あり、殿の左右に門下中書の兩省あり、殿は南向し、門下は其の東に在り、中書は其の西に在り、故に門下を稱して左省と曰ひ、亦た左掖と曰ふ、少陵時に官左拾遺と爲り門下省に屬せり、按するに亦た當さに乾元元年春の作なるへし。

花隱掖垣暮。啾啾棲鳥過。星臨萬戶動。月傍九霄多。不寢聽金鑰。因風想玉珂。

明朝有封事。數問夜如何。

此の詩は上四句宿省の景を寫し、下四句は宿省の情を叙するなり、起句先づ薄暮を以て起す、花の字を點出するは則ち節の春なるを見はし、以て題面に切にするなり、掖垣は禁墻、言ふは花光既に墻に隠れ小鳥啾啾として棲に歸るを見る暮色既に來れり、暫くありて夜色全く迫る、是に於てか星光は萬戶に臨みて閃爍動か

んと欲し、月色は九霄に近きを以て彌、其の多きを覺ふと、萬戶は宮中の戶、九霄は猶ほ九重天といふかことし、帝居は天の如し、故に其の高迥に象りて動字多字を下せり、此の二字を得て前聯振動す。

金鑰は鎖鑰、玉珂は朝馬の飾、此の聯は宿に因りて早朝の候を想ふなり、終宵寢を成さずして宮門の金鑰を開くを聽き、風の吹くに因りて朝馬の玉珂を鳴らすを想ふと、蓋し金鑰は曉にあらすんは開かず、玉珂は省中に在りて聞くを得ざるなり、然るに之を聽き之を想ふは何そや、滿腹忠勤國の爲にするの意は或は天既に明にして鎖鑰の開くかと疑ひ、或は鈴鐸の響くを聞きて朝馬の玉珂を鳴らすを想ふなり、故に遂に坐して旦に至れり。

結二句は諫官の時を憂ひ過を補ひ取て安逸せず乃ち位に在るを慎むの意、夫れ坐して以て旦を待つ所以は何に由りて然るや、明旦奏章の上らんと欲する者あり、故に數、夜の如何を問ふのみと、封事とは漢儀に密奏は皂囊封版すと、拾遺は補闕の官なり、結故に之に及ふ。

此の詩の下半截は詩經の夜如何其夜未央、庭燎之光、君子至止、鸞聲鏘鏘とあるに

據りて其意を用ゐたる者なり、作法に就きて更に之を論せば、花隱鳥棲は日の暮るるなり、星臨月近は夜にして直するなり、聽鐘想珂は宿して起きたるなり、問夜未央は起きて而して且を待つなり、暮より夜に至り、夜より朝に至る、叙述詳明にして格法も亦た嚴密緊奏の妙を極む、杜詩集中に在りても蓋し有數の作と爲すに足らんか。

送翰林張司馬南海勒碑

司馬張は何人なるやを詳せず、唐の制翰林に司馬なし、然らば張は文士に非ずして殆ど鑄工の精なる者か、勒は刻なり、張の詔を奉して南海に碑を刻するを送るなり。

南海は唐の廣州南海郡にして今の廣東省廣東に屬す。

冠冕通南極。文章落上台。詔從三殿去。碑到百蠻開。野館櫻花發。春帆細雨來。不知滄海使。天遣幾時廻。

此の詩の章法は首の二句は全題を總籠し、三句去處より寫し、四句到處より寫し、五句陸路より寫し、六句水路に就きて寫し、末の二句歸時に就きて寫すなり、中間

の四句中前半は濶大を寫し、後半は深細を寫す、此れを稱して濶大半細の法といふ。

『冠冕通南極。文章落上台』起し得て何等の峻拔をや、蓋し冠冕は張を指し、文章は碑詞を指す、南極は即ち南海にして、上台は三公の位なり、今張詔を奉して南蠻に使す、中國の禮教是より後ち南荒に通するを得ん、况んや上相の製作せる碑詞は此の僻陬の地に落つるに於てをや、君の此の行其の任や重且つ大なりと謂ふへしと、『詔從三殿去。碑到百蠻開』此の句は勒碑の意を承け來る、三殿は學士の直する所、遣官の命是より出て、南蠻百國碑此の地に到りて始めて開くと、開は文を石に勒するを謂ふなり、三殿去は上台を承け、百蠻開は南極を承く、以上四句何等の雄濶、何等の莊重、人をして一唱三歎せしむ。

『野館櫻花發。春帆細雨來』看んと要す前半は既に其の雄濶を極む、故に下半は深細を寫すなり、人或は後半の纖細なるを以て此の詩を譏るものあり、蓋し深く詩を知らざるの致す所とす、察せざるへからず、夫れ陸路驛館に投せば春花の穠艶旅愁を破るものあり、或は水に浮ひて春帆を掛けは、露霏たる細雨は北より南に來

るおらんと、野花の玩賞すへく、細雨の凄凉なる、長途水陸の情景を叙し併て送行の意を貼す、尤も作者の苦心を見るに足る。

結二句は暗に張騫の事を用ふるなり、騫は後漢の武帝に仕へ月氏地方に使す、途匈奴に捕はれ十數年間留置せられしか、終に逃れて葱嶺を越え大宛、康居、大月氏の諸國に至りて還り、途復匈奴の爲に留められしか、再び逃れて漢に歸り、後復西域諸國に使し、西は安息安息に至り、南は身毒身毒に至り、是より漢と西域との往來をして頻繁ならしめたり、今張司馬も南海に使す、騫の事蹟と殆ど相似たり、而して其の姓を同くす、故に暗に其の事を用ふ、其の意蓋し君去りて萬里南海の遠に赴く、歸期定め難し、知らず天は君をして何時始めて回還するを得せしむへきや、蠻夷の化に浴するを賀すると同時に私心惆悵に堪えざる者ありと、司馬命を奉して南海に往く故に天と曰ふなり。

曲江

此の詩少陵仕へて志を得ざるを以て暮春に感ありて作るなり、曲江は西安府に在り、唐都の勝境とす。

一片花飛減却春。風飄萬點正愁人。且看欲盡花經眼。莫厭傷多酒入脣。江上小堂巢翡翠。苑邊高塚臥麒麟。細推物理須行樂。何用浮名絆此身。

此の章は時に及びて須らく行樂すへきの意にして、上四句は曲江の景事を言ひ、下四句は曲江の感慨を言ふなり、花飛ふこと一片なるも春光實に之れに係る、故に花飛へは則ち春色減するなり、古詩に曰く飛此一片花、減却青春色とあり、起句此の詩より得來る、夫れ一片の飛ふ尙ほ惜むへし、何ぞ况や千萬點をや、今看る万點の飛花は盡んと欲して暫く眼前を経て傷春の感油然而として生ず、然とも三春幾時なし、須らく酒を飲みて此の憂を銷すへし、寧ろ多を厭ふて酒唇に入るるを嫌ふ莫れ、蓋し春光の老ひ易きを悲む所以は何そや、看よや江上人家の小堂は亂離の後によりて人の居住するなく、屋中翡翠巢ひ、芙蓉苑内の高冢石麒麟偃臥せり、石麟は本と驪山始皇墓前の物、漢の時に及んで移して五柞宮の西青梧觀前梧桐樹下に置く、亂離に因りて今倒臥せり、况や翡翠は水中穴居の物にして今乃ち堂上に巢ふ、荒涼極れりと謂ふへし、是に於てか人間生死盛衰の理倏忽變易するを知るなり、而して此の身又た此の春盡に當る、豈に感慨なくして可らんや、須ら

く時に及びて行樂すへきのみ、浮名は身外の物、行樂は身に及ぶの事、浮名の爲に身に及ぶの事を失ふ予れ之れを爲すに忍びざるなり。

其二

朝回日日典春衣。每日江頭盡醉歸。酒債尋常行處有。人生七十古來稀。穿花蛺蝶深深見。點水蜻蜓款款飛。傳語風光共流轉。暫時相賞莫相違。

前章は時に及びて當さに行樂すへきを言ひ、此の章に至りて留春の詞を作り以て前後相承應せしむなり、起句特に朝回の二字を提げ行樂を以て先と爲さず、亦た少陵君に忠なる所以を觀るへし、言ふは日日退朝の後には便ち春衣を典却して美酒に換へ柳を穿ち花を尋ね江頭醉を盡くして歸らざるなし、然る所以は何そや、官卑くして興豪、酒債多く有り、故に勢ひ衣裳を典却せざるを得ざるなり、然とも衣を典して得る所の錢は蓋し僅少にして足らざるか若きも、酒債は人皆之れあり、尋常の事に屬す、豈に奇異とせんや、酒を賒り醉を盡くすを妨げざるなり、殊に人生古來七十に到り得る者果して幾人かある、古來既に然り、我れ今より已後知らず、幾年有るへきや、毎年の春日に醉を盡くすも、一年特に五六十日に過ぎず、

而るを况や花の飄落する時に於てをや、衣を典し醉を盡くすの過ちと爲さざる所以なり。

深深は蛺蝶の翩翩として隱見するを摹し、款款は上下往來するを狀するなり、既に人生の寄の如きを思へば行樂せざるを欲するも得へからず、况や眼前の光景蛺蝶の花を穿ちて隱見し、蜻蜓の水に點して上下往來するに於てをや、景物戀ふに堪えたり、然とも人の此の好風光を知らざるを恐る、故に傳語知道して曰く、天地の氣化停まらず、風光處處流轉す、人當に之れと共に流轉すへし、彼の蛺蝶去りて蜻蜓來るか若きは、豈に物と共に流轉するに非らずや、且つ蜻蜓は是れ夏蟲たり、蜻蜓を見れば春の既に盡きて夏來るを知るなり、今花飄落すと雖も酒猶ほ餘るへし、奈何そ此の風光の流轉に負くへけんや、嗚呼曲江の春光は決して凡境に非らず、即ち日日醉を盡くすも暫時に過ぎざるなり、人生の世に在るや能く此の幾箇の暫時を銷すへきや、人其れ塵埃中に碌碌として蛺蝶蜻蜓の笑ふ所と爲らすんは則ち幸なりと。

王嗣爽此の詩を評して曰く、初め此の詩に滿たす、國方に多事にして身諫官と爲

る。豈に人臣行樂の時ならんや。然とも其の耽醉聊か自ら遣るの一語を讀み、恍然として此の二詩の蓋し憂憤して而して之れを行樂に託する者なるを悟れり、公一官を授けらるると雖も而して志展ふるを得ず、直に浮名のみ、何を用ゐて此れを以て身を絆せんや、衣を典して酒を沽ひ日に醉郷に遊ひ以て此の限りあるの年を送るに若かば、時已に暮春なり、六月に至りて遂に出でて華州の掾と爲れり、其の時に云ふ移官豈至尊と知る此の時既に之を譖する者あるを、二詩乃ち讒を愛ひ讒を畏るの作なり。と善哉言や、少陵豈に故なくして酒に耽溺する者ならんや。

石壕吏

石壕は河南府陝州の東に在り、此の詩乾元二年東都より華州に回るの時石壕村中に投宿し吏の人を捉ふ事あるを見て慘然として此の作ありしなり。暮投石壕村。有吏夜捉人。老翁踰牆走。老婦出看門。吏呼一何怒。婦啼一何苦。聽婦前致辭。三男鄴城戍。一男附書至。二男新戰死。存者且偷生。死者長已矣。室中更無人。惟有乳下孫。孫有母未去。出入無完裙。老嫗力雖衰。請從吏夜歸。

急應河陽役

猶得備晨炊

夜久語聲絕

如聞泣幽咽

天明登前途

獨與老翁別

史を按ずるに此時安慶緒其の父祿山を弑し自立して鄴に走る、是に於て九節度鄴城を圍みて冬より春に渉る、慶緒食盡き官軍克つこと旦夕に在りしも、諸軍既に統帥なく城久くして下らず、上下解體せり、既にして賊將史思明魏州より兵を引き鄴に趨き、營ことに精騎五百を選ひ、日に城下に於て抄掠せしかば、諸軍甚だ苦めり、三月安陽に戦ふ、官軍潰て南みす、是に於て郭子儀河陽橋を斷ち、東京を保ち南北兩城を鑿きて之を守りしか、成卒足らざるを以て盛に兵を調し老幼を併せて之を徵集するに至る、蓋し秦の誦成と雖も以て之れに加ふる無し、此の篇深く下民の困苦を傷みて作る者、其の慘狀歴歴として目に在り、以て當時の苦を知るに足る、請ふ以下細かに分解するを聽け。

我れ薄暮石壕村に投宿せしに適、吏の昏夜人を捉ふるあり、主人驚愕して倉皇牆を除へて逃匿せしかば老婦代りて吏に接せりと、以上四句を首段とす、此の段先づ征役驅迫の苦を叙するなり。

吏主翁の在らざるを以て怒呵咆哮し、婦は吏の怒るに因りて哀願す、既にして婦

吏の前に于て詞を致すを聽くに、曰く妾の家本と三子あり、昔者鄴城の戎三子並に往けり、稍ありて一男書を送りて二男の新たに戦死するを聞けり、夫れ三男俱に往き、其の二既に没す、存する者も亦た暫時生を偷むに過ぎず、若し夫れ死する者に至りては萬事已むのみと、是れを第二段とす、是の段は備さに老婦吏に訴ふるの詞を述ふるなり。

婦又た語を續きて曰く、三男既に戦役に赴けり、室中豈に役に赴くの人あらんや、有る所のものは惟、僅に乳下の孫あるのみ、孫に母あり、一家數口人の養贍する無きか故に、終に須らく留り難かるへきに、尙ほ未た去らざるのみ、一家の貧窶其の極に達し、出入完全の裙なきに至る、悲ひかな子亡ひ孫幼に媳寡に家貧なり、唯、我れ老嫗年力然かく衰微すと雖も、請ふ今夜吏に従ひて歸り急に河陽の役に應せん、猶ほ晨炊の用に供するを得へきのみと、婦の言是の如し、以上八句を第二段とす、此の段は居る者の苦を言ふなり。

夜既に深く婦吏に隨ひて去り聲も亦た漸く絶するも、猶ほ室隅に涕泣幽咽するものあるかことし、豈に其の媳の泣聲なるなからんや、婦既に吏に隨ひて去る、故に其の夫曉に外より歸るを得て、我れの天明前途に登るに際し空しく此の老翁と別れ、復た老婦と相見ることを得ざるなり、慘も亦た極れりと、是れを末段と爲す、此の段は老翁の潛かに歸るを狀し以て結と爲せるなり。

見るへし三男征役に赴きて二男戦歿し、幼孫家に在りて媳去らざるを得ず、且つ老嫗今又た役に應ず、當初一家七口今日残る所僅に三人のみ、天下豈に此の如き悲惨の事あらんや、蓋し此の作目擧する所を賦して之れを哀むと雖も、其の間深意なくんはあらず、夫れ天子道あれば守り四夷に在り、國を治むる果して道あるか、祿山思明豈に覬覦を挾まんや、則ち知る少陵の之を哀むは亦た之を刺るものなるを、若し夫れ措辭の妙、鎔鍊の至り、之れを古詩十九首に比して未だ遜色を見ざるなり、嗚呼神なり。

新婚別

此の詩も亦た征戍の苦を述へて代りて婦人夫に語るの辭と爲せしものなり。

免絲附蓬麻。引蔓故不長。嫁女與征夫。不如棄路旁。結髮爲妻子。席不煖君牀。

暮婚晨告別。無乃太匆忙。君行雖不遠。守邊赴河陽。妾身未分明。何以拜姑媵。
 父母養我時。日夜令我藏。生女有所歸。雞狗亦得將。君今生死地。沉痛迫中腸。
 誓欲隨君去。形勢反蒼黃。勿爲新婚念。努力事戎行。婦人在軍中。兵氣恐不揚。
 自嗟貧家女。久致羅襦裳。羅襦不復施。對君洗紅粧。仰視百鳥飛。大小必双翔。
 人事多錯迕。與君永相望。

此の詩は女子の暮に婚して晨に別るを悲みたるに擬して作りたるものにして、
 婦の新たに嫁するや依りて頼む所の者は良人を措きて他に之れあらざるに、而
 かも其の人婚して未た久しからず忽ち征役に赴くに至りては、今より後ち果し
 て誰に依るべきやとの意を敷演して、語々實に沈痛悲哀を極めたりと雖も、所謂
 哀みて傷らすとの意に悖らす、洵に三百篇の遺と爲すに足る、殊に其の中間夫を
 勉めしめ、且つ自ら勵みて禮義の正に止るに至りては、讀む者をして覺えず肅然
 たらしむる者あり、全篇段を分ちて四と爲す、首段は四句、二段より四段に至る段
 ごとに各八句、末段は復た四句を以て結ぶ。

首段四句は比を以て端を發すなり、但し通篇凡へて新婦の語と知るべし、曰く彼

の兔絲を視るに本と宜しく松柏に附すべし、乃ち其の蔓を長して繁茂すること
 を得んも、今は蓬麻に附せり、蔓の長きを欲するも得へからざるなり、女を嫁する
 も亦た然り、其の初め所天を擇はすして或は之を征夫に與へんか、一別すれば長
 く絶えん、直ちに之れを路旁に棄つるの優れるに如かざるなりと、兔絲とは陸佃
 の俚雅に木に在るを女蘿と爲し草に在るを兔絲とあり、乃ち知る女蘿兔絲の二
 者は其の類を同くして別あることを、兔絲の和名は「ねなしかつら」或は「うしのめ
 うけん」といふ、蔓生の草なり。

第二段「結髮爲夫婦」より以下八句は初めて婚して別を惜むの意を叙するなり、後
 漢の蘇武の詩に結髮爲夫婦、恩愛兩不疑とあり、結髮とは始めて人と成るの謂に
 して古へは男子年二十にして冠し女子は十五にして笄するの制あり、所謂結髮
 なり、妻子の二字は他本に君妻に作るものあり、然とも顧炎武の日知錄に俗に妻
 を稱して妻子と爲すとあるを看れば必ずしも改めずして可ならん歟、未分明と
 は古禮に婦人は嫁して三日にして廟に告げ墳に上る之を成婚と謂ひ、既に婚禮
 を明にして然る後ち舅姑を拜するの法あり、今此の婦嫁して翌日既に良人に別

るか故に未だ分明ならずと曰ふなり、姑嬢とは舅姑の謂なり、言ふは妾の君に適くや席未だ君の牀に煖ならず僅値一宿して君既に征役に赴く、嗚呼何ぞ其の匆忙なること一に此に至るや、蓋し君の行は未だ真に遠しと謂ふを得ざるも既に河陽に赴く、乃ち邊境を守りて容易に還ることを得ざるへし、此の別の殊に惆悵に堪えざる所以なり、况や妾の君に嫁する一宿に過ぎず、其の婚禮に於て未だ明なるを得ざるなり、何となれば三日にして廟に告ぐるの禮の如きは未だ之を行ふを得ず、何を以て舅姑を堂に拜することを得んや、禮未だ明ならずして君に別る、妾の心中實に煩悶を爲すと、妾身の二句、辭を措くこと深至、千載の下猶ほ大息の聲を聞くかことし、人をして黯然魂を銷せしむ。

第三段『父母養我時』より以下八句は婚せし時の前後の情事を述ふるなり、夫れ父母の我れを生みて我れを養ふや、日となく夜となく珍重愛惜して措かず、一旦之れを嫁すに際しては百の調度を具し、且つ鷄狗の徹なるものをも將ひて俱に往かしむ、何となれば室家久長の計の爲めのみ、何ぞ其の慈愛の深厚なる一此に至るや、父母の女を思ふ此の如し、其心中豈に女をして良人と生離別の悲みあらし

むるを冀はんや、然り而して君今別に生死期し難きの地に向ふ、妾竊に沈痛の中腸に迫るを覺ふ、是の故に寧ろ君に隨ひて同しく去らんと欲するも、奈何せん此の時の形勢は急遽にして其の志を遂ぐる能はさりしなりと、詞旨慘切、純ら是れ涙點にして都て墨痕なき者と謂ふべきなり。

第四段『勿爲新婚念』以下八句は悲哀の裏に在りて禮義の正に止るものにして深く其の夫に望む所あり、且つ貞節を以て自ら處することを言ふなり、一篇の精采は全く此の段に在りど知るへし、曰く君其れ行けよや、君妾と婚して日尙ほ淺きも、愼て新婚を以て念と爲す勿れ、新婚を以て念頭に懸けは恐らくは君の身に利あらずらん、唯、努力して戎行を事とすへし、妾の君に隨かはさる所以も、尙し婦人にして軍中に在りて兵氣をして揚からざらしめは豈に殃ひ君に及ぶ非らずや、是の故に敢てせざるのみ、願念ふに妾は本と貧家の女にして僅に此の羅襦裳を致せりと雖も、今君去りて後誰れか爲に容を爲して之を服せんや、羅襦既に施さず、則ち臙脂白粉も亦た當に君に對して之を洗ひ深く自ら幽閉すべきのみ、君宜しく戎事を勉むへし、妾も亦た自ら勵むべきなりと、羅襦とは襦は羅の細密な

る者を謂ふ、凡そ婦人の別を惜みて絮語喃々するは蓋し尋常の事に屬す、是の故に此の篇に在りても若し單に惜別の語を以て終始一貫せば毫も其の悲涼の處を見るに足らず、今此の毅然たる志氣、一は以て夫を勉めしめ、一は以て自ら勵むゐるに及んで反つて人をして涕淚三斗ならしむ、王嗣夷勿爲新婚念の二句と羅襦不復施の二句とを評して三百篇の嫡裔と爲せり、信なるかな。

末段四句は亦た此意を用ゐたるものにして現時は然かく錯逆分離すと雖も終に夫婦の一處に相ひ聚らんことを望みて收結と爲したるなり、曰く何そ彼の雲際を飛翔するの衆鳥を視さるや、大小の別ありと雖も其の翔るや儼を失はずして雙ひ飛へり、獨り人に至りては然らず、夫妻同しく棲む能はず、蓋し鳥にたも劣ると謂ふへきなり、嗚呼人生は洵に意の如くなる能はずして錯雜交逆の事多し、歎息に堪えざるなり、唯、願ふ夫妻兩心毫も相ひ渝ることなく永く期望すへきのみと。

仇註に此の詩君の字凡そ七見す、君、妻第二段の妻子の二字、君、牀は聚の暫くなるなり、君行君往は別の速かなるなり、隨君は情の切なるなり、對君は意の傷むなり、與君永望するは志の貞にして且つ堅きなり、頻頻君を呼ぶ、一聲一涙に幾かしと曰へり、能く詩を讀む者と謂ふへし、看んことを要す古人筆を下すに方り用意の周到なること斯の如きを。

夢李白

死別既香聲。生別常惻惻。江南瘴癘地。逐客無消息。故人入我夢。明我長相憶。君今在羅網。何以有羽翼。恐非平生魂。路遠不可測。魂來楓林青。魂返關塞黑。落月滿屋梁。猶疑照顏色。水深波浪濤。無使蛟龍得。

初め李白永王璘の讒る所と爲り其の幕中に召致せられしか王の叛するや脅かして偕に行かしたり、遂に執へられて獄に下され、睡きて夜郎に長流せられしは既に其の小傳に於て之を略叙したり、此の篇當時の作なり、蓋し少陵の李白に於ける交情深厚、其の流されて久しく消息なきや、惓惓として係念し、遂に夢寐に之を見るに至りしは洵に交道の厚きに因せずんはあらず、要するに少陵は情の深きの人なり、唯、其れ情に深し故に此の情を以て友に接して信となり、此の情を以て

君に事へて忠と爲り、父子兄弟に接して孝慈友子と爲る、總て此の情の然らしむる者にあらざるなし、情既に正しく、然る後ち事に因りて以て思を緯し、才を役して以て分に適し、竟に温厚和平の旨に合す、少陵の少陵たる全く此に在りて存す、夫の其の旨を飾りて悦を取る者の若きは俱に詩を語るに足らざるなり。此の詩は第三段に分ちて看んことを要す、首段は四句、次段は六句、末段も亦た六句とす。

首段「死別既香聲」より以下の四句は先づ我れの李白を夢むことを致す所以を叙するなり、言ふは我れの白に於ける之をして死別ならしむるか吾れは唯、飲泣するに止まりて復た哭することを爲さざるべし、願ふに今や白潯陽の獄に在り、則ち其の別や死別に非ずして生別たり、吾れの日心に惻惻として忘れざるも亦た是れか爲めなり、然とも江南は由來瘴癘の地たり、白や去りて後ち久しく消息なし、或は瀟氣に中てられて病死せしにあらざるなきを得んや、然らすんは何か故に其の消息なきこと一に茲に至るやと、潯陽は今の江州にして江南道に屬す、瘴は熱病にして癘は疫氣なり。

第二段「故人入我夢」より以下の六句は夢中に在りて白と相接するの情を述ふるなり、言ふは故人久しく消息なく心中常に惻惻せしか、夜來忽然來りて我か夢に入れり、知るべし是れ我れの相念ふこと極めて切なるか爲めの故なることを、然とも驟つて思ふに君今獄中に在り、且つ又た羽翼なし、何か故に飛ひ度りて此に至るを得んや、或は恐る此の魂や生魂にあらすして死魂なることを、何となれば江南は瘴癘の地たり、之に加ふるに久しく牢獄に坐す、萬生還を得るの理なきを以てなり、彼我懸絶、道途遼遠未た其の生死を測る能はずと雖も、白今日の境遇より之を視れば其の死魂たること蓋し多きに居れりと、羅網は獄中を指していふなり。

末段「魂來楓林青」以下の六句は夢覺めて後ち相思ふを記するなり、楓林は白の居る所を指し、關塞は少陵の居る所を指す、言ふは吾れ夢中に於て君の魂の飄飄として來るや其の居る所の楓林一時皆青きを見、其の去るに及んで我か居る所の關塞爲に闇黒と爲るを見ると、此の二句は全く楚辭の湛湛江水兮上有楓林、目極千里兮傷春心、魂兮歸來哀江南とあるに基く、恍惚の狀を叙し讀む者をして亦た

惘然夢の如くならしむ、其の妙筆之を述ふると得ず口之を言ふを得ず、要は沈思して神悟するに在るのみ、夢想すること其れ此の如し、是の時忽然として夢覺むれば屋梁の月色皎皎として晝の如く猶ほ君の顔色を照すかど疑はる、若し君をして恙なく獄を出てて來らしめは其の快果して何如そや、然とも又た恐る道程殊に遠く其の間大川の波浪澎湃たる者あり、幸に風波の爲に其の身を失墜して蛟龍の得る所と爲る無れど、首段未だ夢ならざるより夢に入り、又た夢中より説きて夢の醒むるに至る、是れ魂是れ人、是れ夢是れ眞、都て恍惚定りなきを覺ふ、少陵の至文にあらすんは豈に克く此の至性を寫すことを得んや。

他本には多く第二段『君今』の二句を末段『關塞黑』の下に置けり、通せざるにあらざるも本集の『長相憶』の下に在るの語氣方さに順なるに若かす、疑を生ずるの嫌なきにあらざるを以て特に之を辨ず。

秦州雜詩

秦州雜詩は少陵關輔の大に鐘え生計の艱難なるを以て遠く此の地に避け其の間懷に觸るる所を咏し出したるものにして總て二十首あり、其の作た

る蓋し一時に成りしものにあらざるも、首尾貫通して始と一氣呵成せしものに似たり、是の故に全首を通讀して始て其の妙緒を知るを得へく、一斑固より全豹を窺ひ易からず、然も其間又た妙所の存するあるか故に、廿首中に就きて最も人口に膾炙する者二篇を掲げて其の要を示す。

少陵年譜を按ずるに其の秦州に避けしは正に乾元二年の秋なり、當時邊境警を失ひ國內騷擾し、之に加ふるに身軀軻不遇にして憂憤悲慨の極、遂に此の二十篇を成せしものなれば、決して尋常風月を吟咏するものと同一視すべきにあらず、左篇掲ぐる所は二十首の第七章にして李之芳なる者の出てて吐蕃に使し、久しく留りて未だ還らざるを憂ひて咏せしものにして、悲憤の氣之を出たすに一忠愛の語を以てし、毫も怨誹の意なし、洵に作者の本領を見るに足る、然りと雖も二十首各、其妙所あり、此の二首を以て秦州雜詩の精英此れに竭くと爲せは不可なり、知らざるへからず。

華葺萬重山。孤城石谷間。無風雲出塞。不夜月臨關。屬國歸何晚。樓蘭斬未還。烟塵一長望。衰颯正摧顏。

惘然夢の如くならしむ、其の妙筆之を述ふるを得ず、口之を言ふを得ず、要は沈思して神悟するに在るのみ、夢想すること其れ此の如し、是の時忽然として夢覺むれば屋梁の月色皎皎として晝の如く猶ほ君の顔色を照すかと疑はる、若し君をして恙なく獄を出て来て來らしめは其の快果して何如そや、然とも又た恐る道程殊に遠く其の間大川の波浪澎湃たる者あり、幸に風波の爲に其の身を失墜して蛟龍の得る所と爲る無れど、首段未だ夢ならざるより夢に入り、又た夢中より説きて夢の醒むるに至る、是れ魂是れ人、是れ夢是れ眞、都て恍惚定りなきを覺ふ、少陵の至文にあらずんば豈に克く此の至性を寫すことを得んや。

他本には多く第二段『君今』の二句を末段『關塞黑』の下に置けり、通せざるにあらずるも本集の『長相憶』の下に在るの語氣方さに順なるに若かす、疑を生ずるの慊なきにあらずるを以て特に之を辨ず。

秦州雜詩

秦州雜詩は少陵關輔の大に饑を生計の艱難なるを以て遠く此の地に避け其の間懷に觸るる所を咏し出したるものにして總て二十首あり、其の作ら

る蓋し一時に成りしものにあらずるも、首尾貫通して始と一氣呵成せしものに似たり、是の故に全首を通讀して始て其の妙緒を知るを得べく、一斑固より全豹を窺ひ易からず、然も其間又た妙所の存するあるか故に、甘首中就きて最も人口に嗜炙する者二篇を掲げて其の要を示す。

少陵年譜を按するに其の秦州に避けしは正に乾元二年の秋なり、當時邊境警を失ひ國內騷擾し、之に加ふるに身軀軻不遇にして愛憤悲慨の極、遂に此の二十篇を成せしものなれば、決して尋常風月を吟咏するものと同一視すへきにあらず、左篇掲ぐる所は二十首の第七章にして李之芳なる者の出て吐蕃に使い、久しく留りて未だ還らざるを憂ひて咏せしものにして、悲憤の氣之を出たすに一忠愛の語を以てし、毫も怨誹の意なし、洵に作者の本領を見るに足る、然りと雖も二十首各、其妙所あり、此の二首を以て秦州雜詩の精英此れに竭くと爲せば不可なり、知らざるへからず。

莽莽萬重山。孤城石谷間。無風雲出塞。不夜月臨關。屬國歸何晚。樓蘭斬未還。烟塵一長望。衰颯正摧顏。

秦州の地は今の甘肅省に屬し、北に賀蘭山、隱山あり、東に太華山、秦山あり、西に大雪山あり、四圍皆山なるか故に、地僻にして境幽に、風塵到らず、洵に禍亂を避くるに宜しと爲す、『莽莽萬重山、孤城石谷間』と見るへし、此の地の險絶にして深遠なる、山岳は千重万重し而して、秦州城は高く山谷の間に屹立せることを、境既に斯の如し、之を叙する、巨刃天を摩するの勢を以て入らされは、到底其の奇僻、怪險を寫出する能はず、此の二句を着けて、眞に壁立萬仞なることを覺ふ、秦地の險と其の雄を比するに足るものと謂ふへし、『無風雲出塞、不夜月望關』は、秦の地、山岳巍峩として高く、半天に入れり、山の多き、昱の如し、故に陰雲相澆り、風なきも雲常に去來し、秦城高く山谷の間に聳え、城雉屈曲縈廻す、故に夜ならざるも、月光先づ關に臨む、慘憺たる陰雲、淒涼の月色、即ち是れ秦地の光景なりと。

『屬國歸何晚』は、當時李之芳の出でて吐蕃に使せし事をいふ、屬國は即ち外國の來附する者、『樓蘭斬未還』は、漢書に傅介子節を持して樓蘭國に至り、其の王を斬り首を持して還りしかば、詔して封して、義陽侯と爲すとあり、以上の二句は、秦地荒涼の光景を觀て、感忽ち時事に及ふなり、言ふは彼の出でて屬國に使する者、猶ほ未

た歸らず、何そ其の晚きや、蓋し樓蘭王の首を斬り、之を闕下に獻せんと欲するか爲めに然るか、然らずんば、其の滯留するや、何そ今日に至るあらん、吾れ今日獨り烟塵中に于て、西のかた彼の吐蕃の地を望み、憂愁の極覺え、す我か容顏をして衰颯せしむるものありと。

一説に、無風不夜を以て地名と爲して解する者あり、牽強の説と謂ふへし、風なくして雲出て、夜ならずして月臨む、か故に地の幽僻、險絶なるを知るべく、而して詩味津津たるなり、若し之を解して、單に地名と爲せば、雲は無風塞より出て、月は不夜城に臨むといふに過ぎず、何の趣味か、之れ有らんや、後人杜詩を解する者、動もすれば牽強に過ぎ、反つて本詩の意を失ふものあり、讀む者之を知らざるべからず。

其二

風林戈未息。魚海路常難。候火雲峰峻。懸軍幕井乾。風連西極動。月過北庭寒。故老思飛將。何時議築壇。

此の詩も亦た邊亂を憂ひて作りたるものにして、時の正に秋なるにより、之を借

りて時事を慨せしものとす、風林は今の甘肅省蘭州府河州の西南に在り、當時吐蕃の併す所と爲れるもの、魚海は吐蕃の地、此の詩一二先づ兵戈の未だ息まず且つ道路の殊に險惡なるを以て入るなり、言ふは漢の故地なる風林は今既に吐蕃の併す所と爲り兵戰方に熾なり、之に加ふるに魚海に在りては道路の險惡なる殊に甚たしく、行軍の難きや蓋し想像するに堪へたりと、前聯は起の戈未息と承句の路常難とを承けて之に接したるものにして、亦た行軍の難きと路程の險なるを叙するなり、烽火の擧かる所は山岳峻絶にして容易に登攀するを得ず、懸軍の入る所は幕井乾涸して人馬皆渴に苦めり、征戰の苦は論なく土地の不利なるも想ふべきなり、是の故に滿目淒涼の氣は之を風月に見て知るへし、何そや、蕭條たる金風は西極に連りて悲聲漸く動き、慘愴たる秋月は北庭を照して光輝寒なるを覺ふ、何そ其の四面悲慘一に此に至るやと。

七八の兩句は李廣及び韓信の故事を總合したるものにして、前漢書に李廣右北平の太守と爲る、號して漢の飛將軍と曰ふとあり、築壇の故事は史記に漢の高祖齋戒して壇を築き韓信を拜して大將軍と爲すの事あり、言ふは中原の父老征戰の苦是の如きを見て、早く漢の飛將軍季廣の如き名將を得て之れか爲に壇場を築き、拜して大將軍と爲し、以て此の禍亂を戡定せんことを冀望して已まざるなりと、父老の言を藉りて以て自己の胸懷を叙す、婉にして直ならず、所謂觸るる處忠愛の意を寓する者、忠義至性に根するにあらずんば決して作す能はず、少陵の詩獨り千古に冠して上騷雅に繼ぐ所以なり。

日夜憶舍弟

此の詩も亦た秦州に在りて作る所に係る、少陵二弟あり、一は許に在り、一は齊に在り、皆河南道に屬す、彼此離散悵悵の情に堪へず、遂に此の作ありしなり。

戍鼓斷人行。邊秋一雁聲。露從今夜白。月是故鄉明。有弟皆分散。無家問死生。寄書長不達。况乃未休兵。

上半は月夜の景を寫し、下半は弟を憶ふの情を叙す、是れ此の詩の章法なり、戍鼓は戍樓の鼓にして、當時史思明亂を作し、長驅して東京及び齊、汝、鄭、滑の四州を陷れ、益、獯獮を逞くせしかば、各地に戍樓を置き、打鼓して相警む、秦州も亦た然り、言

ふは夜將に午ならんとして、葉葉たる成鼓聲既に微に、往來の入路に斷絶す、時秋の來るに値ひ一雁の悲鳴して過くるあり、是に於てか諸弟を憶ふの念油然として生ず、况や節は今夜より白露に入り、且つ輝々たる月光は均しく故郷を照すに於てをや、百感胸に萃り愴然として已む能はざる所以なり、顧ふに吾れ二弟あり、理宜しく同處すべきなり、而して今其の口を四方に糊せしめ、弟兄離散し、東都に家なし、夫れ何に徙りてか二弟の死生を聞くを得んや、吾れの弟を憶ふ情は抑へんと欲して禁する能はず、是の故に願願書を寄すも、行止常なく、其の書長く相達せざるなり、平時より是の如し、方今時は擾亂に際し、兵戈未だ休息せず、諸弟と一堂に會し、手を把りて舊を叙せんと欲するも得へからざるなり、月を觀て思を憶き、悽然の情に堪へざるは蓋し此を以ての故のみ。

此の詩第四句に故郷の字あり、此の二字ありて月に對して家を思ふの情を見るへく、乃ち上下の關紐とす、且つ起句に成鼓の二字を下し、末句未休兵の三字を以て結ぶ、少陵の筆を下して荷くもせざるを見るべきなり。

天末憶李白

李白永王の事に坐して夜郎に長流せらる、少陵時に秦州に在り、之を懷ふて悵然として此の作あり。

涼風起天末。君子意如何。鴻雁幾時到。江湖秋水多。文章憎命達。魑魅喜人過。應共冤魂語。投詩贈汨羅。

首先つ涼風の二字を捉く、乃ち知る節既に秋に入りしとを、周書時訓に立秋之日涼風至とあり、以て證と爲すへし、天末は天の窮まる處を謂ふ、君子とは李白を指す、鴻雁は徐孝嗣の詩に行雲傳響、歸鴻寄書とあり、音信を謂ふなり。

此の詩上四句は悽然たる秋景に對して坐るに懷友の念を起すなり、言ふは秋色の來る眼明かに之を看ることを得ざるも、涼風習習として衣を吹き、四顧蕭條たるを見ては、人をして爲めに悽然たらしむるものあり、吾れ是に於てか秋の既に來ることを知れり、夫れ蕭條たる此の景物に對して懷友の念を生ずるは人の情なり、是の故に今日秋に逢ふて思ひ先つ君に及へり、君の意果して如何そや、吾れの君を思ふや此の如く切に、其の音信に接するを得るも尙ほ以て懷を慰するに足る、而して音信果して幾時か達すへきや、江湖風波多く舟楫安なきを必し難し、

道程頗る危懼すへきものあり、君を思ふと同時に亦た君の身の安否に思ひ及はさざるを得ざるなり。

『文章憎命達』は猶ほ詩能く人を窮すといふごとし、魑魅は左傳に投諸四裔、以禦魑魅とありて、註に魑魅山林惡氣、所生爲人害者と見ゆ、山中の怪物なり、冤魂は屈原を指す、屈原の楚王に疎んせられ、憂憤の極、遂に汨羅に投して死せしは皆人の知る所なれば、今復た之を費せず、白夜郎に長流せらる、其の才を抱きて容れられざる正に屈原と相似たり、故に七八屈原の事を引用して之を結び、深く之を憫みしものとす。

文章以下の四句は李白の放逐せられしによりて重ねて之を悲み、且つ之を憫みたるなり、言ふは古來文士は多く薄命不遇にして其の生を聊せざるもの比比として然り、其の困躓する殆ど天の命達を憎むもの如し、殊に山鬼は人の過を喜ひ、虚に乗して惡を爲すに至りては、増、文士の不幸を憫まざるを得ずと、山鬼と謂ふも眞に此の怪物あるにあらざるなり、禍殃の人に累する、殆ど山鬼の如き怪物ありて人の虚に乗して害を爲すに似たるか故に云ふなり、結二句の意は君の才

學を以てして遇はず、夜郎に竄せらるるは彼の屈子の事蹟と相似たるの甚しきものと謂ふを得へし、宜しく屈子の冤魂と共に其の胸中の憂憤を語るへきなり、然とも一は黄泉に在り、幽明界を異にするか故に、語らんと欲して語るを得ず、是を以て詩を作り之を投して汨羅に贈りて滿胸の鬱悶を洩すへし、則ち或は少しく其の懷を慰むに足るへきなり、然らすんは此の謫居を何如せんや。

一説に冤魂の二字を解して李白の魂と爲して説くものあり、白や未だ死せず安そ魂を以て之を喚ふを得んや蓋し其の誤を致す所以は上下の關係上、動もすれば誤認を致し易きに坐するを以てなるも、亦た熟讀して深く之を咀嚼せざるに因するのみ、姑く詩中に就きて白の未だ死せざるを辯せんに、前聯鴻雁の二字あり、鴻雁とは音信の謂にして、白の音信久しく杜隔せるか故に早く接手せんことを冀ふの辭に過ぎず、然らば則ち白未だ死せざるや見るへし、白未だ死せず、之を稱して冤魂と爲す、天下豈に是の如きの謬妄あらんや、若かす之を解して屈原の魂と爲すの平妥にして且つ理あるには、古人穿鑿の弊、往往是の如し、詩を讀む者は須らく確然として迷はざるの頭腦と、紙背に通徹するの眼光とを以て、是を是

とし非を非として斟酌すへし、然らすんは註釋の誤らる所と爲るや期すへきなり、然りと雖も是れ豈に特に詩を讀むの法に止らんや。

送遠

此の詩は乾元二年の冬、少陵秦州を去る時の作にして、題して送遠と曰ひ、遠行者を送る如くなるも、實は然らす、少陵既に秦州を去りて後、此の詩を作りて己れの將さに去らんとする時詩を贈りし者に寄せたるなるか故に、之を自送の詩と爲して看るを可とす。

帶甲滿天地。胡爲君遠行。親朋盡一哭。鞍馬去孤城。草木歲月晚。關河霜雪清。別離已昨日。因見古人情。

此詩上下に分截して看んことを要す、上四句は是れ昨日行を送るの事、下四句は今朝別を憶ふの情を叙するなり、帶甲といふ所以は當時史思明亂を作し天下到處皆兵ならざるなきを以ての故なり。

遠行する者は道路平靜海内虞なきの時を以て始めて四方に往來すへきなり、夫れ今日は如何なる時そや、天下帶甲の士ならざるなく兵戈充滿す、豈に妄動すへ

きの時ならんや、然るに危険を憚らす毅然として遠行す、何ぞ其の險を冒すの一到茲に至るや、平時の別離すら既に傷心するに足る、况や此の行に於てをや、慟哭せざるを欲するも得へからず、是に於て親朋は其去るに追んて一哭し、再會の期なきを歎す、情意甚だ悽楚なりと謂ふへし、而して君は則ち鞍馬遠に親朋に別れ、竟に手を揮ふて孤城を去る之を送る者の悲傷に比せは去る者の心中果して何如そやと、起二句突如として入り來り、慘愴の情筆端に繚繞す、三四は詞愈、迫り意愈、切に、悽惻の情一時に絶す、讀む者をして亦た爲に涕淚万斛ならしむ、是の種の句、洵に少陵獨特の長所、他人其の門牆を窺ひ見る能はざるなり。

五六の二句は既に去るの後一路憔悴の苦を寫し出すなり、節は既に晚冬に屆り、草木悉く黃落して一年餘りなく、關河は黯淡として霜雪交、至る寂寞の光景更に閱歷に堪へざる者あり、試に指を摟して分手よりの日子を數ふるに特に僅に昨日に過ぎす、而かも情緒の堪へ難きを覺ふ、則ち知る離を傷み別を怨むの懷古人も自ら同しく然るあるとを、結句の出處は江淹の古離別に黃雲蔽千里、遊子何時還、送君如昨日、燈前露已圓、不惜蕙草晚、所悲道里寒とあるに据り、離別之情古今な

きを叙せしなり。

題玄武禪師屋壁

此の作は寶應元年(肅宗)少陵蜀の梓州に在る時の作にして、玄武とは山名、梓州に在り、一に宜君山と名づく、玄武禪師は蓋し玄武山中の僧ならん、屋壁に題すといふは、其の壁上山水の畫ありしを以て一詩を其の上に題せしなり。何年顧虎頭。滿壁畫滄洲。赤日石林氣。青天江海流。錫飛常近鶴。杯渡不驚鷗。似得廬山路。真隨惠遠遊。

詩の意を按するに禪師の屋壁に山水を畫きしは固よりなるも、之に添ふるに鶴あり、鷗ありて、鶴の山前に於ける、鷗の水際に在るを觀て、遂に此の結構を案出せしものの如し、此の詩を讀む者亦た先づ頭腦に以上の物件を印して然る後ち一之を咀嚼せば、猶ほ庖丁の牛を解くかごとく、刃を迎へずして支解するを得ん、劈頭先づ特に一言する所以なり。

『何年顧虎頭』突如としと入り來り人をして驚怪せしむ、晋の時顧愷之字は虎頭なる者あり、晋陵無錫の人なり、尤も丹青に工にして形勢を傳寫すること妙に入ら

ざるなし、此の句は名手を以て壁上に仙境を畫くを贊せんか爲に、工畫者顧愷之を喚起して極めて其の妙を稱するなり、何年の二字を着くるは遙想の辭なりと知るへし、第二句の滄洲とは中國を去ること數萬里の仙境にして花木常に二三月の如しと、即ち壁上の畫を指して云ふなり、起承二句を更に平易に之を解せば何年の工畫者顧虎頭なるそや、屋壁に畫くに是の如きの佳山水を以てし人をして其の功妙なるに感せしむとの意なり。

『赤日石林氣 青天江海流』此の二句は亦た畫中に就きて山水を形容するなり、夕陽は石林に返照し、江海の流れは天と相接する、滄茫空濶の景を叙して妙に入れり、古人此の二句を評して三四は本と奇を極め、險を極むるの語、人多くは尋常の看を作し過くも、奇は意を立つに在りて、句法渾融なるを以ての故のみと云へり、的評と謂ふへし。

『錫飛』の二句は畫を贊し兼ねて禪師を贊したる者にして、錫飛の故事は古昔誌公なる者あり、白鶴道人と舒州の潜山の奇勝に富むを以て同しく之を得んと欲し、梁の武帝に白す、帝其れをして各神通を顯し物を以て其の地に識るして之を得

せしむ道人は鶴を以てし誌公は錫を以てす、既にして鶴先つ飛ひて山麓に至り、將に止らんとして忽ち空中錫の飛ぶ聲を聞き、誌公の錫遂に山麓に卓立す、道人俾はされども前言の食むへからざるを以て遂に各、識るす所に於て室を築きたり、是れを飛錫の故事となす、杯渡は劉宋の時に僧あり、人其の姓名を知らず、嘗て木杯に乗して水を渡り一家に止宿す、金像あり之を求めたれども得ず、乃ち竊みて以て去る、主人之を追ふて孟津に至れば、木杯を浮へて河を渡り、風棹を假ることなく輕疾飛ふかことし、人遂に此の僧を名つけて杯渡と爲す、二句の意は禪師日夕此の室に坐し壁上の畫に對して或は錫を飛ばして鶴に近づけ、或は木杯を浮鴨の傍に浮ふるなるへしとの義にして、壁上の畫に鶴鴨の二鳥あるを以て二高僧の事に想ひ及ぼし、一は畫に的切ならしめ、一は禪師に對照せしめし的手段に至りては、到底他の作者の企て及ぶ能はざる所とす、殊に常の字不驚の字を以て其の畫たることを點明せしに至りては、詩に聖なる者にあらすんは安そ此に至るを得んや、嚴滄浪(羽)曰く、詩を論するは李杜を以て準と爲す、猶ほ天子を挾みて以て諸侯に令するかことしと、又曰く李杜數公金翅海に譬し香象河を渡るか

如し、下も郊(孟)島(賈)の輩を視る直ちに蟲草間に吟するのみと、善い哉言や。

結二句は少陵自ら道ふなり、晉の時僧惠遠なる者あり、廬山に住す、陶淵明亦遠と遊ひ、白蓮社を結ひ、其他名賢劉遺氏、雷次宗の輩の如き并ひに世を棄て榮を遣れ遠に依りて遊へり、故に少陵此を藉り惠遠を以て禪師に比し、自己を以て淵明に喩へ、其の禪師に隨遊して世を遺る想あるは、猶ほ彼の淵の惠遠に於けるかことしとの意を致せしなり、一邊は畫を贊し、一邊は禪師を贊し、錯綜の妙古今比なし、千舌の絶技人豈に追ひ易からんや。

八陳圖

孔明八陳の圖は、四川省夔州府奉節縣の西南七里に在り、渚下の平曠上に石を聚めて分布し、宛然として猶ほ存せり、峽水大なる時、三蜀雪消ゆるの際、湧泥濊、十里の大木、百丈の枯槎、波に隨ふて下り、水落ち川平なるに及ひて万物皆故態を失ふも、諸葛小石の堆は依然として舊の如く、以て今日に至ると云ふ、其の状たるや、凡て八行あり、細石を聚めて之を爲す、各、高さ五丈、廣さ十圍、歴然葦布し、縱横相當る、中間は相去ること九尺、正中に南北の巷を開く、悉

く廣さ五尺、凡そ三十四聚あり。

功蓋三分圖。名成八陳圖。江流石不轉。遺恨失香吳。

瑯琊(今の山東道青州府諸城縣及び沂州府の東境)の諸葛亮字は孔明襄陽(今の湖北襄陽府)の隆中山に寓居す、劉備士を司馬徽に訪ふて亮の俊傑なるを知り身を屈して三たひ其の廬に詣り亮を見ることを得たり、亮乃ち三分の策を進めて曰く、曹操は百萬の衆を擁し天子を挾みて諸侯に令す此れ賊に與に鋒を争ふへからず、孫權は江東を據有し國險にして民附し、此れ與に援と爲すへく而して圖るへからず、荊州は武を用ふるの國益州は險塞、沃野千里、若し荊益を跨有し、其の巖阻を保ちて戎越を撫和し、好みを孫權に結ひ、内政治を修め、外時變を觀は、則ち霸業成るへく漢室興すへしと、備大に悦ひ遂に其説を用ひ漢土を三分して鼎足の勢を成し、備漢の照烈帝と爲り亮を拜して丞相と爲す、亮嘗て兵法を推演して八陳の圖を作れり、魏の臣司馬懿其の營壘を案行し歎して天下の奇才と爲すに至れりと云ふ。

此の詩言ふは亮の蜀を輔けて大業を建てしは、其の功や實に偉大にして三國漢

魏吳の臣皆及ぶ能はざる所たり、殊に亮の韜畧は具さに八陳の圖に見はる名成るといふ所以なり、八陳の圖形今日尙ほ存す、大水ありと雖も依然として其の形を變せず、眞に千古に堪ゆ、唯憾むらくは昭烈を輔けて早く吳を呑むの計を爲さざりしことを、果して能く吳を征して其の有と爲さは漢の事猶ほ爲すべきに、計此に出てす、身死して柩肉未だ冷かならざるに國既に敵の爲に併呑せらる、痛歎に勝ゆへけんや。

按ずるに末句諸家之を解して數説あり、東坡は昭烈の群臣の諫を用ゐず關羽の爲に仇を報ひんと欲し大舉して吳を征し反つて吳の敗ぶる所と爲りしを歎せしものと爲し、或は昭烈の東征を制する能はざるを以て自ら以て恨と爲せし者とせしあり、紛紛として一定せず、然ども予を以て之を按ずるに昭烈を輔けて吳を征せさりしを以て少陵の深く遺恨とせし者と爲て解するの至當なるを認む、何となれば亮の當初に昭烈に三分の策を進むるや、天下を一統するの意なきにあらざりしも、當時の勢ひ未だ二國(魏吳)に向つて鋒を交ゆるを許さざりしか故に、暫らく三分鼎立の勢ひを爲すの優れるに如かさるを稱せしも其の最終の目

く廣さ五尺、凡そ三十四聚あり。

功蓋三分圖。名成八陳圖。江流石不轉。遺恨失香吳。

瑯琊今の山東道青州府諸城縣及び沂州府の東境の諸葛亮字は孔明襄陽今の湖北襄陽府の隆中山に寓居す、劉備士を司馬徽に訪ふて亮の俊傑なるを知り身を屈して三たひ其の慮に詣り亮を見ることを得たり、亮乃ち三分の策を進めて曰く、曹操は百萬の衆を擁し天子を挾みて諸侯に令す此れ賊に與に鋒を争ふへからず、孫權は江東を據有し國險にして民附し、此れ與に援と爲すへく而して圖るへからず、荊州は武を用ふるの國、益州は險塞、沃野千里、若し荆益を跨有し、其の嚴阻を保ちて戎越を撫和し、好みを孫權に結び、内政治を修め、外時變を觀は、則ち霸業成るへく漢室興すへしと、備大に悦ひ遂に其説を用ひ漢土を三分して鼎足の勢を成し、備漢の昭烈帝と爲り亮を拜して丞相と爲す、亮嘗て兵法を推演して八陳の圖を作れり、魏の臣司馬懿其の營壘を案行し歎して天下の奇才と爲すに至れりと云ふ。

此の詩言ふは亮の蜀を輔けて大業を建てしは、其の功や實に偉大にして三國漢魏吳の臣皆及ぶ能はざる所たり、殊に亮の韜畧は具さに八陳の圖に見はる名成るといふ所以なり、八陳の圖形今日尙ほ存す、大水ありと雖も依然として其の形を變せず、眞に千古に堪ゆ、唯憾むらくは昭烈を輔けて早く吳を吞むの計を爲さざりしことを、果して能く吳を征して其の有と爲さは漢の事猶ほ爲すべきに、計此に出てす、身死して樞肉未だ冷かならざるに國既に敵の爲に併吞せらる、痛歎に勝ゆへけんや。

按ずるに末句諸家之を解して數説あり、東坡は昭烈の群臣の諫を用ゐず、關羽の爲に仇を報ひんと欲し大舉して吳を征し、反つて吳の敗ぶる所と爲りしを歎せしものと爲し、或は昭烈の東征を制する能はざるを以て自ら以て恨と爲せし者とせしあり、紛紛として一定せず、然とも予を以て之を按ずるに昭烈を輔けて吳を征せざりしを以て少陵の深く遺恨とせし者と爲て解するの至當なるを認む、何となれば亮の當初に昭烈に三分の策を進むるや、天下を一統するの意なきにあらざりしも、當時の勢ひ未だ二國(魏吳)に向つて鋒を交ゆるを許さざりしか故に、暫らく三分鼎立の勢ひを爲すの優れるに如かざるを稱せしも、其の最終の目